

TOHOKU
UNIVERSITY

東北大学教養教育院年報

(平成 23 年度)

東北大学教養教育院

Institute of Liberal Arts and Sciences, Tohoku University

目 次

教養教育院長の挨拶	1
1. 本学における教養教育実施の経緯	3
2. 教養教育の理念	3
3. 「井上プラン」における教養教育院構想	4
4. 初年次教育の重要性	5
5. 教養教育院の位置づけと任務	5
6. 東北大学教養教育院の構成	7
(1) 教養教育院院長	7
(2) 総長特命教授	7
(3) 教養教育特任教員	8
7. 授業担当科目（平成 23 年度）	10
8. 授業の取り組み・狙い・実施状況	15
(1) 海老澤丕道	15
(2) 森田 康夫	20
(3) 工藤 昭彦	22
(4) 前 忠彦	27
(5) 浅川 照夫	34
(6) 水原 克敏	37
(7) 藤本 敏彦	39
9. S L A の実施について	44
10. 『読書の年輪』の発行	55
11. 教養教育特別セミナーと合同講義の実施	56

12. 会議の実施状況	58
(1) 教養教育院連絡会議と総長特命教授連絡会議	58
(2) 教養教育院総長特命教授懇談会	61
13. 外国語教育について	67
14. 教養教育院活動（平成 23 年度）の自己評価と今後の課題	72
15. 東日本大震災と教養教育院	77
おわりに	87

参考資料

東北大学全学教育広報「曙光」からの転載	89
工藤 昭彦 定年後にして思う教養の三層構造	90
根元 義章 東日本大震災を体験した東北大学の役割	93

教養教育院長の挨拶

東北大学は、開学以来「研究第一」「門戸開放」を標榜し、意欲と能力を備えた俊秀を広く世界から受け入れ、世界トップクラスの研究・教育を創造し、社会に大きく貢献してきた。そして 100 周年を経た現在、東北大学は世界リーディング・ユニバーシティとして新たな 100 年を歩み始めている。東北大学が新たな歩みを始めるために、平成 19 年度に策定されたアクションプラン「井上プラン」においては、知の継承体としての「教育」がその筆頭事項に挙げられ、世界で活躍できる総合的人間力のある学生を育成し広く社会に輩出することが謳われた。また、教養教育は、人間力を高め、世界に向けて視野を広げ、専門教育の基礎を確立する観点からも学生に必要不可欠であり、より一層の充実が謳われている。また研究中心大学である東北大学として、大学院での異分野融合研究を創造していくためにも重要であることは言うまでもない。

本学は、平成 5 年 4 月に教養部を廃止し、全学教育として教養教育を行う体制に切り替えた。その間、今まで多くの教養教育に関する改革が実施された。しかし、さまざまな社会の変革をも踏まえると、より高度な教養を身に付けた学生の育成には、教養教育の重要性について再度認識を新たにし、教養教育を見つめ直す必要がある。

その一環として平成 20 年 4 月、魅力的な教養教育の実施・展開を目指すため、高等教育開発推進センターと連携して教養教育の実施及び支援を行い、創造力豊かで問題解決能力を有する指導的人材の養成に資することを目的として東北大学教養教育院が設置された。

構成員としては、教養教育への意欲と高い見識を有する人材が必要であることから、東北大学総長特命教授が担当することとなった。東北大学総長特命教授は、在職中、教育・研究において優れた業績を有し、また教育に対して強い情熱を持ち、学生諸君に多大な知的刺激を与える能力を有する、本学を定年により退職した名誉教授である。平成 20 年度は 3 名、平成 21 年度は 2 名、平成 22 年度、そして平成 23 年度に各 1 名の名誉教授が総長特命教授として任命され、教養教育院の構成員となった。今年度は 4 名が在籍している。

また、平成 21 年 10 月には教養教育の実施体制の強化および質の向上を図ることを目的として教養教育特任教員制度が立ち上げられた。優れた教育上の業績を有する本学の教員が教養教育院を兼務し、全学教育科目を担当するとともに、全学教育科目に関わる授業科目の開発および改善の業務を担当することが任務である。平成 22 年 4 月に 3 名の特任教員が任命され、教養教育院の構成員となっている。

教養教育院構成員としては、教養教育院の果たすべき業務を明確にし、いかに業務を遂行し、いかに責任を果たすかが大きな課題である。設置以来、構成員全員が、業務全般に亘り、在り方、実施方法そして改善方法について絶えず検討を加え、実施すべきと判断されたものは実行に移してきた。ここで、これまで実施してきた業務を概観してみる。

総長特命教授は全員、主要な職務として全学教育科目の講義、基礎ゼミを担当する。長年に亘る教育研究で得られた経験を存分に取り入れた講義内容で、受講した学生に、学問の広さ、深さ、重要性を説き、若者に夢と希望を与えている。総長特命教授の並々ならぬ工夫、努力に敬意を払いたい。また、総長特命教授からは、教養教育の重要性を改めて認識させられ創意工夫を加えた講義を行っているが、受講した学生からは手応えを強く感じ、また新鮮であると同時に大きな満足感を得ているとの声も耳にしている。

教養教育の重要性を多くの学生諸君に理解してもらうことは教養教育院の役割である。このために、平成 22 年度の第 2 セメスターに総長特命教授による『教養とは？—東北大学生に考えてほしいこと—』と題した合同講義を開催した。専門分野が異なる複数の総長特命教授が講義し討論することで、教養教育の重要性を理解してもらうという新しい取り組みである。受講した学生諸君からは好評であった。合同講義のアンケートに、入学時の早期に講義を受講したかったとの要望が少なくなかった。この要望に応えるべく、平成 23 年度は前期に特別セミナー、後期セメスターには合同講義を開催した。これらは教養教育院主催の合同講義であったが全学的な取り組みとして位置づけることが必要であるとのことから、平成 24 年度は学務審議会との共催で開催することとなった。今後全学的な取り組みとして定着するものと思う。

また、総長特命教授がこれまで出会った書籍の中からで学生諸君に一読を薦める書籍を紹介する小冊子『読書の年輪—研究と講義への案内』を発行している。総長特命教授各自の講義やゼミをめぐり、またその背景にある研究の一端を紹介するためにも有用であるとの考えで発行している。今年で第 3 版となっている。この小冊子は新入生に入学前に配布し、大学での勉学の準備に供することをも願っている。

教育の質の向上、実施にあたっての改善は国際的にも大きな検討課題となっており、絶えず検討を加えていかなければならない。教養教育院では定例会議において、構成員の専門分野に関わる教養教育の在り方について、議論を重ねている。検討結果は講義の場で実践に移しているとともに、全学的な委員会等で意見として発信している。

今後、教養教育を実施上、検討していくかなければならない点として、教養教育の実施の責任組織の明確化が挙げられる。大学を取り巻く、さまざまな変化に迅速、かつ的確に対応していくには責任組織が明確となることが必要である。また、教育の担当が的確に評価され、教員の業績として広く認知されることが必要である。高い評価は、教育を担当する教員のモチベーションアップにつながり、教育の質の向上につながるもので重要である。教養教育院の設置にあたっては、責任部局の一翼を担うこと、また、名譽教授の教養教育担当により、教育の評価をアップすることにつながることなどが考慮されている。

いま、多くの大学が教養教育のあり方を検討し、改革を実施に向けつつある。その中で、東北大学教養教育院は熱い視線を浴びているのは、このような背景による。教養教育院は、これまでの実績をもとに、これらの課題の解決にさらなる発展を目指しているが、それには、全学的な理解と支援が必要である。

本院の活動を自己評価の意味を込め整理総括し、これから教養教育院の活動に反映させることを目的として、毎年、年度報告書を作成している。本資料は教養教育院設置 4 年目の活動報告である。これまでと同様に、全学の多くの方々にご覧いただき、教養教育院の発展に向けて忌憚のないご意見をいただければ幸いである。

平成 24 年 3 月

東北大学教養教育院院長
東北大学理事（教育・情報システム担当）

根 元 義 章

1. 本学における教養教育実施の経緯

平成 3 年の大学設置基準の大綱化を受け、本学では平成 5 年から学部一貫教育の理念の下に教養部を廃止し、教養教育を改革した形での全学教育を開始した。しかし、全学教育を運営・統括する組織の確立が不十分であり、また、情報化やグローバル化、少子化などの時代の流れに対応したものとはならなかった（全学教育改革委員会報告、平成 12 年 4 月）。

平成 12 年 4 月 18 日、評議会において全学教育改革検討委員会報告が了承され、委員会報告に即して平成 14 年 4 月より新しい全学体制で全学教育が開始された。これは特色ある大学教育支援プログラム（特色 GP）に、全学教育の取り組みである平成 17 年度の「融合型理科実験」と平成 18 年度の「基礎ゼミ」が 2 年連続で採択されたという実績にも現れている。

平成 19 年 3 月の「井上プラン 2007」の発表を契機に、東北大学独自の教養教育カリキュラムの再構築、教養教育の実施体制の充実などの教養教育の充実化の方策が検討、実施されつつある。

2. 教養教育の理念

「知識基盤社会」と言われる 21 世紀において、人々の知的活動・創造力が最大の資源であるわが国にとって、優れた人材の養成と科学技術の振興が不可欠であり、大学教育は技能や知識の習得のみを目的とするのではなく、全人格的な発展の礎を築くものである（中央教育審議会、平成 17 年 2 月 1 日）。

21 世紀の国際社会において、政治・経済面はもとより人類の未来にはかかる地球環境問題など地球規模の諸問題解決への貢献、人類共通の知的資産の創造、新たな文化や価値観の創造などの面において、国際社会で知的リーダーシップを發揮できる人材の養成が必須である（大学審議会、平成 10 年 10 月 26 日）。

20 年 3 月の中央教育審議会大学分科会の「学士課程教育の構築に向けて」において、「大学は教育の質を高め、成績評価の厳格化を図り、卒業生の質を保証することや、大学は社会人としての基礎的能力と専門的能力を備えた卒業生を送り出すこと」が指摘されている。

社会の高度化・複雑化が進む中で、「主体的に変化に対応し、自ら将来の課題を探求し、その課題に対して幅広い視野からの柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力」（課題探求能力）と育成が重要であるとの視点に立ち、「学問のすそ野を広げ、さまざまな角度から物事を見ることができる能力や、自主的・総合的に考え、的確に判断する能力、豊かな人間性を養い、自分の知識や人生を社会の関係で位置づけることのできる人材を育てるのが、教養教育の理念・目標である（大学審議会、平成 10 年 10 月 26 日）。

「井上プラン 2007」では、「教養教育は、学生にとって人間力を高め、世界に向けて視野を

広げ、専門教育の基盤を確立するために必要不可欠であり、異分野融合研究を創造していくためにも重要であり、もって『知の創造体』を担う高度な教養、専門的な知識および国際的な視野を備えた指導的人材を育成する」と謳われた。

3. 「井上プラン」における教養教育院構想

「知識基盤社会における大学教育の量的拡大（ユニバーサル段階）を積極的に受け止めつつ、社会からの信頼に応え、国際通用性を備えた学士課程教育の構築を目指す」ことが平成20年3月の中央教育審議会大学分科会の「学士課程教育の構築に向けて」において提唱されている。

本学が名実ともに「世界リーディング・ユニバーシティ」であるためには、知の継承体としての「教育」が重要であり、その継承者を広く社会に輩出することが主要な社会貢献の一つである。

このような理念の下に具体策として、①東北大学独自の教養教育カリキュラムの再構築、②教養教育の実施体制の充実、を提示し、世界へ飛翔するための英語能力を強化し国際的感覚を身につけること、さらには独創的研究や異分野融合の研究の創造に不可欠な大学院生対象の教養教育を創出することなどを目標としている（総長井上明久、「曙光」平成20年4月号）。

井上プラン2007（2009年度改訂版）および井上プラン2007（2010年度改訂版）では、「教養部の廃止以降、高等教育開発推進センターを中心に教養教育を推進し、実績を上げてきたが、より高度な教養を身に付けた学生の育成には、教養教育の実施体制の更なる整備が必要である。また、国際コミュニケーション能力をはじめとする教養教育を担える幅広い知識と経験のある教員を確保し、学部から大学院へつながる研究の面白さを理解させる講義の充実が急務となっている。このような実施体制の充実の一環として、平成20年度から総長特命教授（教養教育）の発令を行い、その所属組織である教養教育院を創設した。」と教養教育を重視する方向性に至る経緯を明らかにしている。

教養教育重視の具体的なプランとして、①教員の資質の一層の向上を図るとともに、教養教育に対し意欲的に取り組む教員を積極的に確保する。あわせて、当該教員に対するインセンティブ及び評価方法について検討する。②教養教育に取り組む教員を「教養教育特任教員」として教養教育院に兼務する制度を導入する。③教養教育を総合的に統括し、科目設定、教員人事、学生支援等に責任を持つ組織体制を整備する。④学生の教養教育の理解を深めるため、スチューデントアドバイザーリー制度（仮称）を導入する。助教やTA、RAとも連携した効果的な教育体制の確保を図る。以上の4点を提議した。

これらを具体的に遂行するための一つとして、「幅広い知識と深い研究経験のある退職教授を総長特命教授（教養教育）として配置し、研究中心大学として、初年次学生ばかりでなく大学

院生も対象として教養教育を担う」制度を新設された（平成 20 年度）。さらに、「教養教育に取り組む教員を教養教育特任教員として教養教育院に兼務する制度を検討する」ことが決定された（平成 22 年度）。これが「教養教育院」構想である。

4. 初年次教育の重要性

平成 20 年 3 月の中央教育審議会大学分科会の「学士課程教育の構築に向けて」において学士課程教育における初年次教育の重要性が指摘され、「初年次教育は高等学校や他大学からの円滑な移行を図り、学習及び人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく、おもに新入生を対象に総合的に作られた教育プログラム」と位置付けられている。これを受け、大学として「学びの動機付けや習慣形成に向けて、初年次教育の導入・充実を図り、学士課程全体の中で適切に位置づける」ことが今後の改革の方策として述べられている。

さらに、「大学生活への適応、当該大学への適応（自分の居場所作り、自校の歴史の学習等）、大学で必要な学習方法・技術の会得、自己分析、ライフプラン・キャリアプランづくりの導入などの要素を体系化する（例：フレッシュマンゼミ、基礎ゼミなど）。また、きめ細かな学習アセスメントを実施し、学生の現状や変化の客観的な把握に努める」ことが示されている。

5. 教養教育院の位置づけと任務

これまで、教養教育の改革として、学部の枠にとらわれない少人数教育としての「基礎ゼミ」、文科系の学生を対象にした自然科学総合実験の創出、英語教育の充実などが実施されてきた。さらに、高い能力を持つ本学学生が学ぶことへのモチベーションを高め、大学入学当初から学生の学習への興味を引き出すことが必要であるとされた。

本学の「教養教育プロジェクト・チーム報告書」（平成 19 年 9 月 28 日）において、「特命教授」は「研究の基本姿勢やその魅力と醍醐味などを直接学生に伝えることによって、本学の新入学生に対して大学という学びの場における新たな知的刺激を与え、学習意欲や研究意欲の更なる向上を図ることに貢献する」と答申され、「特任教員」制度については、「教養教育に対する強い情熱と優れた教育能力を有する本学の教員を、本学の教養教育を専ら担当する「(教養教育) 特任教員」として総長の直接の任命により任用する」制度とされている。

「特命教授」は、同報告書「(教養教育) 特務教授」（仮称）制度（案）の概要」の「1. 位置づけと任務」の項目の中で、次のように規定されている。

- (1) 在職中に教育・研究で優れた実績を有し、教育に対して情熱を持つ、本学の退職教授を、定年退職後に本学の教養教育科目を担当する教員として再雇用する制度

- (2) 総長より特別に教養教育を主な任務として任じられた教員
- (3) 学生の学習意欲を高め、研究の真髓と面白さを伝えるなど、研究大学にふさわしい魅力的な教養教育を創出する教員

「特任教員」は、同報告書「(教養教育) 特任教授」(仮称) 制度 (案) の概要」の「1. 位置付けと任務」の項目の中で、次のように規定されている。

- (1) 教養教育に対する強い情熱と優れた教育能力を有する本学の教員で、教養教育を中心とする教育・研究を行うことを任務とする教員制度
- (2) 総長により特別に教養教育を主な任務として任じられた教員
- (3) 学生の学習意欲を高め、研究大学にふさわしい魅力的な教養教育を創出する教員

6. 東北大学教養教育院の構成

教養教育院は、平成 23 年 4 月 1 日現在、以下のように構成されている。

(1) 教養教育院院長

根元 義章（ねもと よしあき）

東北大学理事（教育・情報システム担当）

(2) 総長特命教授

・海老澤 丕道（えびさわ ひろみち）

東北大学助教授、教授、情報科学副研究科長、平成 19 年 3 月定年退職

現 在：総長特命教授（教養教育院）、東北大学名誉教授

研究領域：物性物理学理論、ゆらぎ科学

教育実績：情報科学研究科・工学研究科・工学部における授業と研究指導

全学教育における物理学 A・同 B・基礎ゼミ・現代学問論担当

東京大学・名古屋大学・九州大学における集中講義

東京電機大学・東北工業大学・東北文化学園大学・仙台高専非常勤講師

主な受賞：昭和 48 年 9 月仁科財団海外派遣研究者

学会活動：日本物理学会、数式処理学会、日本ゆらぎ現象研究会

・森田 康夫（もりた やすお）

北海道大学助教授、東北大学助教授、東北大学教授、東北大学評議員、東北大学総長特別補佐（交通）、平成 21 年 3 月定年退職

現 在：総長特命教授（教養教育院）、東北大学名誉教授

研究領域：数学（整数論）、数学教育、入学試験

教育実績：全学教育科目：基礎ゼミ、基幹科目（現代学問論、自然論）、展開科目（総合科目）、数学（線形代数学、数理統計学、解析学 D）

東北大学理学部及び理学研究科における授業と研究指導

北海道大学における授業と研究指導

宮城大学における数学概論

東北学院大学における線形代数学

北海道大学、岩手大学、埼玉大学、東京大学、都立大学、名古屋大学、金沢大学、京都大学、大阪大学、広島大学、九州大学、プロンペイ王立大学等における集中講義

主な受賞：作行会奨学生

学会活動：日本数学会（元理事長、監事）、日本数学協会、日本数学教育学会、国際教

育学会（顧問）

・工藤 昭彦（くどう あきひこ）

東北大学助教授、教授、農学研究科長 平成 22 年 3 月定年退職

現 在：総長特命教授（教養教育院）、東北大学名誉教授

研究領域：農業経済学

教育実績：農学部および農学研究科における授業と研究指導

岩手大学、北里大学における集中講義

学会活動：現在、東北農経学会会員

・前 忠彦（まえ ただひこ）

東北大学助教授、教授、平成 19 年 3 月定年退職、東北大学客員教授

現 在：総長特命教授（教養教育院）、東北大学名誉教授

研究領域：植物栄養学、植物生理学、作物生産生理学

教育実績：農学部および農学研究科における授業と研究指導

全学教育における基礎ゼミ、総合科目（カレントトピックス）、

短期留学生プログラムにおける講義

東京大学・岩手大学・千葉大学・秋田県立大学等における集中講義

JICA 海外研修員研修プログラムにおける非常勤講師

主な受賞：日本土壤肥料学会賞、日本土壤肥料学会欧文誌(Soil Science and Plant Nutrition)論文賞

学会活動：日本土壤肥料学会（元欧文誌編集長、評議員）、日本植物生理学会（元欧文

誌編集委員、評議員）、日本光合成学会（役員）、日本農芸化学会（元評議員）、

日本無菌生物ノートバイオロジー学会（元理事）、New Phytologists（元
Board of Advisors のメンバー）

（3）教養教育特任教員

・浅川 照夫（あさかわ てるお）

北見工業大学講師、助教授、金沢大学助教授、東北大学助教授、教授、国際文化研究科長

現 在：東北大学高等教育開発推進センター教授、教養教育特任教員

研究領域：英語学、英語教育

教育実績：全学教育科目：英語 A1、英語 A2、英語 B1、英語 B2、英語 C1、英語 C2

国際文化研究科における研究指導

学会活動：日本英文学会、日本英語学会、Linguistic Society of America

・水原 克敏（みずはら かつとし）

東北大学教育学部講師、同助教授、同教授、教育学研究科教授、東北大学評議員、教育学研究科副研究科長
現 在：教育学研究科教授、教養教育特任教員、評議員、総長特任補佐、東北大学デイストイントイッシュト・プロフェッサー
研究領域：カリキュラム、教員養成
教育実績：教育学部及び教育学研究科における授業と研究指導
全学教育における基礎ゼミ「現代の教育問題について解決策を提案する」、
展開科目「学校を考える」、展開科目「教育学」
筑波大学、京都大学、麗澤大学等で集中講義
主な受賞：東北大学総長教育賞、全学教育貢献賞、東北大学沢柳賞、モンゴル国教育文化科学省より教育分野功労者賞
学会活動：日本教育学会（元理事）、日本教師教育学会（理事）、教育史学会（元紀要編集委員）、東北教育学会会長、日本教育方法学会理事。日本カリキュラム学会代表理事
その他：東北大学出版会理事・編集委員、東北大学学校ボランティアを組織

・藤本 敏彦（ふじもと としひこ）

東北大学助手、Turku大学(フィンランド)・日本学術振興会 特定国派遣研究員、東北大学講師、東京都老人総合研究所・協力研究員
現 在：教養教育特任教員、高等教育開発推進センター准教授、医学系研究科・障害科学専攻・機能医科学講座・運動学准教授(兼任)、創生応用医学研究センター・スポーツ医学コアセンター・プロジェクト長(兼務)、大学教育支援センター・研究開発委員
研究領域：スポーツ科学、運動学、生理学
教育実績：全学教育および医学系研究科・障害科学専攻における授業と研究指導
全学教育「基礎ゼミ」「スポーツA」「スポーツB」「体と健康」「生命と自然」担当
医学系研究科「大学院後期課程の博士論文指導」担当
筑波大学、鹿屋体育大学における特別授業・セミナー
主な受賞：European College of Sports Science Young Investigators Award, Copenhagen, Denmark, - 1997、第60回日本体力医学会奨励賞, 岡山 - 2005.
学位：博士（医学）
学会活動：日本体力医学会（評議員）、European College of Sports Science、日本体育学会、日本運動生理学会、日本核医学会、日本疲労学会
研究室：川内北キャンパス合同研究棟5階 536号室
E-mail:tfujimoto@m.tohoku.ac.jp

7. 授業担当科目（平成 23 年度）

(1) 海老澤 不道

(第 1 セメスター)

- ・基幹科目（自然論） 「自然界の構造」 おはなし物理学 物理未習者向
木曜日 2 時限 対象：文系・理・医・農 受講学生数：136 名
- ・展開科目（総合科学（総合科目）） 「科学と人間」 人はなぜ科学をするか、科学
は人に何をもたらすか：物理学の場合
火曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：104 名
- ・共通科目（転換・少人数科目） 「基礎ゼミ」 「ゆらぎ」を科学する
月曜日 4、5 時限隔週 対象：全学部 受講学生数：21 名
- ・共通科目（転換・少人数科目） 「基礎ゼミ」 創造的な研究とは：ノーベル物理
学賞に学ぶ
月曜日 4、5 時限 対象：全学部 受講学生数：21 名

(第 2 セメスター)

- ・基幹科目（自然論） 「自然界の構造」 おはなし物理学 物理未習者向
月曜日 3 時限 対象：文系 受講学生数：331 名
- ・基幹科目（自然論） 「自然界の構造」 おはなし物理学 物理既習者向
火曜日 1 時限 対象：文系・理・医・農 受講学生数：113 名
- ・基幹科目（自然論） 「自然界の構造」 おはなし物理学 物理既習者向
木曜日 2 時限 対象：経・保・歯・薬・工・農 受講学生 249 名
- ・展開科目（総合科学（総合科目）） 「科学と人間」 人はなぜ科学をするか、科学
は人に何をもたらすか：物理学の場合
火曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：48 名
- ・展開科目（総合科学（総合科目）） 「科学と人間」 人はなぜ科学をするか、科学
は人に何をもたらすか：物理学の場合
木曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：29 名
(内、宮城第一高等学校生 1 名)

(2) 森田 康夫

(第 1 セメスター)

- ・基幹科目（自然論） 「科学と情報」 数学と人間－数学を俯瞰する
木曜日 2 時限 対象：文系・理・農 受講生 77 名
- ・共通科目（転換・少人数科目） 「基礎ゼミ」 学校教育の在り方と入学試験の功罪
を考える
木曜日 5 時限 対象：全学部 受講生 21 名

(第2セメスター)

- ・基幹科目（自然論） 「科学と情報」 数学と人間 – 数学を俯瞰する
木曜日 2 時限 対象：経・保・歯・薬・工・農 受講生 112 名
- ・展開科目（総合科学（総合科目）） 「教育と科学技術」
火曜日 5 時限 対象：全学部 受講生 24 名

(3) 工 藤 昭 彦

(第1セメスター)

- ・共通科目（転換少人数科目） 「基礎ゼミ」 「農」的世界の可能性—ポスト工業化社会の展望
月曜日 3 時限 対象：全学部 受講学生数：20 名
- ・共通科目（転換少人数科目） 「基礎ゼミ」 現代世界の「食」—飽食と飢餓の構造—
木曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：22 名
- ・展開科目（総合科学（総合科目）） 時代の文脈からみた「食」と「農」
火曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：117 名
- ・展開科目（総合科学（総合科目）） 時代の文脈からみた「食」と「農」
金曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：41 名
- ・基幹科目（社会論） 資本主義と農業—世界恐慌・ファシズム体制・農業問題—
火曜日 1 時限 対象：医・保・歯・薬・工 受講学生数：114 名

(第2セメスター)

- ・基幹科目（社会論） 資本主義と農業—世界恐慌・ファシズム体制・農業問題—
火曜日 1 時限 対象：文系・理・農 受講学生数：158 名
- ・展開科目（総合科学（総合科目）） 環境と経済・社会の調和に関する多様なアプローチ
月曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：17 名
- ・展開科目（総合科学（総合科目）） 環境と経済・社会の調和に関する多様なアプローチ
火曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：22 名

(4) 前 忠 彦

(第1セメスター)

- ・展開科目（総合科学（総合科目）） 「植物面白考—巧みな生存戦略と私達のくらしー」
火曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：76 名
- ・展開科目（総合科学（総合科目）） 「植物面白考—巧みな生存戦略と私達のくらしー」
金曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：51 名
- ・共通科目（転換・少人数科目） 「基礎ゼミ」 植物はすごい！—地球、わたし達のくらしのなかで果たす役割を探る—

月曜日 3-4 時限（隔週） 対象：全学部 受講学生数：10名

- ・共通科目（転換・少人数科目）「基礎ゼミ」 植物はすごい！－地球、わたし達のくらしのなかで果たす役割を探る－

月曜日 3-4 時限（隔週） 対象：全学部 受講学生数：4名

(第2セメスター)

- ・展開科目（総合科学（総合科目））「植物面白考－巧みな生存戦略と私達のくらし－」

火曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：18名

- ・基幹科目（自然論） 「生命と自然」 地球の命支える“植物の光合成”をひもとく

月曜日 4 時限 対象：文系・理・農 受講学生数：66名

- ・基幹科目（自然論） 「生命と自然」 地球の命支える“植物の光合成”をひもとく

水曜日 3 時限 対象：医・歯・薬・工 受講学生数：14名

- ・基幹科目（自然論） 「生命と自然」 地球の命支える“植物の光合成”をひもとく

木曜日 3 時限 対象：文・教・法・保 受講学生数：73名

(5) 浅川照夫

(第1セメスター)

- ・共通科目英語 「英語 B1」

水曜日 1 時限 対象：医・歯・薬 受講学生数：82

水曜日 3 時限 対象：農 受講学生数：40

木曜日 3 時限 対象：工 受講学生数：43

金曜日 1 時限 対象：文・教 受講学生数：63

金曜日 2 時限 対象：理 受講学生数：36

(第2セメスター)

- ・共通科目英語 「英語 A2」

月曜日 3 時限 対象：理 受講学生数：37

- ・共通科目英語 「英語 B2」

月曜日 1 時限 対象：経 受講学生数：34

木曜日 3 時限 対象：工 受講学生数：46

金曜日 1 時限 対象：文・教 受講学生数：68

(第3セメスター)

- ・共通科目英語 「英語 C1」

木曜日 1 時限 対象：法 受講学生数：25

(第4セメスター)

- ・共通科目英語 「英語 C2」

水曜日 1 時限 対象：医・歯 受講学生数：63

木曜日 1 時限 対象：法 受講学生数：19

(6) 水 原 克 敏

(第1セメスター)

- ・展開科目（人文科学） 「教育学」（文系） 学校の役割は何か
火曜日 2講目 対象：文系学部 受講生 83名
- ・共通科目（転換・少人数科目） 「基礎ゼミ」 現代の教育問題について解決策を提案する
月曜日 3講目 対象：文系学部 受講生 16名

(第2セメスター)

- ・教職に関する科目 「教職課程論」 学習指導要領が目指す人間像
集中講義 対象：全学部（歯学部を除く） 受講生 177名
- ・展開科目（総合科学（総合科目）） 「総合科目」 学校に関する教育学・心理学等の諸科学の研究と方法
木曜日 5講目 対象：全学部 受講生 29名

(第3セメスター)

- ・展開科目（人文科学） 「教育学」（理系） 学校の役割は何か
木曜日 3講目 対象：文系・理・薬・農 受講生 51名

(7) 藤 本 敏 彦

(第1セメスター)

- ・共通科目 スポーツA 「ソフトボール」
水曜日 2時限 対象：医・歯・薬 受講学生数：44名
- ・共通科目（転換・少人数科目）「基礎ゼミ」 マッスル
月曜日 3時限 対象：全学部 受講学生数：20名
- ・基幹科目 生命と自然 身体運動の仕組みと筋力
火曜日 1時限 対象 全学部 受講生：273名
- ・基幹科目 生命と自然 ヒト・人を知る 「疲労と限界」（一部担当）
水曜日 1限目 対象：全学部 受講学生数：157名

(第2セメスター)

- ・共通科目 スポーツA 「ソフトボール」
火曜日 3時限 対象：農 受講学生数：45名
- 木曜日 2時限 対象：法 受講学生数：61名
- 金曜日 3時限 対象：理 受講学生数：35名
- ・共通科目 体と健康 「身体の文化と科学」（一部担当）
月曜日 4時限 対象：全学部 受講学生数：113名

(第3セメスター)

- ・共通科目 スポーツA 「ソフトボール」
 - 火曜日 2 時限 対象：工A 受講学生数：64名
 - 火曜日 4 時限 対象：工B 受講学生数：54名
 - 水曜日 4 時限 対象：工C 受講学生数：24名
- ・共通科目 スポーツB 「ソフトボール」
 - 水曜日 3 時限 対象：全学部 受講学生数：24名
- ・共通科目 スポーツB 「武道」
 - 金曜日 2 時限 対象：全学部 受講学生数：21名
- ・共通科目 スポーツB 「武道」
 - 木曜日 3 時限 対象：全学部 受講学生数：13名

(第4セメスター)

- ・共通科目 スポーツB 「武道」
 - 水曜日 3 時限 対象：全学部 受講学生数：4名

8. 授業の取り組み・狙い・実施状況

(1) 海老澤 不道

a. 教養教育院教授としての授業の狙いと取り組み

教養教育院には特命教授の研究上の知識と経験を生かしたモチベーションを高める授業科目と授業運営が求められている。

これを踏まえて、基幹科目類自然論群の一科目「自然界の構造」の一つとして「おはなし物理学」を、展開科目類総合科学群総合科目の一科目として「科学と人間」、基礎ゼミとして「ゆらぎを科学する」と「創造的な研究とは：ノーベル物理学賞に学ぶ」を企画し、授業の狙いを次のように定めた。

- ① 主体的な学びの態度をとらせ、学問や研究に対して各自が個性的に考える態度を身につけさせ、その能力を伸ばす
- ② 学問の系統性・古典から現代への進歩と研究の意味などを理解させ各自の学びの姿勢に生かす気持ちを育てる
- ③ 何を知るべきか、何を為すべきか、といった科学の永遠の課題にそれぞれに立ち向かう力を育てる
- ④ 研究についての意識を育てる

各科目における取り組みの主要な点は次の通りである。

「おはなし物理学」

- ① 研究してきた立場から、なぜ物理学がおもしろいか、どのような学問なのか、どのようにしてその学問として成り立ってきたのか、これからどう研究していくのかについて伝える
- ② 高校で物理を学んでは来なかつた学生に対しては、物理学の考え方・体系・諸学問の中での役割を把握できるような内容とする
- ③ 学んできた学生に対して、物理現象から自発的に考えるような内容とし、さらに現代の物理学の考え方、これからの物理学の目指しているもの、などを理解させ、それぞれに学業への動機付けを得る機会とする

「科学と人間」

- ① 人類が知識や能力を獲得してきた研究の活動のすばらしさを伝え、学生が自らなすべきことについて考えさせる
- ② 科学の研究がもつ人間的・社会的な意味を考えさせる

「基礎ゼミ」

- ① 自ら学び課題を探し他の学生とのコミュニケーション、協力、発表や討論を経験させ、能力を高めるため、ゼミの環境を整える

b. 各授業の実施状況

①基幹科目（自然論） 「自然界の構造」 おはなし物理学

授業の組み立て、内容、実施方法について、平成 22 年度に行ったことを基本的に継承した。絵や写真と動画によるシミュレーションディスプレイを含むパワーポイントのスライド、そのハンドアウト配付、授業の最後の 15 分程度を使って Quiz 解答と感想や意見を A4 紙に書かせる授業内レポートは本年度も継続した。ここでは、本年度特筆すべきことを述べる：

- i. 受講希望者がさらに増加した。1 セメスター実施の未習学生向けのクラスで約 50 名前年度より多く、2 セメスター実施の既習学生向け（工学部学生が大半を占める）では約 150 名増加した。ただし 2 セメスターの文系向け（未習者向け）クラスは工学部学生の他組履修を認めなかつたため、約 40 人減少し、C200 教室に収容できる状況になった。
- ii. 多人数履修のクラス（2 セメの未習者クラスと、工学部学生中心の既習クラス）では、授業に集中しない学生が多く見られること、Quiz 解答など授業レポートの取り組む様子が十分でない学生が目立つこと、など問題があるように感じられた。
- iii. 既習者クラスでは、高校物理の範囲と現代物理学の両方を扱うことを試みたが、高校物理の範囲でも理解が不十分な様子の学生が見られた。説明を丁寧にして繰り返すことにより理解は進んだ一方、従来からの課題だったこれらの間の時間配分について、解決できなかつた。
- iv. 授業レポートの整理に 2 セメスターの既習クラスで 1 名だけ TA の手伝いを得た。解答の傾向についてまとめること、良くできた答案の抽出などの業務に当たることができたが、履修者数が多いため、TA の人数を増す必要があると感じた。募集したが、応募者が 1 名だけであったため、増員できなかつた。
- v. 昨年度に引き続き、情報科学の学生が TA としてプログラミングを担当して物理系シミュレーションとその可視化によるデモアニメーション準備に当たつた。これらを ISTU にアップロードすることにしたが、実現は来年度の課題となつている。
- vi. 成績評価は、1 セメスターでは授業回数の都合で、授業期間終了後提出最終レポートと、毎回授業レポートによつた。最終レポートは各自それぞれに独自のレポートを作成したと認められ、目標達成度の評価ができた。2 セメスターでは昨年度なみに最終レポートを試験形式に戻した。試験形式の利点は、時間を限つてゐるため、準備状況を反映した評価がされること、セメスターを通じての授業課題への取り組みによって備わつたと思われる能力が反映されることであろう。
- vii. 最終レポート・試験の記述から、物理学の考え方の理解が深まつたこと、自分で考える力が伸びたなど、目標がある程度達成されていることがうかがえる学生が、従来に比して増えた。授業で受け身に終始したために分かり易かつた・楽しかったという反応に止まつてしまふ学生は減つたようだ。

②展開科目（総合科学（総合科目）） 「科学と人間」 人はなぜ科学をするか、科学は人に何をもたらすか：物理学の場合

授業の組み立て、内容、実施方法について、平成22年度に行ったことを基本的に継承した。すなわち、各回とも、前回の復習を兼ねて学生のコメントシートから選択したテーマと要旨の紹介に私の批評や補足を述べること、その回のテーマについての講義をパワーポイントと配付資料を用いて行うこと、15分程度時間をとって、学生それぞれの感じたことを考えたことをコメントシートに書かせること、というスタイルも継承した。口頭での意見発表や討論は、学生が積極的でなかったため、行わなかった。

特に今年度の実施について記すべき点を挙げる：

- i. 学生からのコメントは、既に考える力書く力をそれなりに有している学生が多く、力作も例年より多かった。他方で、書く事が見つからないと訴える学生も見られ、その学生達が次第に書く力を持つような指導をすることが課題である。毎回アドバイスやコメントをつけて返すことにより次回に楽に書くことができれば良いが、今のところはそう簡単ではないようだ。
- ii. 最終レポートには、単なる科学者紹介と自分の感想、といった単純なものは少なくなり、議論や提案を含むようになってきたことは、指導が行き渡りやすくなつたことを表しているかも知れない。しかし、まだ、「自分なりの内容」「他の人では書けない内容」を書くべきであることが浸透していない。
- iii. 文系学生によく考える人が多いが、理学部と工学部に文系的な能力の高い履修学生が従来よりも増えた。
- iv. 高大連携事業による高校生の履修があった。後期の1クラスで1人が履修し、熱心に積極的に参加したことにより、クラス全体に良い影響があった。

③共通科目（転換・少人数科目） 「基礎ゼミ」 「ゆらぎ」を科学する

「ゆらぎ」の概念について講義で概略の説明を行い、分析するための数理的方法の基礎を演習で理解させたのち、グループを作つてそれぞれに対象を定めてその「ゆらぎ」の計量的把握、分析と考察を進めさせた。その過程で各自の興味と分析・考察を互いに発表し合い、討論する力を育てることを目指した。またグループでの共同作業により協力と分担について体験させた。

学生の選んだテーマは、「人の声のゆらぎ 1/f?」、「オーロラの光」、「梅雨入り梅雨明けに見るゆらぎ」、「服飾デザインの流行におけるゆらぎ」、「人の行動・ルート選択を見るゆらぎ」「信号待ちにおける人の時間感覚のゆらぎ」などにおけるそれぞれのゆらぎについての分析や、人の関わり方についての考察である。熱心なグループではそれなりのレベルまで到達した。データを集めるために学内の教授にお願いに行く積極性が良かった。不熱心な学生に対しては有効な激励策が見つけられなかった。基礎ゼミ形式の限界はあろう。

このテーマにおける研修は2時間限を続いて使えることが望ましく、隔週で実施した。空いた週がグループごとのデータ集めの機会になったようである。

④共通科目（転換・少人数科目）「基礎ゼミ」 創造的な研究とは：ノーベル物理学賞に学ぶ

ノーベル物理学賞を与えられた研究者とその研究を取り上げて、調べたことに考察を加えて発表するものである。はじめの1回に導入の講義をする他は、ほとんど全て学生の自主性に任せ、教員は参考書の用意と、発表の時に質問やアドバイスをするだけとした。受賞記録一覧からテーマを各自選び、それに基づいて全員を6グループに分けて、調査・考察・発表をグループ単位で行った。第2回と第3回を準備の意見交換とし、第4回～第15回を各2グループずつ、中間発表と最終発表に宛てた。医学部の学生が参加したが、生理学・医学賞に関係して免疫について調べて発表したことは大変良かった。

グループにより様々な形式での考察や発表ができたが、およそ、受賞内容よりも研究の背景となる基礎の部分への興味を抱いたり、調査によって知識を得たりした効果、また受賞の背景やいきさつの調査などから、研究の創造性や未開拓分野志向といった研究のモチベーションについて考える機会となったこと、などが成果としてあげられる。

教員の専門分野（物性論）では分野的に偏るため、昨年度と同じ原子核物理学専攻の博士課程学生1名をTAとして学生へのアドバイスや質問を補助させて、効果があった。

c. 学生授業評価とその評価に基づく改善

①基幹科目（自然論） 「自然界の構造：おはなし物理学」 未習者向け

各セメスターに1クラスずつ実施した。授業評価結果に表れた共通の傾向は、授業の分かり易さと進む速さの評価値が科目平均を下回ることである。物理学の講義を、知的好奇心旺盛な学生の要求に応える構成を保ちながら易しい内容にするためには、対象の選択や説明の工夫にかなりの準備時間が必要である。セメスターごとに新しい題材を追加し、枝葉を整理して、分かり易いようにプラスアップしているが、未だに道半ばと言うべきであろう。受講者にも、受け身的な理解ではなく、積極的に考えて、応用する姿勢と力を身につけより進んだ学びへの動機付けを得ることを目標にしてほしいと訴えたい。

1セメのクラスで、総合評価が基幹科目平均と同程度に留まったが、これは昨年度よりも低い。理由はもしかすると、約5割履修者数が多くなったからかも知れない。さらに2セメのクラスでは、科目平均を目立って下回った。2セメのクラスで低い傾向は昨年度から続いている。履修学生数が昨年度から300人を超したため基礎知識の個人差は否めず、少しでも内容がわかりにくかった場合の対応力が履修者全体としては低下していると見ている。対応策として、次年度には、内容の改善と同時に、熱意を持った学生を対象とするクラスになるよう、受講者数増大の抑制を図りたい。

学生自身の評価として関連学習をしたと答える割合が他の科目類はもちろん、基幹科目の中でも低くなっている。手頃な参考書や教科書がないことはその大きな理由であろうが、予習できないならば復習で学びを深めて欲しいと思う。このため、また前述の熱意を持った学生を集める対策として、次年度には毎回の宿題レポートを積極的に利用するつもりで

ある。レポートに目を通す負担を当面覚悟している。

授業における緊張感を増す努力が重要である。時間の最後に示される Quiz 問題が最後まで明かされないよう、問題文を配付資料本文と分離して時間をずらすことも効果的であろう。

学生から内容の量を減らしてゆっくりていねいに進めることを求める声がある。授業内容として、個々の事柄を分かり易くすることの他に、多くの知識の供与ではなく筋道が見える組み立てであることが、科目の目的に合っていると考える。根本的な法則の理解を求めることと、応用の方向を示すにとどめて枝葉を目的にはしないことを旨としたい。

②基幹科目（自然論） 「自然界の構造：おはなし物理学」 既習者向け

2セメスターにのみ2クラス実施した。授業評価結果で共通に言えることは、授業以外の学習をした学生の割合が低いことである。これに応じた改善策も、未習者向けクラスと同様に考えている。また、授業の分かり易さと進む速さの評価値が科目平均を目立って下回ることも、共通である。高校で物理を学んでいるにもかかわらず、また授業内容に未習者向けの色が残っているのに、理解度が十分ではない原因には、授業が未習者向けクラスほど説明をゆっくりとしていないこと、レベルの高い内容を盛り込んでしまったこと、などが考えられる。その一方で、自由記述には、内容が中途半端だと指摘があり、いつそ上のプラッシュアップの必要がある。

一方のクラスは理学部学生が多く人数が約100人であり、他方は工学部学生が多く200人を超す。前者では、全体として肯定的好意的に解釈する学生が70~80%を占めているのに、後者では、それよりも10%ほど低い。後者では、全体を通じて完全に否定的な評価をする学生が一定数（5%）存在し、自由記述に厳しい複数の意見が見られたが、人数の多さが多様性をもたらしていると考えている。改善には、初回から授業の目的をよく説明して、学生の意識とずれがないように図ることが有効であろう。

高校で物理を学んだ学生でも、理解力が十分に備わっているとは限らない。そうなると、教科書がない授業としては復習しやすい資料が整っている必要があろう。課題として考えたい。

③展開科目（総合科学（総合科目）） 「科学と人間」 人はなぜ科学をするか、科学は人に何をもたらすか：物理学の場合

年間合計3クラス実施した。ここまで4年間同じ内容を、若干の追加と整理以外大きな変更をしないで続けてきたが、学生の授業評価は一定しない。ほとんどの場合、総合評価は科目平均より良く教員が熱心だという評価になったが、例外もある。受講者数が少ないとき評価の数値は高く、多かったときは評価が下がる。しかし、今回の1セメのクラスは受講者数が約100人、この授業としては多人数ながら満足感・総合的のいずれの評価も平均よりも高かったことは、震災で1ヶ月授業開始が遅れたこの学年の学生の意識の高さによる、と考えている。不思議だったことは、2セメの一方のクラスでは、約30

人であったが、評価の多くの項目にわたり「どちらとも言えない」とする回答の割合が目立つて多かったことである。

授業以外に関連学習をしたという学生の割合が多い。クラスによって違うが、科目平均よりも20%あるいは10%高い。中間・最終と2度のレポートを書く際によく調べていることが関係しているのであろう。

この科目的目的目標通り履修によって考える力・発信する力や態度が身についたかどうかを学生が実感するためには、最初に力不足だった受講者が最後までに上達することが必要である。必ずしもそうはない傾向を改善する必要がある。授業に対する満足感や達成感が薄いと総合評価が上がらないのかも知れない。

④共通科目（転換・少人数科目） 「基礎ゼミ」「ゆらぎ」を科学する

総合的評価で「非常によい」とする学生の割合が、科目平均の半分しかない。「良い」に留まっている。ゼミの内容がテーマ名から予想するよりも実際には難しいことと、良い調査対象を思いつくかどうかで満足のいく結果が得られるかどうかが決まる傾向があるので、履修者による評価が分かれたと思う。導入の講義が理解しにくかったのかも知れない。また、学生が教員からの説明に頼る一方で、教員は学生それぞれの創意工夫を期待しているというミスマッチがあるのかも知れない。

次年度はこのテーマを開講しないことにしているが、再開する場合、ゼミの期間全体が見通せるような導入講義をすることで、学生の動機付けがばやけずに調査・解析・考察・発表が進められるよう指導したい。

⑤共通科目（転換・少人数科目）「基礎ゼミ」 創造的な研究とは：ノーベル物理学賞に学ぶ

満足度が科目の平均よりも目立つて高かった。これは学生達がそれぞれ良くやったと思ったことの現れだが、それが総合的に非常に良かったとする評価にも繋がった。教員の役割は、発表に対するその場での評価や、討論の方向付けに尽きているが、その中で学生にとって取り組みやすい達成目標を設定したこと、終わったときの達成感が生まれたと思う。また、医学部の学生には生理学医学賞に学ぶ、化学系の学生には化学賞に学ぶというアレンジが出来たことも満足度に繋がったと思う。

特に、並外れて高い評価値だったのは学生自身の自己評価項目で自習と授業時間以外の学習についてであった。いかに自主的な努力を惜しまなかつたかを示している。

改善点としては、年度によって起こりうるテーマの偏りの予防対策を挙げておく。素粒子・宇宙論などに偏ることがないよう、シラバス提示や初回のオリエンテーションを工夫したい。

(2) 森 田 康 夫

a. 教養教育院教授としての授業の狙いと取り組み

(第1セメスター)

①基幹科目（自然論） 「科学と情報」 数学と人間 — 数学を俯瞰する

文明の成立と共に数学（算数）が成立し、デカルトやニュートンの研究により「科学を語る言葉」としての数学の役割が確定し、さらに最近は画像診断や通信などで数学の新しい応用が行われている。この様な数学発展の歴史と最近の数学の問題を紹介し、数学や科学は長い時間をかけて発展し、その結果私たちの豊かな生活があることを示すことを目標とした。

②共通科目（転換・少人数科目）「基礎ゼミ」 学校教育の在り方と入学試験の功罪を考える

入学試験を受けて入学したばかりの学生に、自分たちが受けた高等学校教育の功罪を振り返って貰い、これから大学教育を受けるための基礎認識として貰うことを目指した。またこれを通して、自分を囲む環境を客観的に見て、自分の意見を説得力を持って発言する訓練を目指した。

(第2セメスター)

①基幹科目（自然論） 「科学と情報」 数学と人間 — 数学を俯瞰する

第1セメスターの「科学と情報」の授業と同様に、数学発展の歴史と最近の数学の問題を紹介し、数学や科学は長い時間をかけて発展し、その結果私たちの豊かな生活があることを示すことを目標とした。

②展開科目（総合科学（総合科目）） 「教育と科学技術」

震災と原発事故を受け、シラバスを変更し、「地震」についての解説を2回、原発事故についての解説を2回行った他、今の世界に科学技術がどのように役立っているか、それを支える人材を育成する日本の教育はどうなっているかなどを学生と一緒に考えることとし、ディベートを行うなど「対話型」の授業を行った。

b. 各授業の実施状況

(第1セメスター)

①基幹科目（自然論） 「科学と情報」 数学と人間 — 数学を俯瞰する

文明の誕生と数学の成立から始め、ポアンカレー予想の解決まで、ほぼ現在の数学全体について解説し、数学の特徴と数学の役割について話した。

②共通科目（転換・少人数科目）「基礎ゼミ」 学校教育の在り方と入学試験の功罪を考える

自分たちが受けてきたばかりの入学試験という分かりやすいテーマだったので、自分の

経験を交えて発表するなど、活発な授業が行われた。

(第2セメスター)

①基幹科目（自然論） 「科学と情報」 数学と人間 – 数学を俯瞰する

文明の誕生と数学の成立から始め、ポアンカレー予想の解決まで、ほぼ現在の数学全体について解説し、数学の特徴と数学の役割について話した。

②展開科目（総合科目） 「教育と科学技術」

途中1回分の授業を、「教養」をテーマとして教養教育院総長特命教授全員で合同授業を行い、充実した授業となった。

c. 学生授業評価とその評価に基づく改善

(第1セメスター)

①基幹科目（自然論） 「科学と情報」 数学と人間 – 数学を俯瞰する

学生の評価は、概ね好評であった。

②共通科目（転換・少人数科目） 「基礎ゼミ」 学校教育の在り方と入学試験の功罪を考える

学生は満足していた様に思う。

基礎ゼミ成果報告会に出た3人の学生は賞を獲得した。

自己紹介などの時間を効率化するため、来年度は、月曜日の3講目、4講目を使って行うこととした。

(第2セメスター)

①基幹科目（自然論） 「科学と情報」 数学と人間 – 数学を俯瞰する

学生の評価は、概ね好評であった。

②展開科目（総合科学（総合科目）） 「教育と科学技術」

受講者が約24人と少なかったので、受講者との対話を務めた。ディベートなどの時間も取れたので、学生の満足度は高かった様である。

来年度は、今年度とほぼ同じ形の授業と、地震と原発事故により多く時間をかけた授業の2種類を行う予定である。

(3) 工 藤 昭 彦

a. 教養教育院教授としての授業の狙いと取り組み

教養教育院の目的である「想像力豊かで高い問題解決能力と有力な指導的人材の養成」に資することを狙いとして、次の諸点に留意しながら授業に取り組んだ。

- 留意点 1. 暗記する授業ではなしに、論理的に考える授業になるよう配慮・工夫した。
- 留意点 2. 具体事例、関連するビデオ映像、内外のフィールド調査体験談等を豊富に交えながら、現実感覚を養うよう心掛けた。
- 留意点 3. 新聞記事、ネット情報など、講義に関連する直近の話題を紹介し、現実的問題解決能力の向上に資するよう工夫した。
- 留意点 4. 教科書、手作りの最新データ集、講義内容の全体像をまとめたパワーポイント、受講生による教科書の音読等を交えながら、講義への興味を繋ぎ留める工夫をした。
- 留意点 5. 全ての科目で試験を行わず、出欠状況、中間レポート、ゼミでの報告内容、最終レポート等に対する評価点等を加味し、総合評価をした。レポートの評価にあたっては、読解力、文章力、論理的展開力、説明力、発想力などを重視する旨、あらかじめ受講生に伝達し、各自の努力を促すようにした。

b. 各授業の実施状況

①展開科目（総合科学（総合科目）） 時代の文脈からみた「食」と「農」

授業は、戦後日本における「食」と「農」が激変したメカニズムを検証し、世界の食糧需給動向を見据えながら「食」と「農」の再編シナリオについて講義した。

授業の目標は、「食」と「農」の激変がもたらす我が国特有の問題に対する理解を深め、これまでの「食」と「農」のあり方を通してグローバル化時代に私たちの暮らしを設計するヒントを得ることに置いた。

講義内容は、第1回オリエンテーション、第2回「現代世界と日本の農業問題」、第3回「国民経済における農業の地位」、第4回「農業構造の動向」、第5回「コメ過剰・農産物輸入・自給率低下」、第6回「台頭する農業環境問題」、第7回「日本資本主義の成長構造と兼業標準化」、第8回「戦後農政の枠組みと推移」、第9回「農業基本法の制定」、第10回「食料・農業・農村基本法及び基本計画」、第11回「民主党政権下の農政」、第12回「平成の農地改革」、第13回「時代の文脈からみた「食」と「農」」、第14回「農業・農村改革の方向」、第15回レポート提出と、ほぼシラバス通り実施した。

授業は「教科書」、手作りの「最新データ集」のほか、関連資料、新聞記事等を隨時提供し、農業や食料に関する現実感覚を養成するよう工夫をした。

評価は、出席状況、中間レポート、最終レポートの評価を総合して行った。出欠や授業態度は特に問題はないが、レポートの文章力・記述内容の水準は、学生間の開きが大きかった。

②基幹科目「経済と社会」 資本主義と農業—世界恐慌・ファシズム体制・農業問題—

資本主義に馴染み難い農業に起因して発生する社会問題、政治問題は農業問題と呼ばれてきた。講義では1929年恐慌以降の農業問題の処理が、奇怪な日本ファシズムの形成・成熟運動と連動して行われ、破綻していく過程を学び、今日の世界同時不況下における

農業問題を解決する社会経済体制のあり方について講義した。

授業の目標は、農業問題の処理という切り口から、ファシズム体制の形成・成熟といった社会経済体制の激変過程を解き明かし、今日多様な形で展開されている「もうひとつの世界づくり」運動に対する指針を見出す糧を得ることに置いた。

講義内容は、第1回オリエンテーション、第2回「農業問題発生の歴史過程」、第3回「世界恐慌・満州事変・満蒙開拓」、第4回「準戦時体制下の政治的処理」、第5回「準戦時体制下の経済的処理」、第6回「農業問題処理の限界」、第7回「2.26事件の勃発と総力戦体制」、第8回「総力戦体制とファシズム」、第9回「戦時体制下の政治的処理」、第10回「戦時体制下の経済的処理」、第11回「ファシズム的農業問題処理の総括」、第12回「戦後民主主義体制下の農業問題処理」、第13回「現代世界と日本の農業問題」、第14回「農業問題解決の新たな見取り図」、第15回レポート提出と、ほぼシラバス通りに実施した。

授業は、教科書、パワーポイント、当時の関連ビデオ映像、新聞記事等関連資料を提供し、歴史過程に対する実感を養うよう配慮した。また、直近の金融危機や欧州の経済不況等との関連についても、考える素材となるような情報を提供した。

評価は出席状況、レポート内容等で総合評価した。1講時目の授業のせいか、途中から欠席者が多少目立つようになった。レポートの中には、参考文献を読破し1年生とは思われないほど高い水準の内容のものもあり、驚かされた。

③共通科目（転換・少人数科目）「基礎ゼミ」 現代世界の「食」－飽食と飢餓の構造

現代世界は先進国の飽食と途上国の飢餓が共存するという不幸な現実が続いている。こうした問題に、ゼミと体験学習を通して理解を深めた。

授業の目標は、「変貌する日本人の食生活や食料自給率低下問題」や、「グローバルな視点で食料不足や飢餓の現状」等について理解を深め、「食」を通して現代社会のあり方を受講生各自が考える能力を養うことに重点を置いた。

ゼミの内容は、第1回オリエンテーション、第2回「現代における「食」と「農」のあり方を考える」、第3回「我が国の食生活の現状と食育の推進について」、第4回「世界の食糧需給動向及び関連資料」、第5回「気候変動と農業－わたしたちの食料と未来」、第6回「食料価格はなぜこれほど値上がりしたのか」、第7回「栄養不足の犠牲者が史上最大規模に－FAO、10億2千万人と発表」、第8回「アフリカ開発－それは農業・農村開発が核だ」、第9回「世界の食料安全保障：気候変動とバイオエネルギーの課題」、第10回地産地消の推進について地産地消等実態調査、第11&12回視察研修 農産物直売所研修、第13&14回視察研修 食育に関する研修、第15回レポート提出など、資料や統計を活用したグループ討議、現地研修などを行い、理解を深めた。

評価は、出席状況、レポート及び報告内容に基づいて最終評価した。

少人数教育は、昨年度同様①欠席者が少ないとこと、②授業への参加意識を高められ易いこと、③思考・発表能力を相互研鑽できること、④現地調査等により現実感覚を身に付け

る機会を提供できることなど、多くの利点があることを実感できた。

④共通科目（転換・少人数科目） 「基礎ゼミ」 「農」的世界の可能性ーポスト工業化社会への展望

人と物と金と情報のグローバル化が、止まるところを知らない中、あえてグローバル化に対抗する「もうひとつの世界づくり」に対する挑戦が、世界各地で試みられるようになった。生身の人間が幸せに生きるために、改めて「暮らしの拠点」を創造しなければならない—そう考える人々が増えているからだろう。その過程で、「農」の世界に対しては、これまで以上に熱い視線が注がれるようになった。この授業では、「農」の世界の可能性やその意味について、ゼミと体験学習を通して理解を深めた。

授業の目標は、「農の世界から生命圏復元のシナリオを透視する」、「農村の現状と農業が当面する問題を理解する」、「グローバルな視点で飢餓や環境問題との関連を理解する」ことなどに置いた。

ゼミの内容は、第1回オリエンテーション、第2回「時代の文脈からみた「農」」、第3回「WTOと農業」、第4回「EPA・FTAと農業」、第5回「TPPと農業1—参加反対論について報告・討論」、第6回「TPPと農業2—参加賛成論について報告・討議」、第7回「統計で見る日本農業の現状と今後の課題」、第8回「統計で見る食料自給率の現状と今後の課題」、第9回「震災による農村・沿岸地域の被害状況と復旧・復興の課題」、第10回「「農」の世界の新たなチャレンジ1—エネルギー開発—」、第11回「「農」の世界の新たなチャレンジ2—環境保全型農業の現状と課題」、第12回「農業再生のビジネスモデル」、第13&14回農業を食業に転換した事例視察・研修、第15回レポート『日本農業改革への提言』提出である。視察研究のレポートを相手先に提供したところ、「おもしろい」、「参考になる」とのメッセージをいただいた。

評価は、出席状況、レポート及び報告内容に基づいて行った。少人数教育は、既述通り、多くの利点があると実感した。

⑤展開科目（総合科学（総合科目）） 環境と経済・社会の調和に関する多様なアプローチ

授業は、参加人数が少なかったため、参加型・討論型の授業をして欲しいという学生からの提案もあり、基礎ゼミ方式で行った。

授業の目標は、①環境問題を考える多様な思想や倫理についての理解を深め、②豊富な知識と研究課題を身につけることを目標とした。

初回の授業オリエンテーションで、次のような講義内容をあらかじめ受講生に提示し、ほぼこれに沿ってゼミ形式で授業を行った。授業内容は下記のとおりである。

第1回オリエンテーション（講義内容及び日程について）、第2回「環境問題への多様なアプローチについて」、第3回「地球環境問題の連関図」、第4回「環境時代に人々が考え始めたこと(環境倫理や環境思想への橋渡し)」、第5回「経済と環境(経済理論)(経済

学は環境をどのように扱ってきたのか)」、第6回「環境法の枠組み1(国際条約・国際法)」、第7回「環境法の枠組み2(わが国の環境法の体系と成立過程)」、第8回「環境倫理学とは何か(倫理学等は何をどのように問題にしてきたか)」、第9回「環境と経済・社会の調和(持続可能な発展)」、第10回「加藤武尚『新環境倫理学のすすめ』を読むI(倫理的規範の成熟と効力)」、第11回「加藤武尚『新環境倫理学のすすめ』を読むII(倫理的規範の成熟と効力)」、第12回「佐和隆光『グリーン資本主義』を読むI(環境と経済・社会の調和は可能か)」、第13回「佐和隆光『グリーン資本主義』を読むII(環境と経済・社会の調和は可能か)」、第14回総合討論、第15回レポート作成。

ただ、火曜日の授業は、合同講義で2回分を圧縮せざるを得なかつたため、他の時間に適宜内容を補充した。

評価は、出席、中間レポート、最終レポートの評価を総合して行った。最終レポートでは「講義内容の中から、各自興味があるテーマを取り上げ、自由に論じなさい。但し、講義資料以外に参考にした文献名を記載の上、末尾に講義についての感想を述べること」というテーマを課したが、自ら分厚い参考資料をひもといて論述するなど、力作が数点あり、昨年同様改めて本学学生の水準の高さを実感した。

c. 学生授業評価とその評価に基づく改善

①基幹科目「経済と社会」 資本主義と農業－世界恐慌・ファシズム体制・農業問題－ (授業評価)

同様の授業に対して、1セメ、2セメの学生評価は、やや違った結果になった。1セメは各項目とも平均をやや下回っていたが、2セメは各項目とも平均を上回っていた。受講生に理系の学生が多いか、文系の学生が多いかで、評価が異なったものと思われる。ただ、昨年、共通して平均より評価が低かった「理解度」及び「説明」の項目は、1セメ、2セメとも改善され、特に2セメは平均を上回る結果となった。

〈改善点〉

引き続き難しいキーワードについてレポートを課し、自ら理解を深めてもらうようにする。また、現実感覚を持ってもらうために、さらに適切なビデオ映像や当時の新聞、雑誌記事等を提供するようにしたい。

②展開科目(総合科学(総合科目)) 環境と経済・社会の調和に関する多様なアプローチ (授業評価)

2セメの月曜日と火曜日に同じ授業を行い、評価結果は全項目とも平均前後で大きな差は見られなかった。ただし、「関連学習」と「質問」は昨年と異なり、平均を大幅に上回る結果となった。これは基礎ゼミ方式の参加型・討論型授業に切りかえたことによる。

〈改善点〉

引き続き工夫を凝らし参加型・討論型授業を実施したい。

③展開科目（総合科学（総合科目）） 時代の文脈からみた「食」と「農」

〈授業評価〉

1セメの火曜日と金曜日に同じ授業を行ったが昨年と違い、学生の評価結果はいずれの評価項目ともにほぼ同様であり、大半の項目が平均を上回っていた。

〈改善点〉

喋るスピードが少し早そうなので改善したい。

④共通科目（転換・少人数科目）「基礎ゼミ」 「農」的世界の可能性—ポスト工業化社会の展望

〈授業評価〉

評価項目は、「板書」、「機器」以外は、概ね平均を上回っており、それなりの成果を上げたのではないか。

〈改善点〉

現地視察等の機会を有効に活用しながら、より実りあるゼミにするよう心掛けたい。

⑤共通科目（転換・少人数科目）「基礎ゼミ」 現代世界の「食」—飽食と飢餓の構造

〈授業評価〉

評価項目は、支援活動以外概ね平均を上回っており、それなりに成果を上げたのではないか。

〈改善点〉

報告者の負担がやや重いとの記載があり、工夫したい。

(4) 前 忠 彦

a. 教養教育院教授としての授業の狙いと取り組み

東北大学、大学審議会等の「教養教育への理念・目標」は、概ね以下のように謳っている。

「教養教育は、社会の高度化・複雑化が進む中で、自ら将来の課題を探求し、その課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる能力（問題探求能力）とそれら課題を豊かな創造力をもって解決していく能力（問題解決能力）を有する人材の育成を目指す。そして、政治・経済面はもとより人類の未来にはかかる地球環境問題など地球規模の諸問題解決への貢献、人類共通の知的資産の創造、新たな文化や価値観の創造などの面において国内および国際社会でリーダーシップを発揮できる人材の養成を行う。」

私の授業は、上記の趣旨に沿って行うことを基本としながらも、これまで植物科学・農学分野で研究・教育に携わってきた自分の経験を生かし、以下のような狙いのもとに行うこととした。

- 1) 受講生が生き物としての植物の営みとそれを支える精緻な仕組みを深く知り、理解し、それを通して知る喜び・楽しさを体感すると共に、人間社会、生物界、地球環境の中で果たす植物の多様な役割・重要さに考え及び、自身の自然観を豊かで深いものへと進化させることを促す。
- 2) 現代社会の抱える環境問題、エネルギー・資源問題、食糧問題、健康・医療問題等に対する向き合い方、改善・解決法の策定等において生物学的な視点が重要であることへの理解を促す。

また学生の教養教育へのモチベーションの高揚を喚起するため、以下の点についても注意を払い授業を行うこととした。

- ①大学教育と高校教育の違いを説明し、高校教育までの教わる(受身)から自ら学ぶ姿勢への切り替えを促す。
- ②人生における現在の立ち位置を理解し、将来の自分像を明確にして、それに向けて準備することを促す。
- ③グローバル化・国際化した社会においては、世界水準での深い教養、豊かな発想、深い歴史観、高いコミュニケーション能力を身につけることが必要かつ重要であるとの自覚を促す。
- ④教員自身の研究を紹介してその面白さ・難しさなどを直接受講生に伝えて新たな知的刺激を与え、学習意欲や研究意欲の向上を促す。

b. 各授業の実施状況

①展開科目（総合科学（総合科目））「植物面白考－巧みな生存戦略と私達のくらし－」
移動能力を持たない植物は、根をおろした地でその一生を送る。それゆえに固有の生存戦略を発達させ、したたかに生きている。

この授業では、受講生が“植物は面白い”と感じ、その生き様・生きる仕組み・役割に興味を持ち理解するようになることを第一の狙いとした。その上で、植物が関係する現代の社会的問題について考える基盤を築くことを次の狙いとした。講義内容と実施状況は以下のとおりである。

① 植物が地球・私達の生活のなかで果たしている役割

植物が地球・私達の生活のなかで果たしている役割についての全体的な理解を狙いとした。学習の動機付けとして、日常的にはほとんど考えることがない「自分にとっての植物」、「人々にとっての植物」、「地球生物にとっての植物」、そして「地球環境にとっての植物」について、受講生各自の考えをミニットペーパーに記して提出させた。合わせてそれらを総括する講義を行った。

② 生命と地球の歴史

とくに「酸素発生型光合成生物」の出現が地球表層環境を大きく変え、その後の生命の進化に大きな役割を果たしたことについて力を置き、地球 46 億年と生命の歴史の相互関係（共進化）についての講義を行った。

③ 光合成

その生物学的意義、それを支える細胞・葉緑体の構造と機能の関係、光獲得戦略、光エネルギーの化学エネルギーへの変換機構、炭素固定反応、最終生産物生成機構、光呼吸、それらの分子機構、異なる環境への巧みな適合戦略等について講義を行った。

④ 植物の根による無機栄養素の吸収

微生物まで巻き込んだ巧妙な戦略を含め講義を行った。

⑤ 世界の三大作物

その育種の歴史、多収性に関わる形質など作物としての植物の特性と人間との係わりについて講義した。

⑥ 日本・世界の食糧事情、将来の食糧増産の可能性

データーを示しながら、現状、未来予想、具体的な食糧増産の方法について講義した。

⑦ 担当教員らの研究

「高 CO₂ 環境下でのイネの成育と光合成、その改善」について説明し、研究の面白さ・難しさ・醍醐味等について解説した。

⑧ 花成ホルモン『フロリゲン』発見の研究小史と花の昆虫誘導作戦

多くの写真を使って講義を行った。

⑨ 環境保全と植物、生物多様性、生態系サービス

社会科学的、経済学的な視点から見た植物についての講義を行った。

⑩ 合同講義

第 2 セメスターでは「合同講義—震災—」を開講し、3人の先生による異なる視点からの見識が披露され、学生からの質問へ応答した。

授業を行うにあたっては、以下の点に留意して行った。

- ・講義資料の配布：授業はおもにパワーポイントを使用して行い、毎回の授業に先立ってスライドのコピーと資料を配布した。
- ・ミニットペーパーの提出：毎回の講義の終了 10 分前にミニットペーパーを各自に配布し、①その日の講義の要点、②興味深かった点、③質問・自分の考え、④問題への解答を記して提出させた（出欠調査を兼ねる）。質問への回答は、次の講義時間に行った。毎回の講義のあとにこれらに目を通し、受講生の授業の理解度、疑問点、分かり難かつた点等をチェックし、次回の講義で補足説明した。
- ・自由課題についてのレポート：講義に関連する項目について各自でテーマを決めて調べ、レポート（A4・4枚を目安）を作成して提出することを求めた（1-2回）。2セメの講義ではレポート内容に対するコメントをつけて学生に返却した。
- ・試験：最終講義日に記述テストを行った。
- ・成績：出席 40 点、ミニットペーパーとレポート 30 点、記述試験 30 点として採点

②基幹科目「生命と自然」 地球の命支える“植物の光合成”をひもとく

地球上のほとんどの生物が直接的、間接的の違いの差はあれ、究極的には“植物の光合成”に依存して生きている。本講義では、光合成の精緻でユニークな仕組みと環境への順化・適応について基礎から学ぶと共に、“光合成”が私達の暮らし、地球環境の維持に果たす役割について考える。

この授業では“光合成”について、世界標準あるいはそれより高いレベルでの受講生の理解を狙って講義を行うこととした。講義内容と実施内容は以下の通りである。

- ① 光合成が地球を変えた！
- ② 光合成は食物連鎖の原点
- ③ 葉と葉緑体の構造
- ④ すべてのはじまりは、太陽光エネルギーの捕獲から
- ⑤ 光エネルギーの化学エネルギーへの変換は葉緑体内的袋状の構造体（チラコイド）で行なわれる
- ⑥ 二酸化炭素同化回路（カルビン-ベンソン回路）とその解明にまつわる話
- ⑦ 二酸化炭素固定酵素（ルビスコ）はとても不思議な酵素
- ⑧ 最終生産物の生成と蓄積
- ⑨ 光呼吸とは？
- ⑩ 温暖な地のイネ、比較的乾燥した地のトウモロコシ、きわめて乾燥した地のサボテンでは光合成の仕組みに違い！
- ⑪ 光は諸刃の剣！－植物は光により損傷を受ける－
- ⑫ 作物の光合成能力の改善への道は？－私達の研究－
- ⑬ 光合成と環境問題、資源問題

授業を行うにあたっては、以下の点に留意して行った。

- ・講義資料の配布：授業はおもにパワーポイントを使用して行われ、授業に先立ってスライドのコピーと資料が配布された。
- ・ミニットペーパーの提出：各授業においては、授業終了の10-15分前にミニットペーパーが配布され、展開科目の場合と同様な形式で、①その日の講義の要点、②興味深かった点、③質問・自分の考え、④問題への解答を記して提出させた（出欠調査を兼ねる）。質問への回答は、次の講義時間に行った。また、自由課題レポートについては、展開科目の場合と同様な形式での作成、提出を求めた。試験、成績についても同様に行った。

③共通科目（転換・少人数科目）「基礎ゼミ」 植物はすごい！－地球、わたし達のくらしのなかで果たす役割を探る－

基礎ゼミの大きな目的が、高校までの教わる姿勢から大学での自ら学ぶ姿勢への転換にあることに重点を置き、以下のような狙いで行うこととした。

- ①植物のダイナミックな営みを自らが調べ、主体的に学ぶことを通して、植物がわたし達の暮らしや地球環境の保全に果たす役割を考え、受講者各自の自然観・社会観を奥行き

のあるものへと進化させる。合わせて以下の点も狙いとした。

- ・主体的に学ぶことの楽しさを知る（教わる→自ら学ぶ）
- ・論議や発表の仕方を学ぶ（自己の表現・主張の仕方）
- ・ゼミ仲間、教員との交流を通してコミュニケーション能力を高める
- ・総合大学の良さを体感する（多様な考え方・生き方を知る）

ゼミは月曜日の3・4講時連続の授業で隔週行われ、全7回の授業となった。同じ科目名で2コマの基礎ゼミを担当した。具体的な授業内容と実施方法は以下のとおりである。

- ① テーマを決めてのフリートーク
- ② 副読本「植物が地球をかえた！」を読んでレポート作成、グループディスカッション、全体ディスカッション
- ③ 訪問演習「自然植生から学ぶ」 東北大学植物園訪問
- ④ 研究現場の訪問：東北大学農学研究科植物栄養生理学分野
- ⑤ 自由課題演習：植物に関連することで興味を持ったテーマを自分で見つけて調べレポートを作成・提出、パワーポイントを使用しての発表用スライドの作成、要旨の作成。
- ⑥ 自由課題の調査内容の発表と論議
- ⑦ 講義
 1. 植物とわたし達の暮らし：生命と地球の歴史、生態系サービス、世界・日本の食糧
 2. 植物は独立栄養生物（動物との違い）：光合成の科学、土壤環境と植物の無機栄養素獲得戦略
 3. 植物が関わる現在・将来の問題点：「生物多様性」、「地球は100億人を養えるか？」、「高CO₂環境でのイネの成育は？（わたし達の研究から）」

フリートークでは、ヘテロな学部構成からなる3-4人のグループを作り、テーマは皆がトークに参加できるように「自分にとっての植物」、「人間ににとっての植物」、「地球上にとっての植物」とした。ほとんどの学生にとってそのようなスタイルのトークは初めてだったので最初は戸惑っていたが、次第に馴れた。2回目以降のフリートークのために選んだ本の選択がよかったです。この内容についての論議は活発であった。自由課題の設定があることにより、フリートーク・講義・演習からヒントを得ようと皆が真面目に取り組んだ。植物園訪問は、野外観察自身が効果的な学習となつばかりでなく、学生・教員間の交流・コミュニケーションを図るのに効果的であった。研究現場の訪問は、初めて見る実験装置やその道の第一人者の先生との交流を学生は喜んだ。自由課題演習ではテーマの選定に、皆頭を痛めていたが、植物についてそれぞれが真剣に考えることとなり成功であった。発表は、良い経験になったようである。

c. 学生授業評価とその評価に基づく改善

- ①展開科目（総合科学（総合科目））「植物面白考－巧みな生存戦略と私達のくらし－」

この授業は、1セメスターで2コマ（火曜5時限、金曜5時限）、2セメスターで1コマ（火曜5時限）あり、ほぼ同じ内容の講義を行った。学生による評価は、3授業間で大きな違いはなかった。

学生の授業への取り組みについての自己評価（A）では、授業中の不明な点を質問や自習で補った（項目A2）、授業時間以外にこの授業に対する学習をした（A3）との点で、2クラスが委員会平均をかなりあるいは大きく上回った。他の1クラスは委員会平均と同じ程度であった。授業内容・方法（B）では、説明が理解しやすかったか（B2）の項目でどのクラスにおいても委員会平均より低かった。また授業の声（B4）についても委員会平均より下回っていた。その他のシラバス（B5）、時間割（B6）、板書（B7）、機器（B8）、宿題（B9）については委員会平均とほぼ同じかそれらを少し上回る評価であった。授業の全体的評価（C）では、熱意（C1）がほぼ委員会平均と同等、満足度（C2）と総合評価（C4）は、委員会平均と同等かやや下回った。理解度（C3）は、大幅に委員会平均を下回った。自由記述においては、「植物を様々な視点から見ることができて楽しかった」、「植物って面白い！」、「授業を通して植物の偉しさ、作物のすばらしさを感じ取ることができ、同時にヒトと植物の関係を知ることができたので、非常に有意義に（自分の自然観に）広がりと深みを増したと思う」、「1セメスターで一番面白くて、自分にとってためになる授業でした」等、ほぼ狙い通りに講義内容が学生に伝わっていたことを思わせる記述があった。その一方で、「文系には結構辛かったです」、「内容的に、文系には開講すべきではなかったと思う。化学式のところなどさっぱりだった」、「かなり難しい内容も多く、理解が追いつかないところもありました」、「難しくて理解はしきれなかつたけれど、授業は面白かったです。いろいろな発見があってよかったです」、「全体的に話（講義）の難易度を下げればよいと思う」等の記述が見られた。

この授業は、私にとって初めての多人数の学生を対象にした全学教育の授業であった。学生による評価を総合的に判断すると、以下のような反省点と改善点が挙げられる。

「説明の項目、理解の項目」の評価が低かったのは、講義内容を世界標準と高いレベルに設定したこと、受講生の基礎知識がどの程度なのかを十分掴みきれていたこと、説明に不慣れな点や説明不足の項目があつたことなどに要因があると考えられた。文系の学生には難しかったとの記述が多く見られたが、レポート、ミニットペーパーの記述では、よく理解している学生も多かった。次年度は、教養の重要さを強調して学生の努力を促すと共に、講義では、説明に工夫を凝らし理解度・満足度の改善を図りたい。

②基幹科目「生命と自然」 地球の命支える“植物の光合成”をひもとく

2セメスターで、ほぼ同じ内容で月曜、水曜、木曜に3授業を行った。学生評価の内容は、3授業を通して大きく違わなかった。

学生の授業への取り組みについての自己評価（A）は、質問（A2）、関連学習（A3）項目で委員会平均をいずれのクラスもはつきりと上回っていた。授業内容・方法の評価（B）では、説明が理解しやすかったか（B2）の項目が2クラスにおいて委員会平均より低か

った。説明の声（B3）は1クラスで低い評価だった。速度（B4）、シラバス（B5）、時間割（B6）、板書（B7）、宿題（B9）では委員会平均と同等であった。機器（B8）は若干委員会平均より高かった。授業の全般的評価（C）では、熱意（C1）が平均値より若干高く、満足度（C2）、総合評価（C4）は、委員会と同等か若干低かった。理解度（C3）については委員会平均を下回った。

学生の自由記述においては、「毎回の授業テーマが明確で大変分かりやすかった。課題テーマの自由レポートは大変楽しくできた。どのレポートもこれほど面白かったらいいものを」、「説明（スライド）が分かりやすかった。一人一人のレポートをちゃんと見てくれてコメントも書いてもらえたのでよかったです」、「今まで知らなかった植物の仕組みや、いろいろなところに生存する植物を知ることができて面白かったです」、「すごく難しいこともあったが、眼からうろこという感じでとても興味深かったです。植物の見方も変わった。この授業を受けて良かった」、「いろいろな植物を見てよかったです」、「興味深い資料を交えての授業はとても面白かった」等の講義を楽しめたことを記したもののが多かったが、「非常に面白い内容を扱っているのに、非常に難しい化学式が出てきて理解できませんでした（というよりはくじけました）。興味深かったですだけに残念です」、「もう少し文系にも分かるように説明して欲しい。生物Iを学んでいたが、やはり化学物質名など理解し難い所がある」、「説明が専門的で難しかった」等の記述も見られた。

この授業も、私にとって初めて開講する授業であった。この授業においても展開科目とほぼ同様の傾向がはっきりと見て取れた。すなわち「説明の項目、理解度の項目」の評価が低かった。これらの要因についても、展開科目と同様の理由が考えられた。すなわち、講義内容を世界標準を意識して高いレベルにしたこと、受講生の基礎知識がどの程度なのかを十分掴みきれていないかったこと、説明に不慣れな点や説明不足の項目があったことなどである。私を勇気付けてくれるコメントもたくさんだったので、次年度はとくに説明に工夫を凝らし、教養教育にふさわしいレベルの高い(国際標準の)講義を行うべく改善を図りたい。

③共通科目（転換・少人数科目）「基礎ゼミ」 植物はすごい！－地球、わたし達のくらしのなかで果たす役割を探る－

この授業は、ほぼ同じ内容で10人と4人の二クラスで行った。学生による評価が少しクラスにより異なった。10人のクラスでは、学生の授業への取り組みについての自己評価（A）は、質問（A2）が委員会平均より低く、関連学習（A3）項目では委員会平均を若干上回った。授業内容・方法（B）では、内容（B1）が委員会平均と同等で、説明（B2）、説明の声（B3）は委員会平均より若干低く、速度（B4）、シラバス（B5）、時間割（B6）、板書（B7）、機器（B8）、宿題（B9）の項目は、いずれも委員会平均を上回った。授業の全般的評価（C）では、熱意（C1）、満足度（C2）、理解度（C4）、総合評価（C4）のいずれも委員会平均を上回り、なかでも総合評価が特に高かった。自由記述では、「体験型の学習が多く盛り込まれていて、非常に楽しかったです」、「講義内容は難しい部分もあり

ましたが、興味を持ってのぞめました。楽しかったです」、「今後にとても役に立つ身のある時間でした」等、授業が有意義であったとするものが多かった。一方、「授業を進めるペースが遅い」とする学生もいた。4人のクラスでは、学生の授業への取り組みについての自己評価（A）は、質問（A2）、関連学習（A3）の項目が委員会平均より際立って高く、学生が主体的に授業に取り組んだことが伺えた。授業内容・方法（B）では、内容（B1）、説明（B2）、説明の声（B3）、速度（B4）のいずれの項目も委員会平均と同等であった。シラバス（B5）、時間割（B6）、板書（B7）、機器（B8）は委員会平均より高く、宿題（B9）で同等であった。授業の全般的評価（C）では、熱意（C1）、満足度（C2）、理解度（C4）が委員会平均と同等で、総合評価（C4）は委員会平均を上回った。自由記述では、「植物の意外な働きが分かったり植物園見学があつたりとても楽しかったです」とあった。このクラスは、4人と極端に少なかったので毎回の授業に緊張感があった。

2クラスの授業を通して、良かった点としては、2クラスを通して学生間・学生と教員間のコミュニケーションがよく取れていたこと、学生が積極的に授業に取り組んだこと、植物の面白さ、私達の暮らし、地球にとっての役割等について学生が自主学習により理解を深めたこと等で、基礎ゼミの当初の狙い通りとなった。反省点として、4人クラスは授業を行うのが難しかった点が挙げられる。一人休むと3人となってしまい、テーマを設けて論議しても論議が深まらなかつた。やはり一クラスは12人-16人程度が望ましい。次年度は、二クラスの授業内容を変えて、一つは今年度と同様、もう一つは、実証実験を中心に据えたものとして、更なる向上を目指す。

（5）浅川照夫

- a. 教養教育院特任教員としての授業の狙いと取り組み
(第1セメスター)

①外国語英語 「英語 B1」

5クラス担当。CALL教室を使って、英語のListening力の向上を目指している。テキストにはインターネット・マルチメディア教材 LincEnglish の GoldI (全レッスン 12 課) を利用し、毎週 170 時間以上のリスニング、速読読解、語彙・文法のアサインメントを義務付ける。授業ではその復習を兼ねると同時に、文法・語彙問題、新しい音声教材を聞かせながら、英語の運用能力を高めるよう工夫する。

(第2セメスター)

①外国語英語 「英語 A2」

1クラス担当。毎回、初見のテキストをプリントして配布し、速読の練習を行う。テキストの難易度はやや高めで、TOEFL試験の練習にもなり得るものを選ぶ。できる限り日本語逐語訳を介しての説明を省き、単語の意味の類推法、速読のための構文解析、決まり文句の飛ばし読み等を解説する。授業の後半では、英語学習の基本となる精読を行う。テキスト：TIMEの記事から。

②外国語英語 「英語 B2」

3 クラス担当。後期はインターネット・マルチメディア教材 LincEnglish の GoldII (全レッスン 12 課) を利用して、基本的に前期と同じ授業を展開する。(i) 自然なスピードの会話についていける自信をつけること、(ii) ある程度の分量の英語を耳で聞いて、要点をきちんと把握できること、(iii) 英語を聞いて英語の質問に書いて答えることの 3 点を学習目標とする。

(第 3 セメスター)

①外国語英語 「英語 C1」

1 クラス担当。CALL 教室を使って、英語の Listening 力および Writing 力の向上を目指している。テキストにはインターネット・マルチメディア教材 LincEnglish の GoldIII (全レッスン 12 課) を利用し、毎週 170 問以上のリスニング、速読読解、語彙・文法のアサインメントを義務付ける。授業ではその復習を兼ねると同時に、文法・語彙問題、新しい音声教材を聞かせながら、英語の運用能力を高めるよう工夫する。

(第 4 セメスター)

①外国語英語 「英語 C2」

2 クラス担当。各クラスの教育目標を変えている。1 クラスについては、日常会話、講義、各種アナウンス等を利用して、やや高度な Listening 演習を行う。(i) 自然なスピードの英語を聞いて、やや長いセンテンスの Dictation を行うこと、(ii) 文字に頼る癖をなくすために、シャドーイングの練習を重ねること、(iii) 講義の音声を聞いて、英語の質問に英語で答えるライティングの練習をすること、の 3 点を重点的に行う。もう一クラスは、インターネット・マルチメディア教材 LincEnglish の Platinum A1 (全レッスン 12 課) を利用して、(i) 自然なスピードの会話についていける自信をつけること、(ii) ある程度の分量の英語を耳で聞いて、要点をきちんと把握できること、(iii) 英語を聞いて英語の質問に書いて答えること、(iv) 高度な内容の英語を読み解くことの 3 点を学習目標とする。

b. 各授業の実施状況

①外国語英語 「英語 A2」

精読用に TIME の Cover Story “The Evolution Wars” (Aug.7, 2005) とその関連記事 ”God vs. Science” (Nov. 5, 2006) の 2 本を読んだ。科学と宗教の問題を真正面から取り上げた記事である。語彙的にも内容的にも難解なものであるが、大学生にとって必要な語彙がちりばめられており、内容を理解しようとすれば語彙も自然に覚えられることを学んでくれたと思われる。速読用には毎時間、A4 約 3 分の 2 程度の英文を 10 分から 15 分で読ませ、多肢選択式の設問を用意して、理解度確認を行った。速読するためには、英語を書かれたままの順序でフレーズのまとまりごとに理解することが重要である。そのためには日本語訳をしている余裕はないので、即座に構文分析を行えること、簡単な文句は英語のまま理解すること、構文ごとに主張したい場所が決まっているので、それを把握して

おくことが大切であることを認識させた。

②外国語英語 「英語 B1」 および「英語 B2」

1年生ではリスニングの訓練は絶対に欠かせないものである。毎年、基礎訓練としてインターネット教材 LincEnglish を使用し、本学1年生には1セメに GoldI、2セメに GoldII を使用している。本教材は GI, GII, GIII へとレベルアップする学習システムになっており、難易度が徐々に高くなる。各レベルは、1 レッスンが描写問題 25 問、質疑応答問題 30 問、会話問題 30 問、説明文問題 10 問、速読問題 19 問、文法問題 65 問から成り立っている。学生に 1 週間 1 レッスンの予習を義務付け、授業では復習問題、新規の質疑応答で理解度を試した。インターネットにアクセスできる環境であればどこでもいつでも自由に学習できるので、ほぼ全員の学生が 12 レッスンの予習を欠かさず行っている。毎年、授業では予習した音声の中からいくつかピップアップして、新たな内容の質問を英語で聞き、英語で答える訓練をしている。口頭で答えさせることも試みているが、なかなか難しいようで、とてもスムースな質疑応答は出来ないでいる。学生たちはもともと授業で声を発するのに慣れていないので、前期 B1 の後半になると声がだんだんと聞こえなくなっていく。無理強いすることはできないので、書いて答えさせるように変えている。その場合、話されている英語を聞き取って、それをそのまま書こうとする姿勢がみられるので、できる限り、理解した内容を自分の英語で工夫して書くよう指導している。

③外国語英語 「英語 C1」 および「英語 C2」

LincEnglish を使った 2 年生クラスでは、3 セメに GoldIII、4 セメに Platinum を使用する。それぞれ、非常に難度の高いリスニングと速読リーディングの練習になる。「英語 C1」は1年次から LincEnglish に慣れている学生たちが選択しているので、リスニングの学習法を充分に身に付けており、リスニングのステップアップを目指している学生たちである。したがって、基礎訓練のほかに、聞いて書くこと、聞いて要約することを重点的に行つた。

2 年生用の別タイプのクラスでは、一つの教材ではほぼ決まった人物の声しか聴けないという不備を回避するために、いろいろなタイプの声と発音の癖に慣れるよう、様々な音声ファイルを教材として提供した。その上で、聞いて書くという訓練を集中して行つた。一週間前に提供される会話音声を予習し、それに基づいて、さまざまなドリルを行つた。会話内容を英語で質問し英語で答えること、Dictation、関連内容の新しい会話を聞いての作文等、豊富な課題を提示した。

c. 学生授業評価とその評価に基づく改善

①外国語英語 「英語 A2」

精読用のテキストには難易度の高いものを用意している。「授業内容・方法の評価」の中で「説明は理解しやすかったですか」との項目で、「どちらとも言えない」が 30% を超

えているが、これは英語のむずかしさが原因だろうと思われる。しかし、密度の濃い内容の文章には語彙的も構文的にも重要なものが詰まっているので、自ら努力して英語の能力をさらに伸ばす姿勢を培うためにも、テキストの難易度は落とせないと考えている。英語が難しいと感じるとき、それが語彙の問題か、構文解析の問題か、内容理解の問題か、教授する側はそれも見極めて、無駄のないように分かりやすく解説するよう努めている。

②外国語英語 「英語 B1」および「英語 B2」

LincEnglish の教材内容については、ほぼすべての学生が高い評価を下している。1週間の予習時間が多いために不満を感じる学生も少なくないが、本学学生の英語スキル能力を考えると、週 1 回の CALL 授業時間で適当に時間をかけているだけでは、とても満足のいくレベルまで能力を高めることはできない。リスニングは学習時間に比例して能力が上がるので、英語 B クラスでは、学生にとってはやや大変かもしれないが、この教育法を貫いて英語の基礎訓練を継続することは欠かせないと考えている。

③外国語英語 「英語 C1」および「英語 C2」

2 年生は英語の授業が週 1 コマしかないので、読むこと、書くこと、聞くことの訓練を 90 分に凝縮できるような包括的な教材が必要であろう。読むことの基本ができているという前提で、授業では、特に、聞いて書くという練習に焦点を当てるようにしている。短い作文ではあるが、一人一人の作文を丁寧に添削している時間的余裕がないので、どのように効率よく見てやれるかがこれからの課題である。

(6) 水 原 克 敏

平成 23 年度は、①教育学「学校の役割は何か」を文系と理系クラスに講義 2 件、②基礎ゼミ「現代の教育問題について解決策を提案する」、③教職科目・教育課程論「学習指導要領が目指す人間像」、④総合科目「学校に関する教育学・心理学等の諸科学の研究と方法」の授業をし、以下のように進めた。

①展開科目（人文科学）教育学 「学校の役割は何か」

そもそも学校とは何か？日本人はどのような計画によって教育してきたのか。学校が抱えている様々な問題は、どのような理由で生じているのか等々、学校の歴史を学ぶことを通して、学校をよくするにはどうしたら良いか、を考える力をつけようとした。

毎回、写真と図とグラフなどを数多くの資料を示しながら、学校がどうしてつくられたのか、パワーポイントを駆使してわかりやすく提示した。授業はアシスタント学生による司会で始まり、学生同士わからないことがあつたら何でも質問できるようにした。授業の進み方は、(1) 日本の近代化と学校の始まり、(2) 教育勅語と学校の確立、(3) 大正自由主義から軍国主義へ、(4) 戦時下の軍国主義教育、(5) 戦後改革期の民主主義教育、

(6) 戦後復興から日本の教育への回帰、(7) 高度経済成長を目指した教育、(8) リッチな時代の到来と新保守主義の教育改革、(9) ポストモダンにおける「学校の自律性」と「ゆとり教育」、(10) 現代学校の今日課題、という順序で進めた。

②共通科目（転換・少人数科目） 基礎ゼミ 「現代の教育問題について解決策を提案する」

学生自身が、まず現代の教育問題について洗い出し、次にその調査研究をし、そして解決策をまとめて発表するというプロセスを通して、教育問題の奥深さと、追究の方法、そしてプレゼンテーションと討議の仕方を身に付けるように努力した。

1. 家庭・学校・社会に教育上のさまざまな問題があるので、受講生みんなで話し合いや調査を通じてこれを一通り析出した。
2. その上で参加者の関心によって、自分の追究するテーマを決めてもらった。参加者の人数によってはグループで対応してもらつたが、基本は個人的関心でテーマを決めさせた。その際、思いこみの第1次仮説を話してもらった。
3. テーマごとに毎週調査結果を話してもらい、関係する文献や資料を読んだり、問題によっては、当事者に聞き取りや実地検分をしてもらつたりした。
4. 第2次の仮説の発表会では、途中段階で修正した方法や結論の見込みについて発表してもらった。
5. 第3次が最後の発表会で、解決策を提案し、みんなでこれを討議し評価してもらった。

授業はこれで終わったが、基礎ゼミ終了後も活動が続いた。その研究課題は、「学校の宇宙認識を創る」というもので、研究成果を仙台市立富沢小学校で6年生約100人を相手に約30時間の授業を展開し、その上で評論家の立花隆と小惑星探査機「はやぶさ」のプロジェクトマネジャー、川口淳一郎・宇宙航空研究開発機構教授の2人を相手に小学生が討論するという企画を展開するに至った。これはNHKも注目することとなり、2012年3月30日のEテレで、一つの番組として報道される予定である。ここまで運べたのはTA役の大学院生（JAXA職員）の役割が大きかった。

③教職に関する科目 教職課程論 「学習指導要領が目指す人間像」

学習指導要領は学校教育の基準であり、これによって小中高のカリキュラムが設定されている。その学習指導要領ではどのような人間像あるいは能力育成を目指して企画されているのであろうか。「ゆとり世代」として、現代日本の青年は批判されているが、これを歴史的に分析することで、学習指導要領が意図した、本来の日本人像が見えてくる。私たちはどのような青年を育成すべきであろうか。この問題について考える力をつけることを目的として授業をした。下記の順序で展開した。

1. 学習指導要領とは何か。
2. 学校のカリキュラムは、何を目指して編成しているのか。
3. 過去・現在・未来を展望して、いかにカリキュラムを設計すべきか。

4. 学校教育に関する広い視野と自分の意見。総合科目「学校を考える」
 1. 授業の方針・総論
 2. 近代的人間像を目指して
 3. 新知識を有する儒教的人間像
 4. 天皇制下の忠君愛国の臣民像
 5. 民本主義社会で実用的な公民像
 6. 皇国之道へ行的鍛成に励む皇民像
 7. 第2次大戦後の民主主義社会を担う市民像
 8. 経済復興に努力する勤勉な国民像
 9. 高度経済成長下、生産性の高い目的追求型の国民像
 10. 成熟社会で多様な価値観の国民像
 11. 生涯学習社会を自己教育力で切り拓く国民像
 12. 不透明な情報化社会を生き抜く国民像
 13. グローバルな知識基盤社会で活躍する日本の市民像
 14. 討議
 15. 総括

④展開科目（総合科学（総合科目）） 総合科目 「学校に関する教育学・心理学等の諸科学の研究と方法」

学校は現在さまざまな問題を抱えているが、これを教育学部教員による教育諸科学の専門的見地から分析した。たとえば、教育制度論、教育哲学、教育行政、教育社会学、教授學習、教育課程、教育心理学、障害学等々から考察するなど、多角的な視点を提供した。これによって、学校の問題について、立場を変えて考察したり、別の学問の見地に立つたりすると、どのように見えるかを問う仕方で、深く洞察する力をつけるように進めた。なるべく学校をとりまく問題について、参加者みんなで話し合いをした。そのうえで、毎週、教育学と教育心理学の専門家によって学校の今日的課題を論じてもらい、確かな知識と言語表現力がつくように展開した。

(7) 藤 本 敏 彦

a. 教養教育院特任教員としての授業の狙いと取り組み

大学は「知識基盤社会」においてこれまで以上に期待され、専門教育の水準も年々高度になっている。その傾向に比例する様に新しいストレスも増加し、大学生の生活基盤に無視できない影響を及ぼしている。「スポーツ実技」や「体と健康」では学生が健康的かつ円滑な生活基盤を維持する教育を行うため以下の項目を教育のねらいとした。

- ①生涯にわたる心身の健康を維持するための知識・技術を習得する。
- ②他者とのコミュニケーションを必然的に持たせる。
- ③リーダーシップを育成する。

④本学の「教養教育の理念」の重要性を「武道の理念」を通して学ぶ。

⑤日本古来の伝統を知ることで国際比較観点を持たせる。

b. 各授業の実施状況

①共通科目 「スポーツ A」「スポーツ B」 ソフトボール

「スポーツ A・ソフトボール」は1・3セメスターに週4コマ開講し、2・4セメスターには週4コマ開講した。この授業の目的は 1. 試合を中心にソフトボールに必要な基本技術を実習し、ソフトボールの楽しさを体験すること、2. 体力の向上とスポーツによる心身のリフレッシュを図ること、3. チーム内における役割、特にリーダーの役割を経験すること、4. スポーツを通じてコミュニケーションを図ること である。

野球系のスポーツの練習は1つの野球場で30人程度が限界である。東北大学ではソフトボールを40~60人の多人数クラスで行うため、基礎練習が十分に行えない。このため試合の中での技術習得を重視した。試合で技術を向上させるためには幾つかの要因が必要で、各チームに熟練者を均等に配置すること、および対戦相手チームとの実力を均衡にすることを心がけた。またチームメート間でのコミュニケーションを円滑に図るため、さらにはリーダーシップの育成のため、ポジションや打順の決定、相手チームとのルールの摺り合わせは週替わりのキャプテンが中心となり学生自身で行うよう促した。さらに学生間のコミュニケーションを円滑視するため簡易の名札を使用した。教員は好プレーをした学生を大きな声で褒め、またエラーをした学生を安心させる声掛けをするよう心がけた。試合はリーグ戦で行い優勝チームを決定し、学生の意欲の維持に努めた。適宜チーム編成を行い、多くの友人とチームプレーができるようにした。2メセスターの「スポーツ A・ソフトボール」は冬季であるため、ソフトボール以外に、バスケットボール、フットサル、卓球などの球技を行った。

「スポーツ B・ソフトボール」は3セメスターに週2コマ開講した。基本的に授業の目的や方針はスポーツ Aと同様であるが、スポーツ Bではやや高度な戦術（ダブルプレーや守備位置のシフトなど）の習得を試みた。スポーツ Bの履修者は経験者の占める割合がスポーツ Aよりも高く、高度な戦術を行うことができた。この際、初心者などへの心理的配慮（エラーをした時の対処）も経験者が行ってくれたため、学生の授業への満足度は高いものであった。

ソフトボールの評価は出席日数と授業態度を評価の対象とし、AA・A・B・C・Dの5段階評価を用いている。

②共通科目 「スポーツ B」 武道

「スポーツ B・武道」は3および4セメスターに各1コマ開講した。この授業の目的は「日本の伝統文化」の一端を「武道」を通して経験し、その精神に触れることである。武道種目は3セメスターに合気道および柔道、4セメスターに空手および剣道を行った。東北大学における武道は佐藤 明准教授が担当されている弓道が継続的に行われており

高評価を受けている。しかしそれ以外の武道種目は履修生が減少し 5 年前に非開講となっていた。履修生の減少の原因として「痛い」「他者との接触がいや」「臭い」などが挙げられる。ところが東北大学では世界各国からの留学生が増えつつあり、専門領域の学習と共に日本文化を学ぶ教養教育の機会が求められている。そこで以下のことを改善し武道教育を本年度より新たに展開することとした。

- 1.目的が技術の習得ではなく、日本文化に触れることであることを周知した。
- 2.武道の理念の説明時間を比較的多くとる（礼儀の意味、思いやりの精神など）。
- 3.稽古など他者との接触は段階を踏んで導入することとした。
- 4.道具を清潔に保つため光触媒などを用い除菌を行った。

学生評価は概ね良好であるが、種目によっては一種目を長く行いたいとの意見が寄せられており授業形態に改善すべき点があると考えている。24 年度からは合気道と空手道を主に行いたい。4 セメスターに行われた空手の受講者は 4 名と少ないが、実際には海外留学生の聴講生が 4 名あり、計 8 名の履修者であった。成績評価は開講数の 2／3 以上の出席とし、技術評価は行わなかった。

③基幹科目「生命と自然」身体運動の仕組みと筋力

火曜日の 1 時限に開講した。この授業の目的は身体を動かす基本的な仕組みを学ぶことである。ヒトは思考を具現化するとき、常に身体を動かす必要がある。私たちはこの身体の動きを「運動」と呼び、「思考」と同様に、有意義で健康的な人生を送る上で最も重要な要素になる。したがって身体を動かす能力が高い人（つまり行動力のある人）はそれだけ思考を実現させる可能性が高くなるともいえる。身体を鍛えることはこの運動能力を高めることにほかならない。生涯にわたり運動の機能を維持するためには、まず身体を動かす仕組みを知り、その知識を日々のトレーニングや時には治療に反映させることが重要になる。この授業では基本的な脳による身体運動の制御方法と神経の機能、個々の筋肉の作用およびトレーニング法について解説を行った。23 年度は 273 名の受講があり好評であったが、成績評価などに課題も見つかった。

④共通科目「身体と健康」 身体の文化と科学

この授業はスポーツ担当教官がオムニバス形式で担当するものであり、藤本の担当は「トレーニングの基礎知識」と「運動と脳」の 2 コマであった。詳細は私が授業責任教員ではないため省略するが、授業のあり方に改善の余地があり保健体育科目委員会と協力して 24 年度から新しい体制で授業を実施する。

⑤共通科目（転換・少人数科目）「基礎ゼミ」 マッスル

この授業の目的は科学の基礎を楽しみながら学ぶこと、プレゼンテーションの方法を学ぶこと、そして筋力トレーニングや筋肉ケアの基礎を学ぶことである。学生が研究班を作り筋肉に関わることを調べ、プレゼンテーションを行った。またプロ野球のコンディショ

ニングコーチを招聘し、筋力トレーニングや筋肉ケアの実習を行った。研究対象は自由であるが、課題を科学的に捉え、調べる目的、仮説、論証の方法、結果、導き出される事実をプレゼンテーションすることを条件とした。教員は科学的プレゼンテーションの一例として、体の動きと筋肉の働きの関係について毎週プレゼンテーションを行った。

第1週目にセメスター内での進度説明と研究班の編成を行った。第2週目では各研究班のテーマの決定を行い、第3～11週目に調査・研究活動を行った。第12～14週目はコンディショニングコーチによる筋肉ケアの実習を行った。毎回ミニットペーパーを用い、各班の進捗状況を報告してもらい、次週のために問題点の洗い出しを行った。

c. 学生授業評価とその評価に基づく改善

①共通科目 「スポーツA」「スポーツB」 ソフトボール

学生授業評価は概ねどの評価項目においても良好であった。これまで最も多かった学生からの要望は雨天後のグラウンド状態の改善であった。学生支援係のご協力で、グラウンド整備がなされ、雨天の次の日にソフトボールができない状態は減少した。しかし基本的に川内北キャンパス野球場の水はけ状態は依然として悪く根本的な改修が必要と思われる。次に雨天時・冬季の種目変更について、いろいろなスポーツを行いたいとの意見もあった。施設との兼ね合いもあるが、教員として引き出しをさらに増やす努力が必要と考えている。またレクレーション的なスポーツでも競争心をくすぐる若干の工夫は必要である。チーム成績を参加者が見やすいような工夫が必要と考えている。

22年度の授業では学部によって「ソフトボール」の評価に違いが見られた。特定学部の授業では評価が委員会平均よりも低く、他の学部は委員会平均をやや上回っていた。学生に「東北大学でのスポーツ教育の意義」をより明確に伝えるなど、指導方法に工夫を講じたのが一因と思われるが、23年度はすべての授業において高い学生評価を受けた。

②共通科目 「スポーツB」 武道

学生授業評価は概ねどの評価項目においても良好であった。この授業は1セメスター内に2つの武道種目を各7週間の予定で行った。本年度は武道教育の再開の年であるためパイロット的な意味を含めこの形態とした。どの種目も好評であったが、一つの種目を長く行いたいとの意見が出された。今後、受講者の増加が見込めた段階でそれぞれの種目を独立させ、スポーツ教育の充実を図りたい。またスポーツBでは留学生の受講を見込んでいることから言語への対策を考える必要があろう。

③基幹科目 「生命と自然」 身体運動の仕組みと筋力

学生評価は概ねどの評価項目においても良好であった。受講者数は273名であり、ほぼすべての学生が単位を修得した。理想として「本当に学習したいと思う学生に履修してほしい」との思いから試験を行わない形式で授業を行った。しかし現実には居眠りや大幅な遅刻など現代学生に見られる行動が少なからず見受けられた。またそのことに対する注

意についてアレルギー反応を示す学生がいることもあり、ハラスメントの観点から厳しく注意を促すことができなかった。また他の学生からも注意する時間があれば授業を進めてほしいという要望もあった。これらのことから次年度は成績評価を小テストと期末テストで行い、学生のやる気を低下させない方針に変更することとした。

④共通科目「身体と健康」　身体の文化と科学

身体の文化と科学については学生授業評価の結果が手元にないため一般的な問題点をのべる。身体の文化と科学は各教官がオムニバス形式で授業を担当しているが、系統立てた授業ではない。身体の文化と科学の理念を見直し、授業に系統性を持たせることが急がれる。そのためには教科書の導入や担当教員の再編成、綿密な授業計画の作成などが必要と考えられる。24年度中には新たな授業体制を確立したい。

⑤共通科目（転換・少人数科目）「基礎ゼミ」　マッスル

学生授業評価は概ねどの評価項目においても良好であった。基礎ゼミ発表会にも参加し、授業の的である「科学的なプレゼンテーションを行う」は「科学的なプレゼンテーションに挑戦する」という形で一応達成したと思われる。ただし受講者全員が参加できたわけではなく、今後すべての学生が基礎ゼミ発表会に参加できるよう努力したい。

今年度もプロ野球のコンディショニングコーチを招聘し、主にテープニングの実習を行った。東北大学では多くの学生がスポーツ障害に対して独自に対応していることが多く、比較的多くの情報を提供できたと思う。また普段出会うことができないプロスポーツの一端に触れることができたことも学生に有益だったと思われる。

9. SLAの実施について

全学教育学習支援プロジェクト

SLA(スチューデント・ラーニング・アドバイザー)システムの開発～2年目の実践～

総長室助手(SLA サポート室室員) 足立 佳菜

SLA 開発支援員 鈴木 学

(監修：教養教育院特任教員 水原 克敏)

1. 事業目的

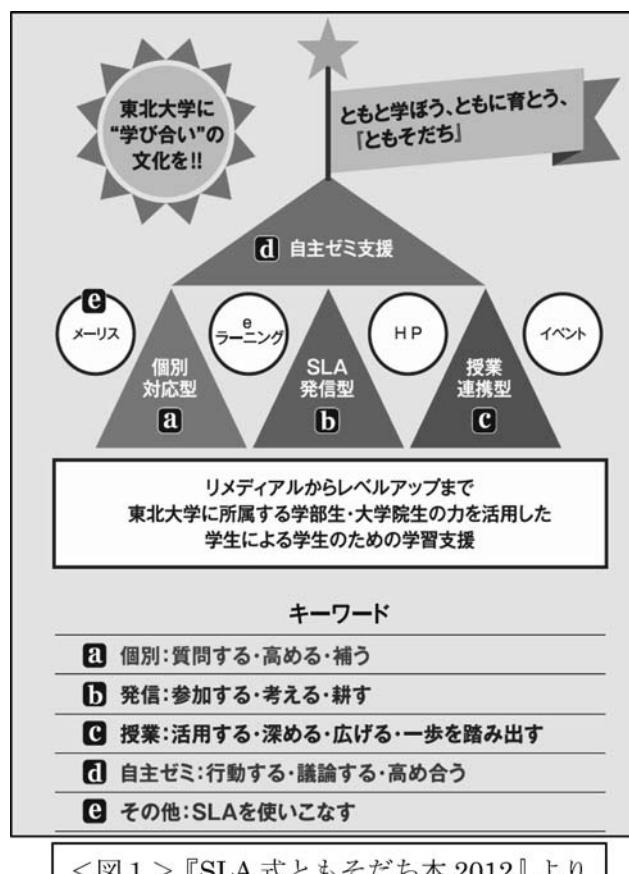
「全学教育学習支援プロジェクト SLA (スチューデント・ラーニング・アドバイザー) システムースチューデントアドバイザー制度の実践」は、東北大学全学教育における学習支援をスチューデント・ラーニング・アドバイザー (SLA) を核として行うものとして 2010 年度より開発を行っている事業であり、本年度はその 2 年目にあたる。具体的には、本学学部 1~2 年生を主たる対象として「学生同士の学び合いのネットワーク」を構築すること、またそれに伴い東北大内（全学教育対象）の学習支援組織の連携協力体制を促進することを目的としている。

本事業の活動主体となる学生スタッフのことを、「スチューデント・ラーニング・アドバイザー (SLA)」と呼ぶ。SLA の活動目的は、主に学部 1~2 年生（全学教育）に対する学習支援・補助である。SLA には、学部学生と大学院生どちらも従事することができるが、主力としては学部 3・4 年生を想定しており、支援対象となる学生と、少し上の先輩とのつながりを重視している。

2. 実施過程

本事業の活動拠点は、東北大学川内北キャンパスマルチメディア教育研究棟 1 階エントランスホール部分である。SLA の活動場所を「川内ラーニング・プラザ」、本事業の開発・運営を行う事務室を「SLA サポート室」とし、2010 年 2 月からの準備期間を経て、2010 年 4 月より本格的に活動を開始した。（略歴は、表 1）

2011 年度は、2010 年度に立てた SLA 事業の 3 本柱の恒常的な運営を模索すると共に、そこから出た課題に対応する形で、新たな学習支援方法も取り入れ、全体像の見直しを図った。本事業は、大きく 3 つの柱となる活動で学習支援を行い、これらの支援が結実する形として想定されている「自主ゼミ」への支援を加え、4 つの支援活動



<図 1>『SLA 式ともそだち本 2012』より

を行っている（図1）。それは、①個別対応型学習支援（通称：個別SLA）、②授業連携型学習支援（通称：授業SLA）、③SLA発信型学習支援、④自主ゼミ支援の4つである。

2011年度の前期・後期のSLAの体制は添付資料1の通りである。参照いただきたい。

＜表1 2011（平成23）年度SLA事業略歴＞

2010年2～3月 4月1日	事業準備期間（於 教育学研究科水原研究室内） 事業活動開始
2011年4月 5月9日 5月10日 5月16日 5月24日 6月10日 9月9日 9月9日 9月14～16日 9月16日 9月29日 10月3日 10月3日 10月11日 10月18日 10月25日 11月～ 11月14日 12月8日 12月22日 2012年1月31日 2月13日 2月15日 2月21日 2～3月中	震災の影響によりSLAサポート室をA401に仮設置し活動（～19日） 全学教育前期授業開始 平成23年度前期SLA向け活動説明会実施 ／授業SLA各授業（6授業）で隨時活動開始／自主ゼミ支援開始 個別SLA質問窓口受付開始 英会話ゼミ開始（前期週2～3回実施） 教育ゼミ開始（前期週1回実施） 全学教育前期授業期間終了（～9月22日補講期間） 個別SLA質問窓口受付終了 第一回SLA合宿実施（於：川渡セミナーセンター） 平成23年度前期自主ゼミ合同報告・交流会実施 平成23年度後期SLA向け活動説明会実施 全学教育後期授業開始 授業SLA各授業（1授業）で隨時活動開始 個別SLA質問窓口受付開始 英会話ゼミ開始（後期週3回実施） 第一回雑学ゼミ実施（美術） 来年度新入生向け『SLA式ともそだち本2012』作成開始（3月末完成）／ 個別SLA新利用方法「SLA学びのプロポーザル方式」試行／SLAメーリス試行 第二回雑学ゼミ実施（化学） 第三回雑学ゼミ実施（数学） 関西大学訪問調査 平成23年度全学教育後期授業期間終了（～2月10日補講期間） 個別SLA質問窓口受付終了 平成23年度後期自主ゼミ合同報告・交流会実施 平成23年度SLA活動報告会実施 SLA有志による、e-learning教材作成作業（14・20日講習会実施）

（1）個別対応型学習支援（個別SLA）

【内容】

個別SLAは、学部1～2年生からの学習相談・質問を川内ラーニング・プラザにてSLAが受け付けるものである。平日の2～5限の間、主として物理・数学・化学の質問に対応している。

個別SLAは、SLA事業の中でも最もサイクルが確立しつつあり、安定性がある。課題は、

理系偏重型であることと、従事する SLA 学生の確保と教育体制である。

【成果】

量的な成果としては、2011 年度の利用学生数はのべ 1327 人、前年度比のべ約 950 人増（341%）となり順調に利用数が拡大している。質的な成果としては、総数が増加した中でも、テスト前の駆け込み利用だけではなく定期的な利用をする学生も比例して増加していることや、“上手な活用”（自分で考えてから質問に来たり、復習のために質問に来たりする事例）が増えてきたことなどが挙げられる。

科目別の利用率は、物理 47%、数学 35%、化学 15%、その他 3%である（ただし、物理と数学は重複するところがあるため一概には言えない）。利用学生の所属は、工学部生 53%、理学部生 25%が大半を占める（資料 2）。利用学生に満足度を点数化してもらったところ、平均 96.63 点であり（サンプル数 175 人、任意協力）、高い評価を得ている。



＜個別 SLA の様子＞

（2）授業連携型学習支援（授業 SLA）

【内容】

授業 SLA は、TA のような形で授業ごとに SLA を配置し、担当授業の受講生を対象として学習支援を行うものである。授業を核としながら、意欲のある学生同士で授業外のサブゼミを行うなどの支援に結びつくことを目標としており、個別 SLA のような方法の学習支援にあまり適さない文系学生向けの学習支援方法として在り方を模索しているところである。

【成果】

本年度は、6 名の教員に協力を得、7 つの授業（①[展開]教育学〈水原克敏先生〉、②[展開]心理学×2〈邑本俊亮先生〉、③[共通]スポーツ B 〈吉成武久先生〉、④[基礎ゼミ]西洋近代史への誘い〈関内隆先生〉、⑤[基礎ゼミ]「くすりの効き目と副作用」を科学する〈眞野成康先生他〉、⑥[総合]学校を考える〈水原克敏先生〉）で活動を行った（受講生総数は約 550 名）。本年度・来年度共に、基礎ゼミでの活動に主軸を置くことで、SLA 事業のコンセプトを重視する形で活動を展開する方針である。

（3）SLA 発信型学習支援

【内容】

個別 SLA はニーズ先行型の要素が強く、理系—その中でも物理・数学に質問が偏りがちであること、授業 SLA は、教員の理解・協力を得られなければ活動が広がっていかないことなどから、SLA から学部 1・2 年生向けに学びの機会を積極的に提供していくこうとした活動を集約しているのが SLA 発信型学習支援である。具体的には、2011 年度は、①英会話ゼ

ミ、②教育ゼミ、③雑学ゼミを実施した。英会話ゼミは、前年度、個別 SLA と同じ枠で運用していた「英語」の窓口があまり機能しないことを受けて、発信型に切り替えたものである。②の教育ゼミは、前年度の授業 SLA の活動にヒントを得、教育に興味がある学生にゼミ活動を呼び掛け、前期セメスター中、SLA サポート室・SLA・学生で勉強会を行ったものである。③の雑学ゼミは、SLA が自身の研究分野を核にして情報を提供し、異分野の学生交流とそれぞれが教養を深める場として、月一回のイベント的に会を試行してみたものである。

最後に、SLA の WEB ページ開設に伴い、e ラーニングのページを設けたことも発信型学習支援の一形態である。まだ教材自体は少ないが、個別 SLA の活動の集積を活用することで、個別 SLA の活動にも相乗効果をもたらすことを期待している。



＜英会話ゼミの様子＞

【成果】

- ①英会話ゼミ：運営方法が安定してきた後期セメスターでは、火・水・金の昼休みに各曜日で趣旨の異なるゼミを開催し、前期とあわせてのべ 398 人の利用を得た。今後の課題は、実数の拡大と、日英の語学が堪能な SLA 学生の確保である。
- ②教育ゼミ：ゼミに参加していた学生たちが自主ゼミを結成し、自主活動につながっていったことが成果であった。
- ③雑学ゼミ：広報をあまり大々的に行わなかったこともあり参加人数は奮わなかつたが、興味を持ってくれる学生が確かにいることもわかり企画趣旨としては可能性を感じた。また、SLA の研修の機会としての意義も見込まれると考えている。

(4) 自主ゼミ支援

【内容】

自主ゼミ支援は、既に活動を行っている自主ゼミに対しては、①活動場所の提供、②ホワイトボード・ペンの備品貸出、③アドバイザーとしての SLA の派遣、④自主ゼミ立ち上げ段階の支援、⑤自主ゼミ交流会の実施などを行うことで、活動の円滑化・促進を図っている。また、彼らとの交流の中で、自主ゼミ活動を広げていく手立てを模索するなどしてきた。



＜自主ゼミ合同報告・交流会の様子＞

【成果】

2011年度中支援を行ったのは、前期7ゼミ77名、後期9ゼミ98名であった。この他、自主ゼミ結成までには至らなかったが、こうした活動についての相談を数件対応した。2年目の成果としては、支援を行ってきた自主ゼミから次第に輪が拡大しつつあること、文系の自主ゼミも取り込めつつあることなどである。また、自主ゼミ支援を行って来た背景には、人材が命運を握るSLA事業において、学習意欲が高く共同作業を経験している人材と関わりを持つというねらいもあった。そんな中、1年生の時から自主ゼミ支援で関わっている学生が来年度3年生になるのを機にSLAとして活動したいという申し出を2名から受け、支援を受ける側から支援をする側へのよい循環が築ける可能性を感じている。

(5) その他活動成果

【内容】

- ①SLAホームページ稼働 <http://www.sla.dc.tohoku.ac.jp/>
- ②SLA合宿（研修）を2泊3日で実施
- ③来年度新入生向け SLA利用案内&学習支援冊子『SLA式ともそだち本2012』作成
- ④SLA通信（月刊）の発刊、SLAメーリスの試行実施（※利用学生向けの情報発信ツール）
- ⑤関西大学教育開発支援センター訪問調査（12月22日）
- ⑥SLA採用時の試験問題試行整備
- ⑦フロアの設備（机・椅子）拡充・整備

【成果】

本年度の新たな取り組みとして、夏休業期間を利用した2泊3日（正味2日間）のSLA合宿が挙げられる。合宿では、2011年度前期活動報告会・SLA研修会・ワークショップを行い、SLA自身がSLA事業を理解することを通して、SLAの組織力を高めるよい機会となった。今回は、SLAサポート室とSLAのみが参加した形であったが、ゆくゆくは協力教員や学部1・2年生を巻き込んだ形で学習イベントを企画していきたいと構想中である。



関西大学教育開発支援センターへの訪問調査では、特に学部生の“学生の力”を活用した学習支援・FD事業を展開している関西大学において、学生の力を活用して学習支援を行う（特に授業の中で）ということに関する意義・課題・運営方法の工夫等について示唆を得ることを目的とし、調査を行った。

成果の一部として、当センターが院生では



なく学部生に積極的な意義を見出しているのを確認できたことが挙げられる。先輩学部生が学部 1・2 年にとっての「手の届くモデル」として機能していることは興味深いものであった。また、各授業で個々の活動となる「LA（関西大学での呼称）」たちを、一つの組織とするためのセンターの役割も再認識した。

3. 本年度活動総括と次年度への課題

初年度に開発に着手した諸活動の安定的運営を模索しながら、全体像を再構築する作業が 2011 年度の 1 年間であった。そして、個別 SLA の活動を中心として、利用者のかなりの増加を図ることができた。利用者拡大には、全新入生に配布した『SLA 式ともぞだち本』の効果も影響していたと考えられる。

次年度への課題は、主に下記の 4 点である。

- ① 2 年間を通して、前期・後期の利用者数に大きく格差があることが確認された。SLA の人数を前期・後期で増減させることは容易ではないため、シフトの調整や活動内容に変化をもたらせることで、運営上の工夫をする必要がある。【年間のサイクルの整備】
- ② SLA 人材確保の方法は、現在は、SLA の推薦や諸活動の関係者の中でよい人材を得られるようになってきている。しかし、新たな活動（主に文系支援）には新たな人脈づくりが必要となるので、組織の安定性が得られれば、「公募」等の形式も整えていきたい。【人材確保の方法】
- ③ 外部（利用学生、教員および関係者）への発信を強化していきたい。【広報活動】
- ④ 前年度に引き続き、文系向けの学習支援の方法を模索していく必要がある。【文系支援】

すでに、③や④を主に意識して、SLA 事業でお借りしている放課後の講義棟 A 棟 4 階教室の新たな活用方法を模索している。より学生にとって身近な（自然な）形で、学生同士が「学び合う」文化・風土創りを進めていけるよう、2012 年度の活動を展開していきたい。

資料

1. 利用学生数（総合）

<表2 SLA 利用学生数（総合）>

	個別 SLA	英会話ゼミ	教育ゼミ	雑学ゼミ	授業 SLA	自主ゼミ	
5月	102人	25人	—	—	約500名 (受講生数)	77名	
6月	323人	90人	50人	—			
7月	210人	63人	34人	—			
8月	181人	37人	—	—			
9月	79人	—	—	—			
10月	75	52人	—	11人	約30名 (受講生数)	98名 ※前期から -5名、+26名	
11月	112	77人	—	6人			
12月	77	25人	—	6人			
1月	130	25人	—	—			
2月	38	4人	—	—			合計
合計	1327人	398人	84人	23人	約530人	103名	4190人

(単位 のべ数「人」、実数「名」)

2. 個別対応型学習支援（個別 SLA）詳細

①窓口受付日数（通常窓口）

5月：15日間、6月：22日間、7月：18日間、8月：10日間、9月：5日間
10月：15日間 11月：19日間、12月：20日間、1月：16日間、2月：9日間 全149日間

②利用者数

<表3 個別 SLA 利用学生数詳細>

	のべ数	前年度比	1日当たりの人数	実数
5月	102人	+93人 (1133%) ※	6.8人	64名
6月	323人	+293人 (1077%) ※	14.7人	163名
7月	210人	+164人 (4567%) ※	11.7人	129名
8月	181人	+181人 (-) ※	18.1人	119名
9月	79人	+79人 (-)	15.8人	64名
10月	75	+31人 (170%)	4.9人	52名
11月	112	+41人 (158%)	5.9人	68名
12月	77	+25人 (148%)	3.9人	48名
1月	130	+29人 (129%)	8.2人	65名
2月	38	+2人 (106%)	4.2人	31名
合計	1327人	+938 (341%)	平均 9.42人	803

◆この他、9月中に通常窓口外で1人対応

※2011年度は震災の影響で1ヶ月遅れの開始となったため、実質の前年度比は以下のようになる。

2011年5月 (対2010年4月) = —
2011年6月 (対2010年5月) = +314 (3588%)
2011年7月 (対2010年6月) = +180 (700%)
2011年8月 (対2010年7月) = +135 (393%)

④科目別利用件数

<表3 個別SLA 科目別利用件数>

(単位:件)

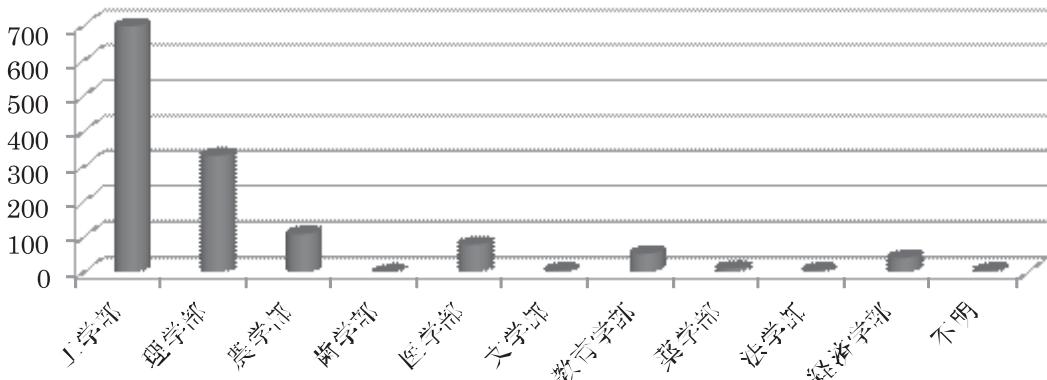
利用者件数	物理	数学	化学	その他	合計
	547	401	173	30	1151

⑤個別SLA 所属別利用者数

<表3 個別SLA 所属別利用学生数>

学部	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	合計
工学部	60	162	124	109	38	37	47	43	62	15	697
理学部	27	87	44	26	10	27	49	18	34	8	330
農学部	4	35	11	12	15	4	3	5	13	6	108
歯学部	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0
医学部	7	18	12	6	2	4	10	8	6	5	78
文学部	—	—	1	—	—	1	—	—	1	1	4
教育学部	3	19	4	15	8	—	1	—	2	—	52
薬学部	—	1	1	1	5	—	1	—	—	1	10
法学部	—	1	3	—	—	—	—	—	—	—	4
経済学部	1	—	10	9	1	1	1	3	11	3	40
不明	—	—	—	3	—	—	—	—	1	—	4

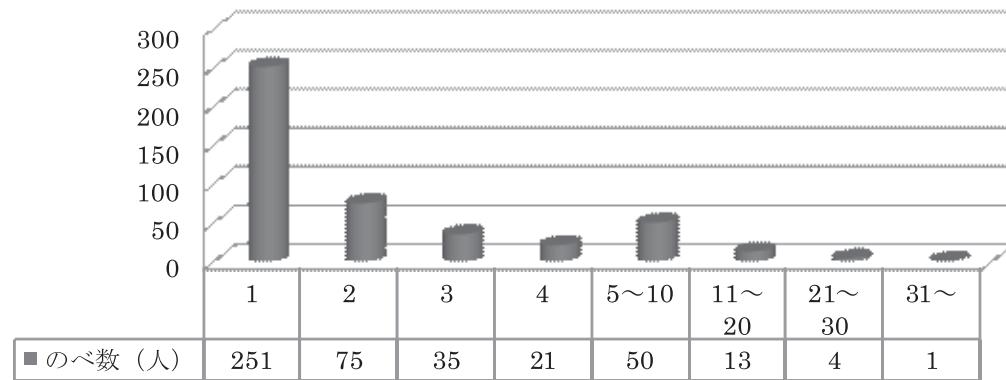
<a 個別SLA「学部別」利用者数(のべ)>



(※複数人同時利用の場合、代表者の所属で人数分をカウント (のべ数 単位:人))

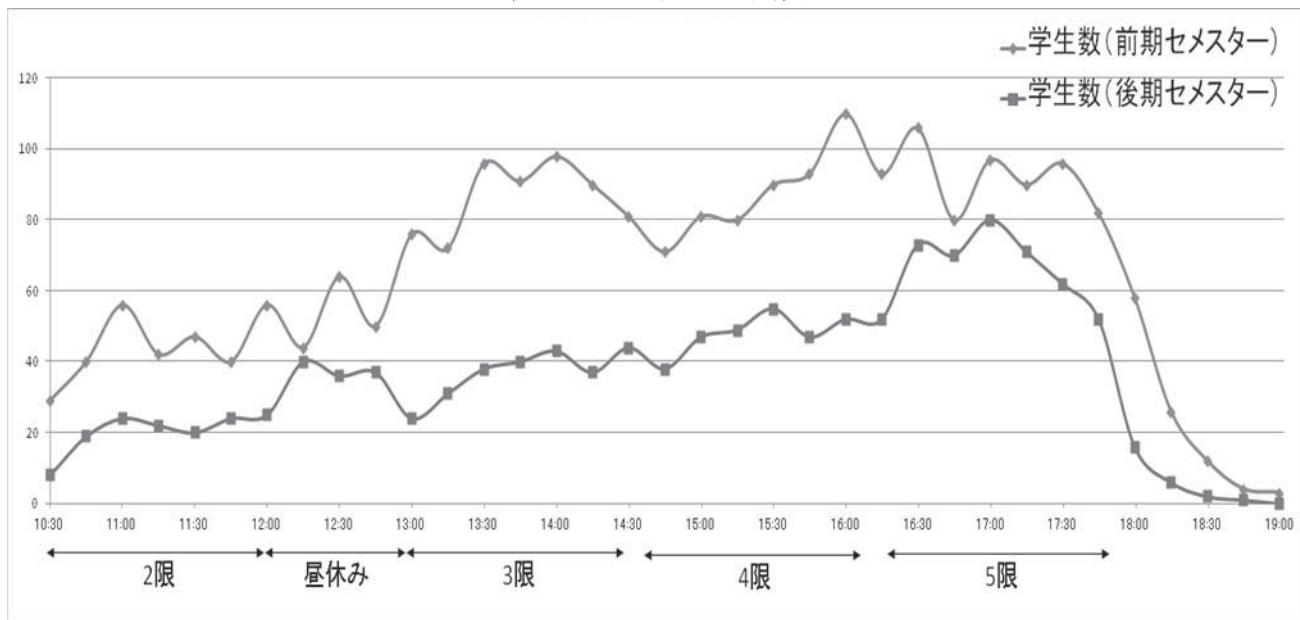
⑥個別SLA 利用回数別利用者数

<b 個別SLA「利用回数別」利用者数>



⑦個別 SLA 利用時間分布

<c 個別 SLA 利用時間分布>



※前期 (5月 16日～8月 31日)・後期 (10月 11日～2月 13日)

⑧利用学生さんの声 (一部)

- 大学に入ると質問したいことがあっても、質問できる人がなかなかいなくて困っていたときにここを見つけました。細かく教えていただいてとても理解しやすかったです。やる気が出ました。ありがとうございました。あとは自分でも自習を積みたいと思います。
- 今回も SLA の方々にわからなかつたところを丁寧に教えてもらい、本当に感謝しています。毎週行っているので、顔も覚えてもらいいいつも楽しく学習させてもらっています！SLA 行くのが一週間の楽しみの 1 つになりました。これからも宜しくお願ひします！
- どんな問題でも学生さんと一緒に考えて答えを探っていくというスタンスがすごくいいと思いました。SLA さんに丁寧に教えていただき、納得しながら理解に至ることができました。本当にありがとうございました。
- さっぱり物理が分からなくて、絶望しかけていた時に質問してみると、大変わかりやすく教えてくださいました。やっぱり勉強はわかると楽しいものです。ありがとうございました。
- わからないところはハッキリさせてから来た方がいいけど、なんかわかんないなあくらいで来ても大丈夫。
- もっと難しいことにしか答えてもらえないかと思ってたけど、あほな質問にも答えてくださって、ありがとうございます！！
- 美人 SLA さんに教わりました。私もこんな風になりたい。

3. SLA 発信型学習支援

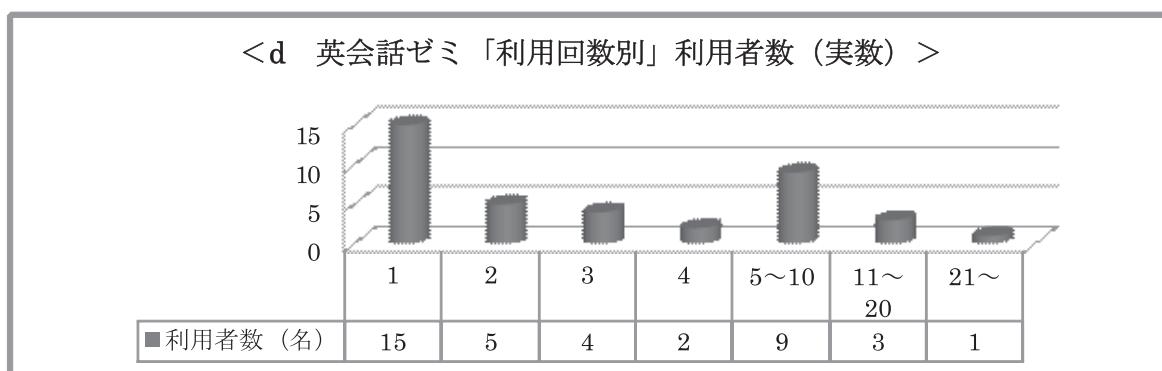
(1) 英会話ゼミ

①利用者数 (のべ)

	5月	6月	7月	8月	10月	11月	12月	1月	2月	合計
開催回数 (回)	3	9	8	6	6	12	9	9	2	64
利用者数 (人)	25	90	63	37	52	77	25	25	4	398

■一回平均 4.8 人

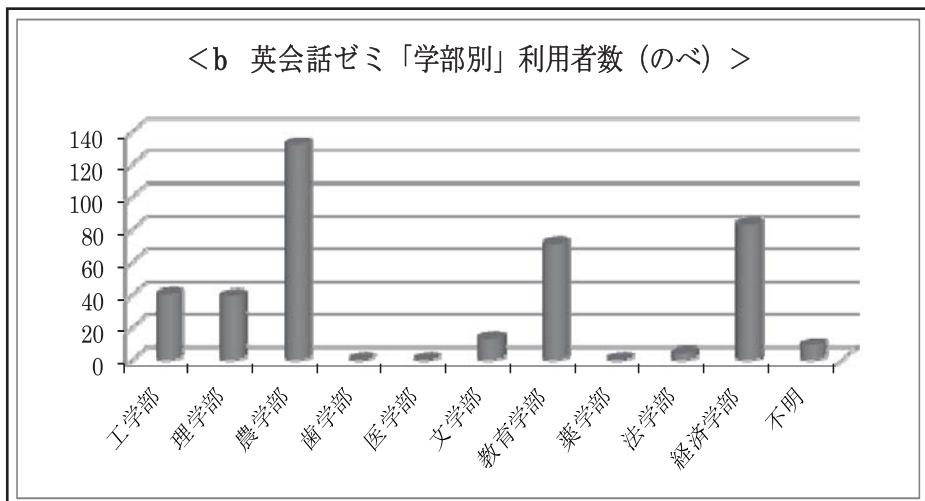
②英会話ゼミ利用回数別利用者数



③所属別利用学生数

学部	合計
工学部	40
理学部	39
農学部	132
歯学部	0
医学部	0
文学部	13
教育学部	71
薬学部	0
法学部	4
経済学部	83
不明	9

(のべ数 単位：人)



4. 自主ゼミ支援

<前期>

■ 支援数：7 ゼミ 77 名

■ 「2011 年度前期自主ゼミ合同報告・交流会」参加者：6 ゼミ 11 名（他、SLA1 名）

<後期>

■ 支援数：9 ゼミ 98 名

■ 「2011 年度後期自主ゼミ合同報告・交流会」参加者：6 ゼミ 15 名（1 名ゼミ外部者含む）

5. SLA 体制関連データ

(1) 主要担当別

<前期>

	個別対応型			授業連携型	発信型		合計
	物理	数学	化学		授業	英会話ゼミ	
博士	1			1	1		3
修士	6	5	4	2	2	1	20
学士	2	3		5	4		14
合計	9	8	4	8	7	1	37

<後期>

	個別対応型			授業連携型	発信型		合計
	物理	数学	化学	授業	英会話ゼミ	その他	
博士	1				1		2
修士	6	4	5		1	1	17
学士	8	5	1	1	3		18
合計	15	9	6	1	5	1	37

(2) 所属・学年別

<前期>

	工	理	農	文	教	薬	経	環境	国際	合計
博士~		1		1					1	3
修士2(6年)	2	1		1	1	1		3		9
修士1(5年)		9	1					1		11
4年	1	2		1	1	1		—	—	6
3年		3			3		1	—	—	7
2年	1							—	—	1
1年								—	—	0
合計	4	16	1	3	5	2	1	4	1	37

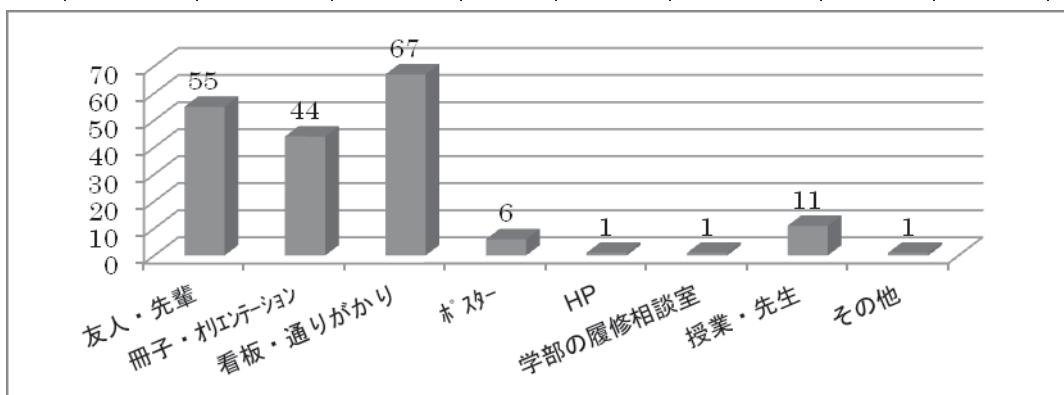
<後期>

	工	理	農	文	教	経	環境	合計
博士~		1		1				2
修士2	2	1		1			2	6
修士1	1	9	1					11
4年	1	3					—	4
3年		10			2	1	—	13
2年							—	0
1年		1					—	1
合計	4	25	1	2	2	1	2	37

6. その他

(1) SLA を知った理由調査（個別 SLA の窓口において新規利用者に対し任意協力で実施）

	友人・先輩	冊子・リエーション	看板・通りがかり	ポスター	HP	学部の履修相談室	授業・先生	その他	合計
合計	55	44	67	6	1	1	11	1	186



10. 『読書の年輪』の発行

教養教育への寄与の一環として、新入生が勉学を始めるまでの一つのガイドブック『読書の年輪—研究と講義への案内—』が、教養教育院から 2010 年 4 月に初めて刊行され入学時に新入生に配布された。それ以来、2011 年 4 月にその第二版、そして 2012 年 3 月には第三版が刊行された。この小冊子は、教養教育院に属する総長特命教授が、各自の講義やゼミをめぐり、またそれらの背景にある研究生活の一端をも紹介するもので、それぞれが 6 冊の本を選んで紹介している。

2010 年度版では、森田 康夫、海老澤 丕道、柳父 圭近、秋葉 征夫、海野 道郎の 5 名の総長特命教授が執筆した。2011 年度版は、2010 年 4 月から総長特命教授に就任した工藤 昭彦教授の原稿が前年度版に加わり、総勢 6 名によるものとなった（2011 年 3 月には先の総長特命教授のうち 3 名が退職したが、2011 年度版にはこれら教授が旧版に執筆したものも掲載）。2011 年度の新学期開始は、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災の発生により例年より遅れて 5 月初めとなった。このことにより新入生には、およそ一ヶ月間の空白期間が生じることとなった。このことを考慮し、2011 年度は、『読書の年輪』を入学者全員に入学前に送り届けて勉学意欲を高める一助とした。

2012 年度版では、先の 6 名のものに 2011 年 4 月から総長特命教授に就任した前 忠彦教授の原稿が加えられ、旧版の一部改訂も行われた。総ページ数は 38 ページとなった。前年度の入学前の配布が学生には好評だったことから、2012 年度も前年と同じく『読書の年輪』を入学前に入学者全員に送り届けることとした。

以下に 2012 年度版の目次項目を掲げておく。

刊行にあたって	根元 義章
若い頃の洋書との出会い.....	前 忠彦
乱読の履歴—そしてこれから推薦本—.....	工藤 昭彦
学問とは何か—大学は何を目指すべきか—.....	森田 康夫
本との出会い—今、君たちだったら—	海老澤丕道
「大学時代でなくてもできること」ではなく	柳父 圭近
学ぶ本・議論する本・楽しむ本・鼻歌交じりの本…出会った本	秋葉 征夫
教育・研究の舞台裏—私を支え・慰め・励ましてくれた本—	海野 道郎
本誌の書籍紹介一覧	

11. 教養教育特別セミナーと合同講義の実施

前年度に始めた「総長特命教授合同講義」には次のような願いが託されていた：総長特命教授は、それぞれの出身部局や専門分野を異にしている。したがって、この異質なものが競演することによって、学生諸君に対して新たな知的刺激を提供できるのではないか、というのが、合同講義の趣旨であった。専門分野を横断して存在する「知の共通性」、そしてまた、専門分野を異にすることによる「知の独自性と拡がり」、そのようなものを、将来性に満ちた若者たちの前で展開してみたい。

さて、専門教育の重要性は新入生にとっても分かりやすいが、専門とは少し離れた教養教育の重要性は新入生にとっては分かり難く、後になって「あの時もっと勉強しておけば良かった」と後悔することが多いようである。そこで、本年度の合同講義をどうするべきかを検討する中で、入学したばかりの新入生を対象にして教養教育の重要性を訴える「教養教育特別セミナー」を実施してはどうかというアイデアが生まれた。この様なことを検討している最中に東日本大震災が起こり、本年度の授業開始は連休明けとなった。そこで教養教育院は高等教育開発推進センターと協力して、新入生全員を対象として5月9日（月）に「教養とは」をテーマとした「教養教育特別セミナー」を実施した。また東日本大震災を受けて、11月1日（火）の総合科目の時間に、総長特命教授全員が協力して、「震災」をテーマとした合同講義を実施した。この2つの講義の記録は「教養教育院セミナー報告」として作成された。

教養教育特別セミナーと合同講義は、学生諸君に対する東北大学の期待の顕われでもある。卒業後に社会のリーダーとして活躍することが強く期待されており、それに応えるだけの資質を持った人の集まりでもある東北大学の学生にとって、卒業後の社会生活の場において的確な判断をする能力を養うことは必須のことであろう。その判断は、世の中を大きく左右することになるし、判断する個人の人生をも左右してしまう。そして、的確な判断能力を涵養するためには、少なくとも、しっかり学び、しっかり考えなければならない。

異なる専門分野を背景とした教育者・研究者による知の競演は、必ずや、学生諸君に対して大いなる知的刺激を与え、自ら学び考える道に彼らを誘ったものと思われる。受講者に対して行ったアンケートにおいて、継続希望者が過半数を占めたことは、その傍証であろう。報告書にアンケートの集計を記載したが、合同講義では、参加した学生が総長特命教授の担当する総合科目の履修者であった場合に担当教授にレポートを提出させた。その内容から、学生諸君の感想ばかりではなくどのように考えたかが分かる。そのサーベイには意義があると考えるので、まとめたものを記録に残すべきかも知れない。広範な内容なので、ほんの一部を紹介すると、震災後の教育の在り方についての意見は多く見られた。広い視野を持つこと、一般市民が科学について基礎教養を持つこと、専門家と一般人また世界各地の間のコミュニケーションの必要性、などを自らに向けたりまたそのための人材の育成の必要性を説くなど、様々である。また大学の研究の在り方についての疑問提示もあった。また、講義の内容についての意見もあり、自分の立場から異議を述べたものもあった。その他も含めて、このように自らを問題把握と解決の流れの中において考

える姿勢は評価して良いだろう。難しい内容だったが有意義だったとか、討論の時間がもっとあれば発言したかった、なども参考になる意見である。

以下に、教養教育院セミナー報告の目次を示す。

平成 23 年度 教養教育院セミナー報告

教養教育特別セミナー「教養とは？」

総長特命教授合同講義「震 災」

目 次

教養教育院合同講義の新展開（教養教育院長 根元義章） i

第Ⅰ部 教養教育特別セミナー「教養とは？—東北大学生として考えてほしいこと—」

1. 1. 事前配布資料	1
1. 2. 特別セミナーの記録	
・司会（高等教育開発推進センター副センター長 関内 隆）	2
・教養教育院長 挨拶（根元義章）	2
・セミナー	
・話題提供 1 「教養教育の歴史」 （森田康夫）	5
・話題提供 2 「物理学と教養」 （海老澤不道）	11
・話題提供 3 「教養の三層構造」 （工藤昭彦）	18
・パネルディスカッション（木島明博、水原克敏、話題提供者、参加者）	24
・まとめと閉会	35
1. 3. 特別セミナーに対する学生の評価	36

第Ⅱ部 総長特命教授合同講義「震災」

2. 1. 事前配布資料	41
2. 2. 合同講義の記録	
・司会（海老澤不道）	44
・挨拶（高等教育開発推進センター副センター長 関内 隆）	44
・講義	
・「想定外の津波と福島第一原発」 （森田康夫）	46
・「塩害、放射能汚染と作物」 （前 忠彦）	53
・「限界領域から探る震災復興の回路」 （工藤昭彦）	59
・討論（講義者、参加者）	66
・まとめと閉会	72
2. 3. 合同講義に対する学生の評価	73
あとがき	76

12. 会議の実施状況

(1) 教養教育院連絡会議と総長特命教授連絡会議

第 1 回 教養教育院連絡会議

日時：平成 23 年 5 月 17 日（火）14：00～

検討事項

1. 今年度の検討事項について

分担などの確認をした。その後、今夏の節電対応についての意見交換、外国語教育についての注意、教養教育のセミナーの報告があった。

第 1 回 総長特命教授連絡会議

日時：平成 23 年 5 月 17 日（火）教養教育院連絡会議終了後

検討事項

1. 検討事項の分担などの確認

2. 教養教育院の予算要求の方法について

第 2 回 教養教育院連絡会議

日時：平成 23 年 6 月 14 日（火）15：00～

検討事項

1. 今年度の検討事項について

年次報告書、総長との懇談、SLA、外国語教育について報告などがあった。

第 2 回 総長特命教授連絡会議

日時：平成 23 年 6 月 14 日（火）教養教育院連絡会議終了後

検討事項

1. 今年度の検討事項について

シンポジウムの開催、TA の配置・活用、教養教育の将来構想・あり方等について報告などがあった。

第 3 回 教養教育院連絡会議

日時：平成 23 年 7 月 12 日（火）14：00～

検討事項

1. 今年度の検討事項について

年次報告書、総長との懇談、SLA、外国語教育、保健体育教育について報告があった。また、受講生数と担当する教員数のアンバランスな状況について意見交換があ

った。

第3回 総長特命教授連絡会議

日時：平成23年7月12日（火）教養教育院連絡会議終了後

検討事項

1. 今年度の検討事項について

合同講義、教養教育の将来構想・あり方などについて報告などがあった。

第4回 教養教育院連絡会議

日時：平成23年9月6日（火）14:00～

検討事項

1. 今年度の検討事項について

年次報告書、総長との懇談、教養教育院の在り方・将来構想、SLA、外国語教育について報告があった。年次報告書を増刷することにし、SLAについて意見交換した。

第4回 総長特命教授連絡会議

日時：平成23年9月6日（火）教養教育院連絡会議終了後

検討事項

1. 本連絡会議について、検討事項に関する議論の必要が無いときは、簡略化して実施することとした。

第5回 教養教育院連絡会議

日時：平成23年10月18日（火）13:00～

検討事項

1. 今年度の検討事項について

総長との懇談、SLA、外国語教育について報告などがあった。

2. その他

合同講義の予定が報告された。

第5回 総長特命教授連絡会議

日時：平成23年10月18日（火）教養教育院連絡会議終了後

検討事項

総長特命教授連絡会議として特に議論する事項が無いため教養教育院連絡会議が兼ねることとした。

第6回 教養教育院連絡会議

日時：平成 23 年 11 月 22 日（火）14：00～

検討事項

1. 今年度の検討事項について

総長との懇談、教養教育院の在り方・将来構想、SLA、外国語教育などがあった。

2. その他

国立七大学学生関係協議会、合同講義の実施、JAXA と NHK が連携する事業などについて報告があった。

第 6 回 総長特命教授連絡会議

日時：平成 23 年 11 月 22 日（火）教養教育院連絡会議終了後

検討事項

総長特命教授連絡会議として特に議論する事項が無いため教養教育院連絡会議が兼ねることとした。

第 7 回 教養教育院連絡会議

日時：平成 23 年 12 月 14 日（水）10：30～

検討事項

1. 今年度の検討事項について

総長との懇談、教養教育院の在り方・将来構想、SLA、外国語教育、保健体育について報告や意見交換があった。

第 7 回 総長特命教授連絡会議

日時：平成 23 年 12 月 14 日（水）教養教育院連絡会議終了後

検討事項

教養教育の将来構想・あり方等について意見交換があった。

第 8 回 教養教育院連絡会議

日時：平成 24 年 1 月 31 （火）14：00～

検討事項

1. 今年度の検討事項について

年次報告書の作成、シラバスの確認作業、総長との懇談、教養教育院の在り方・将来構想、SLA、保健体育、JAXA と NHK が連携する事業について報告などが行われた。

第 8 回 総長特命教授連絡会議

日時：平成 24 年 1 月 31 （火）教養教育院連絡会議終了後

検討事項

4月の合同講義、読書の年輪、3月の全学教育FDについて検討した。

第9回 教養教育院連絡会議

日時：平成24年2月14日（火）14：00～

検討事項

1. 今年度の検討事項について

年次報告書の作成、シラバスの確認作業、総長との懇談、SLA、外国語教育について報告があり、秋入学について意見交換がなされた。

第9回 総長特命教授連絡会議

日時：平成24年2月14日（火）教養教育院連絡会議終了後

検討事項

読書の年輪について報告があり、教養教育院年報の作成について検討がなされた。

第10回 教養教育院連絡会議

日時：平成24年3月5日（月）13：00～

検討事項

1. 今年度の検討事項について

次年度の連絡会議の開催、年次報告書の作成、ホームページの管理、シラバスの確認作業、総長との懇談、教養教育院の在り方・将来構想、SLA、外国語教育、保健体育、次回の開催予定について検討した。

第10回 総長特命教授連絡会議

日時：平成24年3月5日（月）教養教育院連絡会議終了後

検討事項

次回の開催予定について検討した。

(2) 教養教育院総長特命教授懇談会

第1回

日時：平成23年4月5日（火）13：00～

検討事項

1. 担当授業時間などの確認と会議開催日について
2. 震災をうけての対応策について
3. 『読書の年輪』の配付と周知について
4. 平成22年度合同講義の報告書について
5. 平成22年度年報の作成状況

6. 新入生向けセミナーと合同講義について
7. 役割分担について
8. 次回の懇談会と（前年度の）送別会について

第2回

日時：平成23年4月21日(木)12:00～

検討事項

1. 教養教育特別セミナーについて
2. 年次報告について
3. 過半数代表者について
4. 学部オリエンテーションへの配布資料について
5. 合同講義報告の取り扱いについて
6. 読書の年輪の取り扱いについて
7. 鈴木さんの居室について
8. 歓送迎会について

第3回

日時：平成23年5月6日(金) 11:00～

検討事項

1. 教養教育特別セミナーについて
2. 合同講義報告の配付について
3. 年報について
4. 『読書の年輪』について
5. ホームページについて
6. 歓送迎会について

第4回

日時：平成23年5月19日(木) 12:40～

検討事項

1. 教養教育特別セミナーについて
2. 合同講義報告書の配付について
3. 年報について
4. 読書の年輪について
5. ホームページについて
6. 教養教育院共通経費について
7. 歓送迎会について

第 5 回

日時：平成 23 年 6 月 2 日 13:30～

検討事項

1. 年報について
2. 『読書の年輪』について
3. 年次計画について
4. 教養教育特別セミナーのテープ起こしについて
5. 合同講義について

第 6 回

日時：平成 23 年 6 月 16 日（木）12:40～

検討事項

1. 年報について
2. 合同講義について
3. その他

第 7 回

日時：平成 23 年 6 月 30 日（木）13:30～

検討事項

1. 年報について
2. 教養教育特別セミナー記録について
3. 合同講義について
4. 懇親会について

第 8 回

日時：平成 23 年 7 月 11 日（月）10:30～

検討事項

1. 年報について
2. 教養教育特別セミナー記録について
3. 合同講義について
4. 2012 年度版『読書の年輪』刊行の基本方針について
5. 事務補佐員の計画年休の取得について
6. TA に関する問題について
7. 懇親会について

第 9 回

日時：平成 23 年 7 月 28 日（木）12:00～

検討事項

1. 年報の発注について
2. 教養教育特別セミナーの記録について
3. 合同講義の企画について
4. 平成 23 年度納涼会について

第 10 回

日時：平成 23 年 9 月 8 日（木）13：30～

検討事項

1. 年報について
2. 合同講義について
3. 『読書の年輪』について
4. 情報システム担当者の選任について

第 11 回

日時：平成 23 年 9 月 26 日(木) 11：30～

検討事項

1. 合同講義について
2. 基礎ゼミの懇親会について
3. TA の募集について
4. 授業の履修学生制限の可能性について
5. 出席確認の方法について

第 12 回

日時：平成 23 年 10 月 13 日（木）14：40～

検討事項

1. 合同講義について
2. 後期の授業について
3. 『読書の年輪』について

第 13 回

日時：平成 23 年 10 月 27 日(木)14：45～

検討事項

1. 合同講義について
2. 『読書の年輪』について
3. 年報について

第 14 回

日時 平成 23 年 11 月 9 日(水) 14 : 45~

検討事項

1. 合同講義について
2. 『読書の年輪』について
3. 年報について
4. ホームページについて
5. 鈴木さんの居室について
6. 忘年会について

第 15 回

日時：平成 23 年 11 月 24 日 14 : 45~

検討事項

1. 『読書の年輪』について
2. 授業などについて
3. 忘年会について

第 16 回

日時：平成 23 年 12 月 14 日（水）14 : 45~

検討事項

1. 『読書の年輪』について
2. 総長との懇談会について
3. 授業などについて

第 17 回

日時：平成 24 年 1 月 12 日 14 : 45~

検討事項

1. 『読書の年輪』について
2. 年報について
3. 合同講義報告書について
4. 来年度合同講義の実施

第 18 回 (平成 23 年 1 月 25 日)

日時：平成 24 年 1 月 27 日(金) 14 : 00~

検討事項

1. 『読書の年輪』について
2. 年報について

3. 合同講義報告書について

第 19 回

日時：平成 24 年 2 月 22 日（水）12：00～

検討事項

1. 『読書の年輪』について
2. 年報について
3. 合同講義報告書について
4. 特別シンポジウムについて

第 20 回

日時：2 月 22 日（水）12：00～

検討事項

1. 『読書の年輪』について
2. 年報について
3. 合同講義報告書について
4. 特別セミナーについて
5. 学生との懇談会について
6. 授業の成績について

第 21 回

日時：3 月 7 日（水）12：00～

検討事項

1. 年報について
2. 『読書の年輪』について
3. 合同講義報告書について
4. 特別セミナーについて
5. 新任教員との顔合わせについて

第 22 回

日時：3 月 21 日（水）12：00～

検討事項

1. 新任教員・在任教授の顔合わせ
2. 年報について
3. 合同講義・特別セミナー報告書について
4. 特別セミナーについて
5. 次年度総長特命教授懇 談会の日程調整、役割分担、年間スケジュール等について

13. 外国語教育について

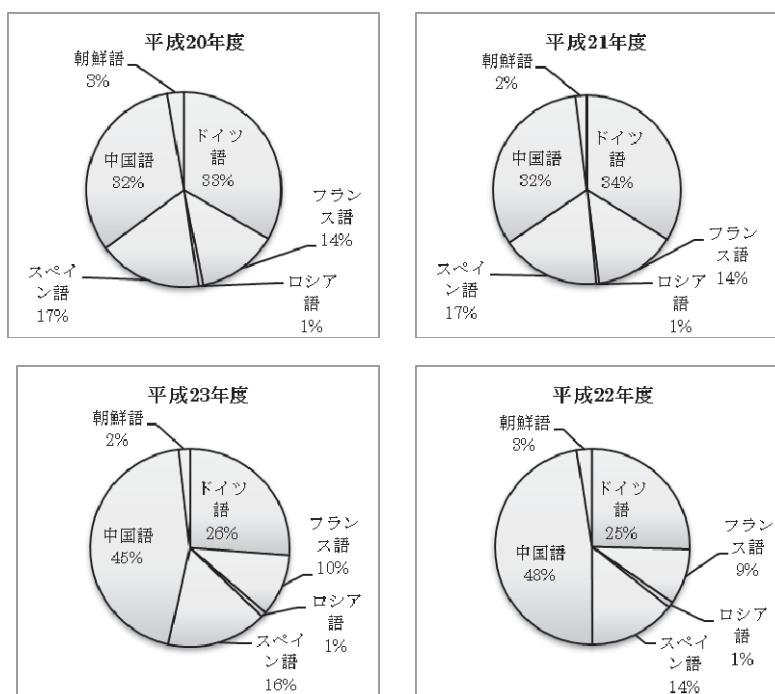
—初修外国語教育における履修者数と教員数のアンバランスについて—

浅川 照夫

初修外国語履修者数と語種別外国語教員数のバランスの問題については既に、「東北大学教養教育院年報（平成22年度）」において簡単なデータを紹介しながら、「初修外国語に対する社会や学生のニーズが大きく変化した今、大学全体として、長期的な予想を立てて初修外国語教育に必要な教員数とその人事の在り方等について、改めて検討すべき時期に来ている」と指摘した。今回はさらにデータを追加し、このアンバランス問題に早急に対応する必要があることを報告したい。

1. 履修者数の変化と教員数

初修外国語の語種別履修数が大きく変化しているにも拘わらず、依然として語種別の教員数の割合は変わらない。教養部時代は、大学教育における第二外国語はドイツ語もしくはフランス語を選択するというのが、教員や学生の間での常識であり、したがって、初修外国語はこの2つの語種の教員でほぼ占められていた。しかし、開講される外国語の種類が増え、国際情勢が変化するとともに、学生の履修希望がドイツ語、フランス語から次第に他の言語へと移り始めた。グラフ(1)は、本学1年次の「基礎初修外国語」の語種別履修登録者割合を年度別に示したものである。毎年、ドイツ語と中国語で全体の約70%を占め、スペイン語、フランス語がそれに続いている。著しい変化を見せているのが中国語で、50%に迫る勢いで増えている。



グラフ(1)

平成 23 年度を例にとって、1 年次「基礎初修外国語」(週 2 コマ履修、全学部必修) の履修登録者の実数をみると、中国語 2236 人、ドイツ語 1314 人、スペイン語 822 人、フランス語 508 人、朝鮮語 94 人、ロシア語 42 人となっている。2 年次「展開初修外国語」は「基礎初修外国語」の履修を前提とするので、「展開初修外国語」をカウントすると、履修者数の差は更に大きくなると思われる。

本学における外国語専任教員は、教養部改組および言語文化部改組時に国際文化研究科、情報科学研究科、文学研究科、環境科学研究科、東北アジア研究センターに配属された分属教員と高等教育開発推進センターに所属する外国語担当教員から成る。表(1) は部局別の専任教員数を示したものである。

部局別・全学教育外国語専任教員数 (H24/4現在)

	英語	ドイツ語	フランス語	ロシア語	スペイン語	中国語	朝鮮語	計
国際	19(-1)	8(-3)	4		2			33(-4)
情報	4	2	1					7
環境							(-1)	(-1)
東北ア				1		1		2
高教セ	9	1	1		1	2	1	15
文学	[1]	1	1					3
計	33(-1)	12(-3)	7	1	3	3	1(-1)	60(-5)

* ()内マイナスは不補充数

* []内は外国人教員(教養部時代から継続)

表(1)

括弧内の不補充数とは、予算その他の都合上、一時的に教員採用を控えている空きポストである。初修外国語の教員ポストは 31 ある。そのうち、ドイツ語とフランス語が 22 で 70% を占めている。中国語は履修者数が全体の 45% に達しながら教員数は僅か 3、スペイン語もフランス語より履修者数が多いにもかかわらず、教員数はフランス語の半分の 3 しかいない。

履修者数がオリンピックやワールドカップ開催などで一時的に変動することはあるが、グラフ(1)で明らかのように、本学の初修外国語履修者数の割合は決して一時的なものではない。これはほぼ定着しており、今後もこの傾向が続くと考えたほうがよい。したがって、初修外国語履修者数と教員数のアンバランスという問題が浮上するのである。

このようなアンバランスは非常勤講師数と 1 クラス当たり履修者数にも影響を及ぼしている。表(2)、表(3) が示す通り、中国語は他の語種と比べて、極めて劣悪な状態にあることが分かる。非常勤講師の割合が全体平均をはるかに上回る 56.60%、1 クラス平均履修者数でも本学外国語教育の基準サイズ 40 人をはるかに超える。ドイツ語とフランス語が基準の半分程度のクラスサイズであることを見れば、いかに厳しい授業運営をしているかが想像できる。

教員数と履修者数のアンバランスがこのように大きく開いてしまった最大の原因是、本学が教養部改組時に全学外国語教育の責任部局を設置しなかったことにある。教養部の外国語教員ポストは複数の部局に分属教員として配分されたが、責任部局がないために、その後の分属教

員ポストの人事計画が完全にそれぞれの部局に委ねられることとなった。部局の人事に部外者が介入することはできないので、結果的に、全学教育の外国語履修者状況は顧みられることもなく、教養部時代の語種別の教員構成が無批判に温存されてしまったのである。

全学教育外国語非常勤講師担当コマ数(平成24/4現在)

	英語	ドイツ語	フランス語	ロシア語	スペイン語	中国語	朝鮮語	計
総開講コマ数	410	134	62	14	64	106	22	812
非常勤担当コマ数	114	44	6	6	30	60	5	265
非常勤講師の割合	27.80%	32.84%	9.68%	42.86%	46.88%	56.60%	22.73%	32.64%

表(2)

平成23年度1クラス平均受講者数(基準値40人)

	英語	ドイツ語	フランス語	ロシア語	スペイン語	中国語	朝鮮語
1年次	37.5	26	22.6	12.5	30.3	50.7	12
2年次	39.3	24.1	17	8	31	62.8	13.5

表(3)

2. 授業担当教員(コマ数)調べ

学務審議会から毎年、分属教員ポストを抱える部局に対して実施している担当コマ数調べにも、アンバランスの原因の一端がある。本学の全学教育は全学協力実施体制のもと、各部局に対し、担当すべき全学教育科目の授業コマ数を義務付けて、「授業担当教員(コマ数)調べ」を毎年行い、どの教員がどの科目を何コマ担当するか問い合わせている。具体的に国際文化研究科の場合を例にとると、「授業担当教員(コマ数)調べ」は次のように要請され、外国語については、各語種別に担当コマ数が明記される。

平成24年度授業担当教員(コマ数)調べ:【国際文化研究科】の場合

担当原則 274コマ、400単位

- 担当科目: 文学16、社会科学科目24、史学科目8、哲学科目4、英語120、ドイツ語66、フランス語24、スペイン語12
- 外国語協力: 学務審議会外国語委員会において、上記担当原則の他に、次のとおり追加協力を行うことが承認されています。英語・ドイツ語・フランス語(分属教員現員数×2コマ)。スペイン語は既に各人で2コマご協力いただいておりますが、引き続きご協力願います。

外国語の担当原則の語種別数値の基礎となっているのは、表(4)に示す外国語専任教員担当コマ数である。教養部改組後に策定された申し合わせにより、各部局の外国語分属教員は1人当たり年間6コマ担当が義務付けられている。高等教育開発推進センターを除く各部局へ

の要請コマ数は分属教員数を基にしており、全学への分属教員ポスト返還がない限り、履修者数の増減に関わらず、要請数に変動はない。

このようなコマ数要請の仕方は、教養部時代の語種バランスが部局人事の恣意性によって崩れるのを防ぐという意味で一定の効果があったといえる。しかし、問題は、教養部改組後の外国語教育の変化に全く対応してこなかった、または制度上、対応できなかつたことである。部局側にとっても、語種 A 教員の後任人事は語種 A でなければならないという特定の語種に固執する意見の根拠ともなりえて、外国語教員構成が変わらない一因となっている。

専任教員担当コマ数：人数×1人当コマ数（総コマ数）（平成24/4現在）

	英語	ドイツ語	フランス語	ロシア語	スペイン語	中国語	朝鮮語	計
国際	20x6(120)	11x6(66)	4x6(24)		2x6(12)			37x6(222)
情報	4x6(24)	2x6(12)	1x6(6)					7x6(42)
環境							1x6(6)	1x6(6)
東北ア				1x6(6)		1x6(6)		2x6(12)
高教セ	11(160)	1(16)	1(12)		1(16)	2(32)	1(16)	17(256)
文学	[1(4)]	1x6(6)	1x6(6)					3(16)
計	36(308)	15(100)	7(48)	1(6)	3(28)	3(38)	2(22)	67(554)

* []内は外国人教員（教養部時代から継続）

表(4)

3. アンバランス解決への小さな一步

学務審議会外国語委員会は、初修外国語における教員数と履修者数のアンバランスを解決するために現在何ができるかを議論し、「授業担当コマ数調べ」の修正案を今年度1月の学務審議会に提案し、承認された。

コマ数調べの中で初修外国語が語種別に数値を決められていることは、本学の外国語カリキュラム編成上、教員数に関わりなく、予め開講コマ数が決定されていることになる。そうすると、分属ポストを抱える部局でも語種の変えることは困難になる。アンバランス問題は人事問題でもあるので、少なくとも、新しい人事において、積極的に語種を変えられるような柔軟性を与えることが必要である。そこで、外国語委員会は、外国語科目のコマ数調べを、それまでの語種別に固定したコマ数要請から、「英語」と「初修語」に分けて、以下のように総コマ数で要請するよう提案した。

授業担当教員(コマ数)調べ：【国際文化研究科】の場合

担当原則 274コマ、400単位

1. 担当科目：文学16、社会科学科目24、史学科目8、哲学科目4、英語120、初修語102
2. 外国語協力：（現状のまま）

この変更は、部局における英語と初修語の語種決定に大きな影響を与えるものではない。実際、これまで部局側の事情により、さまざまな方法で語種別の要請コマ数は柔軟に運用されて

きたからである。例えば、分属ポストを全学に返還し当該語種の担当義務を外す、ポスト不補充の場合はその分の非常勤講師手当を負担する、語種 A の何コマかを語種 B で補うなどである。「英語」と「初修語」を分けたのは、英語が必修であるため確実に定員を確保しなければならないこと、初修語の定員が英語に侵食されるのを防ぐことなどの理由による。語種によっては専任教員が全学で 1 名しかいない場合があるので、その語種の存続のため、例えば初修語 12（ただしロシア語 6 とする）のように例外を設けることになっている。

以上の修正を施したからと言って、実質的な効果を期待することは無理であるかもしれないが、部局に対して、研究科教育ばかりでなく全学教育にも配慮した自発的な語種決定を求めたいという全学の意思は伝わるであろう。本学の外国語教育は矛盾を抱えながらも、一応、滞りなく運営されている。しかし、学内的な制度改革を先延ばしにしても良いということにはならない。教員数と履修者数のアンバランス問題の抜本的な解決には外国語責任部局の設置、分属教員数に基づく全学教育科目担当の在り方の再検討という学内を挙げての取り組みが必要である。

14. 教養教育院活動（平成23年度）の自己評価と今後の課題

本年度は、教養教育院が発足して3年を経過したところから始まった。総長特命教授の任期が延長の可能性も含めて3年となっており、設置を構想した段階で考えられた一つの区切りを過ぎたところであった。3年間に順次加わった総長特命教授総勢6名のうち、前年度末で3名が退職し、3名が引き続きあるいは再度雇用されて残り、4月から1名が加わって総長特命教授は4名となった。これに教養教育特任教員3名を合わせた態勢で、今年度の活動が進められた。前年度に比べて2人減少したことは活動についてある程度の制約になったと感じられる。

人員では変動があったものの、教養教育院 자체の学内における制度および運営の上では大きな変化はなく、前年度開始したことを継承し、発展させた1年間であった。むしろ、今年度が東北大学の現総長体制の最終年度であり、今後教育研究ともに新総長のもとで新たな活動が始まることを考えると、ここまで4年間を振り返るべき時期だといえる。

本院の設置目的としては、教養教育の実施と支援を通じて東北大学の優れた人材輩出に貢献することが定められているものの、これを遂行するための具体的な方法を書いた規定は存在しない。教養教育の実施にあっては、各総長特命教授は学務審議会教務委員会の管理の下で全学教育の授業担当を行い、各特任教員はそれぞれに全学教育の充実に資する活動を行ってきたが、これらに関しては本年報の別の章の中に記した。

教養教育の支援に類する活動として、学務審議会の実施するFDや授業担当教員会議への参加と報告や意見提出などが挙げられる。ただし、これらは特に教養教育院であるために行っている業務とは言い難い。これら以外に、教養教育院の組織としての活動を4年間にわたり模索し試行し、徐々に広げてきた。それらの実施されたものについては個別に本報告書の章として取り上げたが、以下でも簡単に俯瞰し、改めて評価と課題を述べる。その上で未だに着手されていないものについては、まとめて課題として述べることにする。

1. 教養講義の充実への試み：合同講義・教養教育院カリキュラム他

教養教育院発足後しばらくの間、総長特命教授はそれぞれ独自の授業科目運営を行って、互いに緊密な情報交換をするものの、協力する体制は作られなかった。当初から講演会あるいはシンポジウムの開催を検討したが、学内から広く不特定の参加者を集める行事を行うことも、学内から広く協力を受けることも想像できる状況ではなく、時期を待っていた。その中で総長特命教授が協力して教養教育の充実に貢献できる催事を模索した結果、考え得る様々な形式の中から「合同講義」を選ぶこととなった。昨年度のことである。

オムニバスで複数教員が講義する科目は全学教育では稀ではないが、1回の授業時間内に専門分野の違う教員がひとつの大きなテーマで協力して講義を行うことはほとんどない。分野も違い感性も論法も異なる特命教授が、互いに補い合いあるいは互いにぶつかり合う講義をするならば、学生諸君に対して大きな刺激をもたらす機会となろう。また、教員が互いの講義を聞くことにより、質疑応答を通じて新たに生まれるもののが期待できよう。まず実現可能な形とし

て、昨年度、全員が講義を行っている総合科目の時間枠を使い、或る週に 3 人が短い講義を行い残りの 3 人が司会者あるいは討論者として参加し、別の週に役割を交代してもう一度行うということを、セメスター15 週のうちに計 2 回行った。通常のシンポジウムのパネル討論と似ているが、特にフロアの学生からの質問や意見を促し、これにより大変興味深い学生と総長特命教授との対話が生まれたことは、大成功と言うべきである。教養科目的授業では双方向性を取り入れることが重要であり、このように実施できたことを高く評価したい。聴講する学生は基本的には、総長特命教授が担当する総合科目の履修者であるが、他の一般の学生や教員にも広く参加を呼びかけた。

本年度は、1 セメスターの初めに実施した後述の教養教育特別セミナーと類似の催事となることから合同講義は 2 セメに 1 回だけ、昨年度と同様に行った。テーマは、学生が共通に興味を持ちやすいもの、現在の我々共通に重要な問題を選んだ。詳細は本報告書の別の章に記述したので省き、ここでは課題と今後の可能性を述べる。

通常の授業時間枠の中で行ったため、時間の制約があった。活発に行われた討論をさらに充実したものとするのにはすこし時間が延長できるとい。学生からのレポートには時間があれば自分も発言したかったという記述が見られている。

学生からのレポートは総合科目的課題のひとつとして提出させているが、内容が整っていて埋もれさせるには惜しいものも多く見られる。報告書に収録できるようにしておくと良かったと考えている。

合同講義の出席学生は、現実には総合科目受講者に限定されるため、総長特命教授数に影響を受ける。今年度は昨年度に比較して少なかったが、総長特命教授の人数の充実はその意味でも望まれる。また、総合科目受講者でない一般の学生の参加が得られることも望ましい。あるいは、総合科目的時間帯が夕方でなくもっと便利な時間帯に設定できれば助けになる。

学生の積極的な姿勢が討論の活発さから窺えるが、これを更に進めて、学生の代表者に講義のように準備した発表をしてもらうこともできるのではないか。実施が 2 セメスターであることを考えると、全く不可能では無かろう。

教養教育の充実のため、合同講義の他にも従来とは異なる形式の授業を総長特命教授の協力で行うことを検討しても良いであろう。形式とカリキュラムを現在のままとしても、協力によって教養教育院の教員が提供する科目構成の見直しが可能ではないか？より多くの総長特命教授を招聘することにより、教員の専門分野構成や興味や能力などの多様性が増し、教養教育院としての教育理念・目標・目的のもとで提供科目構成を構築することが出来たならば、教養教育充実への大きな貢献となろう。

2. 教養教育への意識普及の活動：読書の年輪・特別セミナー他

昔から教養と関連付けられてきたものに読書がある。良く本を読む学生がいることも確かだが、一般に現在の学生達は余り読書をしない。教養教育院の活動として学生への読書を勧め、具体的な書籍の紹介を行った。今年度で 2 回目となる「読書の年輪」の刊行と新入生全員への配付である。取り上げる書籍の選択や評価は教員それぞれの価値観に依存し、また全体として

も偏りがあるかも知れないが、学生に読書を奨めるのみならずこれを通して総長特命教授の教養教育への思いを伝えているものとして意義が大きいと考えている。具体的な説明は別章にゆずり、ここでは評価と課題を考察する。

このような小冊子は適時に渡すのでなければ利用されにくい。今年度は、東日本大震災のため学年の開始を1ヶ月ほど遅らさざるを得なかった。そこで「それまでの間、学生達は期待・待ち・焦りなどいろいろな感情をもって過ごすであろう」と考え、その時期に合わせて学生達の手に届けることにした。後日学生達に尋ねたところ、学生たちが目を通した割合は昨年度に比べ確実に上がっていたことが分かったが、このことを今後の参考にしたい。さらに、書籍の紹介はひとつの形であるが、他にも出版物を作つて配付することは考えられてよいであろう。

入学時には、学生に対して多様なオリエンテーションを行う必要がある。現在では、全学の短いオリエンテーションのほか、学部によってはしっかりと時間を確保して行われているが、教養教育についてのオリエンテーションは行われて来なかつた。実務的な科目選択の指導もさることながら、何をどのように学ぶべきか、また、大学での4年間のその先まで見通す意識をもたせる機会が必要ではないか。このような考えで、新入生を対象とした「教養とは?—東北大学生に考えてほしいこと—」をテーマに特別セミナーを開催した。形式と内容は、前年度の第2回合同講義を踏襲したが、広く新入生の参加を期待してマルチメディアホールで行った。200人を超える参加者があり、討論も活発に行われて大成功であった。

教養と東北大学の教養教育について学生諸君に残した影響は多大なものがあろう。また教養教育院の存在感を強めた効果もあったと考えている。そのためとは断定できないが、総長特命教授が担当する授業科目の履修者が例年に比べて多かつたことは事実である。

今後このセミナーはその趣旨からして大学の公式な行事として行うべきものと考えられる。実際、平成24年度は教養教育特別セミナーとして学務審議会・高等教育開発推進センター・教養教育院共同主催で行われることとなった。大きな規模で行うために参加学生を確保できる方法を模索しているが、現時点では有効な方策は見つかっていない。

3. 広報活動：年報・ホームページ他

設置初年度は中間報告を年度内に刊行、以後は年報を年度終了後早めに刊行する努力を続けてきた。なるべく忠実に記録を残すことと、とくに学内や場合によっては学外の関連する諸組織や人々に対して教養教育院の存在を広報すること、出来れば今後の参考となる意見等を得たいこと、が目的である。学内の部局やセンター等のようには定例的な評価を受ける仕組みがないことから、自己評価であると同時に外部からコメントを得るための資料でもある。今後は、広報用に別途読みやすいものを発行するとか、評価を受ける仕組みを整備するとか、記録として考察を加えて後に役立つようなものを作成するなど、展開させていくことが望まれる。

教養教育院ホームページを、発足2年目に開設した。内容を設置の趣旨・目的・経緯の説明と所属教員の紹介に限つており、更新は年度ごとに行うのみで推移した。本年度は、前年度から準備していた英語版が公開されたが、残念ながら、年度更新ができなかつた。

4. 教養教育特任教員が主導する活動

スポーツ科学教育について

スポーツ科学教育の目的は以下の通りである。

- ①生涯にわたる心身の健康を維持するための知識・技術を習得する。
- ②他者とのコミュニケーションを必然的に持たせる。
- ③リーダーシップを育成する。
- ④本学の「教養教育の理念」の重要性を「武道の理念」を通して学ぶ。
- ⑤日本古来の伝統を知ることで国際比較観点を持たせる。

東北大ではほぼ全学部でスポーツ A が 1 単位必修であり、入学後 2 年以内に履修する。またスポーツ B も選択科目として開講され、2 年生以上が受講することができる。全学教育の中でスポーツ科学教育は共通科目に分類される。共通科目の目的は「現代人として不可欠な能力と基本技能を養う」ことであり、具体的には社会的倫理性、主体的判断力・行動力、コミュニケーション能力、国際的コミュニケーション能力、他文化理解力の獲得、心身の健康の維持・増進が目標として掲げられている。授業におけるスポーツや武道によりこれらの能力が改善することが望ましいが、実際には達成することはできない。しかし、スポーツや武道を続けることによって上記の目標が達成できることに気づくことができる。その教育効果は大きいと考えられる。

SLA（スチューデント・ラーニング・アドバイザー）システムと外国語教育とについては、本報告書のそれぞれの章に記す。

5. 未着手の検討課題

教養教育院発足後 1 年を経過した段階で、手探りながら進めていた活動を振り返ると同時にその後のことを考えて、様々な検討課題を年報の中で提示した。解決されたものもあるが、教養教育院の責務であるか否か判然としないものやその後の年報において示されたものを含めて、現在もまだ検討課題は多く存在する。

授業教材作成や整備について平成 20 年度の年報で課題を述べた。秘書の配置が行われたこと、担当する授業科目ごとに配置される TA（ティーチングアシスタント）が教材の作成をして効果があったこと、などは成果としてあげられるが、今年度は大きな進展がなかった。

学生の学習意欲に応える自主的学習・研究活動への支援については、既に昨年度から SLA の制度が始まり、SLA サポート室が中心になって進められ、教養教育特任教員の水原克敏教授が担当している。

学生の間にある要望や意見のくみ上げと学生の意識の把握に関しては、教養教育院のなすべき役割は明確ではない。総長特命教授・特任教員はその他の授業科目を担当する学内の多くの全学教育担当教員と比較して、講義室において接触する学生の数が非常に多い。学生の挙動や意識はある程度よく見えている。しかし、系統的にその蒐集を行う、或いは学生に積極的に発信させる、などの仕組みはない。授業後に提出させるミニットペーパーやレポートからくみ取

ることが可能であるとしても、そのための時間的余裕が与えられていないことは残念である。

全学の教養教育担当教員との連携や協力について、構想がありながら未着手の課題としては、授業実施事例に基づく情報発信、授業改革や授業公開、何らかの広報手段による授業関係情報の共有などが挙げられる。基幹科目担当教員のメーリングリストが学務審議会科目委員会の主導で作られているが、活用されていないことは残念である。始めるトリガーがかからないのが現実の状況であろう。

以上に記した課題の解決には、教員が調査し検討を重ねることが必要である。それに限らず教養教育院としての活動など、授業以外に総長特命教授に期待されて良いと考えられる業務が存在するが、そのような業務に関わる時間的余裕がない。これには、担当するコマ数と受講学生数の多さが大きな要因となっている。例えば、ある総長特命教授は 2 セメスターに 5 コマを担当し、合計で約 700 人の受講生を持っている。毎回のレポートの整理や、毎学期に加除修正する講義内容の仕込み、など日常の忙しさは総長より特命を受けているから当然とは言え、かなりのものである。このような状況は、担当教員による授業管理の改善による他、制度としての解決も図られねばならない。

教養教育院の活動をさらに活発化するためには出来るだけ早い時期に施設を整備し、まとまった場所に教員の研究室と共通室を設け、教員間の連携がとりやすく、学生から見てアクセスしやすい環境を実現することが望まれる。また、4 年を経過して未だに「東北大学教養教育院」のネームプレートが存在しないことは、大変残念なことである。

管理運営に関して、総長特命教授はその責務から外れるものであるが、発言や提言をするべき機会があれば活かすことが望まれる。院長を通じて学内に意見を述べたり、総長懇談会の席で総長に直接意見を伝えることは可能であるが、大学として教養教育改革を進める場合には、貢献を求められて然るべきである。これに関して、学内規定で教養教育院について定められていることが曖昧であることが、教養教育院に関して本学としての課題になっていることを付言したい。必要な教員数、支援体制、施設、制度などの設計・整備が急務であることを初年度の年報で述べているが、これを再度述べて結びとする。

15. 東日本大震災と教養教育院

(1) 東日本大震災のその日・その後の通常に戻るまでの教養教育院

海老澤 丕道

私は3月11日のその時間、デスクでパソコンに向かい書きものをしていました。揺れは大きく、デスクの上のものやパソコンラックの上で液晶ディスプレイが不安定で倒れるように思い、揺れが収まるまで押さえるつもりで、構えていた。しかし、パソコンラックはキャスターのロックにもかかわらず揺れのために前後左右に動き出し、元の場所からずれていった。書棚の本やファイルが前の方にせり出してきて、落ち始めた。キャビネットの上に載せていました古雑誌を縛った束がいくつかどさっと落ちてくる。いつものようにすぐに揺れが止まれば、こんなにはならない。未だ続く未だ続く、と呆れるほどの長い時間揺れが続き、徐々に落下物がテーブルや床を覆い始めた。しかし、照明が消える訳ではなく、壁が落ちるでもなく、ドアがひしやげるでもなく、いつもの地震のいくらか規模の大きい、ただ長く揺れたなくらいの印象だった。

揺れが止まった。一つには、あとになって部屋から出られなくなる場合に備えようと思い、また一つには、廊下の様子、他の部屋、建物の外見などを確認したいと思い、部屋の中の服装のままで廊下に出た。外が寒いことは頭になかった。廊下に人の姿はなく、消火設備の扉が開き放しになり、火災警報が鳴り続けていたのが異様だった。階段を下りると、1階に出るところの防火壁が閉じてしまっている。一瞬不安になったが、力をそれほど入れずとも扉は開いた。1階の廊下にも人影はなかった。外に出て、人影を探して東棟方面を見ると国際文化研究科の事務職員の姿があった。管理棟と講義棟の間に、退避した教育・学生支援部職員を中心とする人々が見え、合流した。

皆が見上げている方に目をやると、合同棟の屋上設備のペントハウスが傾いている。折れた柱と壊れた壁が見えた。初めて怖さを感じた。まもなく雪が舞い始め、どなたかの傘に入れていただいた。地震についての詳しい情報はなく、ただただ時折来る余震にざわめきながらしばらく様子眺めが続いた。余震は二度ほど大きなものを感じたかと思う。3時半を回ったころ、寒いのでコートを取りに部屋に行くことにした。これは本来は危険なことであるが、先に退避したときの建物の様子を思い出して、何とかなると判断した。部屋に入ると、出たときは全く異なり足の踏み場のない有様だった。コートを着てヘルメットをかぶり携帯電話を持ち外に出た。自宅に車で帰ることを考え、カバンに若干の書類とパソコンを携えて、一度駐車場に行き車の中にそれらを置き、合同棟西側に集まっている人々に合流した。携帯電話はウィルコムのPHSだが電波圏外状態で使えず、ワンセグのTVは受信できたが、設定ミスで音声が出ないことと、電池を温存するためとで、切ってしまい、外部の状況は把握できなかった。一緒にいたどなたかがTVによる情報として、仙台駅が封鎖されてJR線は利用できないと話していた。しかし、津波の惨状についてはその時点ではほとんど情報がなかった。

教養教育院の教職員との連絡はなかなかとれなかつたが、この時点で工藤教授と秘書の氏家さんと合流できた。どなたか部屋に行って荷物をとってきたい人のために使いたいとの氏家さんからの要請でヘルメットを差し上げた。国際文化研究科の布田教授がスーツだけで寒そうにしているのを見て、コートで十分に暖かい私は、カーディガンをお貸した。

次第に暗くなり、揺れも収まったように思われたので人々は動き始め、私も帰宅することにした。いつもの帰宅コースをたどることにした。キャンパスの北西側出入り口から川内公務員住宅側に出て、美術館近くの交差点に向かった。瀬橋方面に左折することは出来た。しかしその先は渋滞がひどく、瀬橋を渡り終わるまで30分以上、また尚絅女学院の前を過ぎて広瀬町の通りまでさらに30分以上掛かったが、全く止まってしまうことはなかった。そのあといくつかの交差点で停電のため信号機が止まっていて混乱もあったがなんとか通過でき、結局2時間あまりで真っ暗になった高森4丁目の自宅に帰着した。ローソクの灯りが迎えてくれたことは言うまでもない。

14日に出勤した。海野教授、工藤教授、木島教授と情報交換した。早坂事務員とはメールで連絡を取った。国際文化研究科棟は、まだ、立ち入り禁止で短時間だけ入り口で登録の上で入棟が許された。私は、部屋の様子を見てきたが、金曜日退去時と変化はなかった。停電は続いており復旧の日は未定であった。海野教授とメールの連絡のルートが出来た。14日深夜、柳父教授とメールで連絡がついた。15日深夜には森田教授とメールで連絡がついた。

15日午後1時に特命教授懇談会をおこなうこととして連絡をとった。柳父教授からは出られないという連絡があった。結局海野、森田、工藤、海老澤（この回世話人）の出席で開催した。震災をうけての対応策として、当面キャンパス内で活動ができないことを確認し、連絡を取り合うための電話番号・携帯電話番号・予備の携帯メールアドレスなどを共有し、直接連絡が取れない場合の佐藤信哉係長への仲介依頼、早坂事務員当面自宅待機、予定した行事の中止などを決めた。合同講義の報告書の担当者を森田教授とし、その他新年度の担当分担の割り振りを行った。年報の刊行時期を延期した。特別セミナーについて見通しの意見交換をした。

15日には、管理棟で水道が出るようになった。国際文化研究科棟の居住者はトイレを管理棟と保健管理センターに借りに行くことが当分続いた。

17日には秋葉教授と連絡がついた。

佐藤係長からの連絡を受けながら自宅待機が続いた。22日の連絡で、国際文化研究科は、東棟にあった事務室を西棟の講義室に臨時に移動し、ゼミ室・交流室を研究科長室・事務長室として活動を開始することになったこと、西棟は検査済みだが24日に整理と掃除を行うので研究室の整理と掃除などには24日出勤するとよいこと、などが分かった。通勤のために必須のガソリンの不足が問題であった。私は地震の数日前に給油してあり特に不足はなく、ほとんど待たずに入れられるようになった3月末に給油した。

22日には、高教センターの今後のことが決まり、事務室が講義棟A203・A204になることと、荷物の移転の予定がきまり、早坂事務員の事務書類や機材の運び出し、新事務机設営

などの予定が決まった。23日には森田教授が出勤して状況が明らかになった。実際には24日午後早坂事務員が出勤して荷物の運び出しを行った。早坂事務員は25日にも出勤して、新事務机の設定などが進んだ。また28日以後も出勤して4月1日で交代する鈴木事務員への引き継ぎ処理が30日まで行われた。

24日に秋葉、海野、森田各教授、私の4人は出勤して会食し、情報交換し、食堂で木島教授・関内教授と遭い、授業開始の日程について、また新任の総長特命教授（前教授）についての情報を得た。その後それぞれ研究室の片付けを開始した。電気、ガス、水道はまだ使えなかつたが、東棟も立ち入りできるようになっていた。渡り廊下は2階を除き、使用できない状態が続いた。合同講義報告書の再校が届き、森田教授が処理をした。

24日前には、教務課から特別セミナーを5月6日（金）に開催することについての打診があった。4月25日に学部別に入学式（オリエンテーション）をする計画を踏まえていた。しかし、午後には5月9日開催案、また健康診断など日程の調整の結果4月28日案が知らされた。しかし、3月28日～29日には流動化して、最終的には4月4日になって全学の新年度日程が決まり、それにしてがって5月9日に決まった。

26日には4月5日に第1回の懇談会を開くことが決まったが、退職する教授も含めての当年度に関する意見交換はメールで26、27日の週末に進められた。29日には電気・水道は復旧したが、5階ではなお断水が続いた。研究科内有線LANは31日によく復旧した。26日に海野教授、31日には秋葉教授が退職前の研究室撤収を完了した。

4月に入り、研究科棟の夜間・休日立ち入りもできるようになった。新任教授への辞令交付は1日に出来ず、4月4日に行われた。

(2) 私と震災

森田 康夫

私は泉区のショッピング・センター2階の通路で東北地方太平洋沖地震に遭遇した。ショッピング・センターはかなり長く大きく揺れ、私は膝をついて地震が終わるのを待ったが、揺れが止まるとガラスが割れ水が噴き出した。私の車はショッピング・センター駐車場の3階にあり、地震で2メートルほど動かされたが、幸い壊れずに済んだ。そこで、当日は泉のホテルに泊まる予定だったが、家族の安全を確認するため車で自宅に向かった。地震で信号が消えていたが、カンボジアで信号のない道路を車がどう走るかを見ていたので、短時間で川内まで戻ることができた。しかし仙台城址が崩れ八木山橋も通れないことが分かり、仙台城址から川内まで戻る途中で、隅櫓の近くを歩く妻に出会い、青葉台から朝鮮人学校に至る道を車で通り、無事自宅に帰ることができた。

自宅では食器が棚から落ち壁紙が破れ、停電、断水で、ガスも使え無かつたが、テレビやコンピューターに被害はなかった。幸い以前より自宅に食物や水を少し多めに備蓄していたので、食事を取り、ローソクを使って居間でその夜を過ごした。家族の安全は妻の携帯で確認できた。

車のラジオを聞いていたが、状況はよく分からなかつたので、翌朝八木山の東北放送まで

行って聞いたが、「テレビにはすごい被害が映っているが、未だ詳しい情報は入っていない」と聞いた。ラジオの電池を名取まで買いに行き、公衆電話から子供に電話を掛け、川内キャンパスに行き停めてあった妻の車を自宅まで運んだが、私が 1 年前にいた合同棟は、研究室の上のペントハウスがつぶれていた。

状況が把握できたのは、3 月 13 日の夜に電気が回復し、ネットワークが使えるようになってからであった。メールが使えるようになったので、東京や大阪の友人と連絡を取った。3 月 14 日には川内に行き、FD と送別会が中止となつたことを確認した。電話は、3 月 14 日の夜に使えるようになった。3 月 15 日には教養教育院懇談会を開き、同僚と情報を交換した。国際文化研究科の建物は立ち入り禁止になっていたが、5 分間入室が許され、必要な書類を取り出した。研究室は 3 月 24 日に使えるようになり、棚から落ちた本や倒れたパソコンを整理したが、これらは 4 月 7 日の余震で再度落ちた。合同講義の印刷を依頼していたカガワ印刷とは、3 月 23 日に電話で連絡が取れ、4 月 5 日に納入して貰った。

八木山橋が 3 月 20 日まで通れず、私の車はガソリンに余裕がなかったので、妻の車で川内や町に行った。私の車のガソリンが補給できたのは 3 月 26 日であった。水道が回復したのは 3 月 25 日、ガスが復旧したのは 4 月 16 日だった。そのため、川内キャンパスまで飲み水を貰いに行ったり、雪を樽に入れて溶かしてトイレを流すのに使ったりした。風呂については、作並温泉に行ったり銭湯に行ったりした。東京まで新幹線で行けるようになったのは 4 月末で、東京での会議に出席するため、高速バスで東京に 2 回行ったが、道路には段差がありバスはかなり揺れた。

東北大学の授業は連休明けから始まることになり、4 月は時間が空いたので、以前に依頼を受けていた線形代数学の教科書を書き、震災と原発事故について授業を行うために調べた。3 月は大変だったが、4 月は充実した時間が過ごせた。

(3) 私の 3.11 体験

工藤 昭彦

机の引き出しが次々に飛び出し、それを両手、両足で押えながら、椅子にへばりついているのがやっとだった。満杯の書架から轟音を発して書籍や資料が崩れ落ちる。耐震ビス止めのスチール棚があつという間に壁のコンクリートから剥がれ、入り口のドアを塞ぐ。「先生、先生、早く、早くこっちへ逃げないと」、秘書の氏家さんにかん高い声で再三けし掛けられるも身体が動かない。揺れが激しすぎて動けないのだ。素早く机を離れ、彼女が一時身を潜めたテーブルの周りも、瞬く間に滝のように落下する本で埋まる。「危ないから机に戻ったら」、と声を掛けたが、本の壁に囲まれ彼女も動くに動けない。恐怖の時間のなんと長かったことか。

激しい揺れが途絶えた合間を縫って廊下に出たものの、それまでが一苦労。ドアの隙間が狭すぎて、細見の彼女は難なくすり抜けたが、メタボのわが身は容易でない。やつとの思いで着の身着のまま部屋を抜け出し、余震が続く中、たどたどしい足どりで 5 階から階段を降り、中庭へ避難する。それにしても寒い。客待ちのタクシーに潜り込み暖を取らしてもらう

が、激しい余震で車体は前後左右に大揺れた。不安気に身をかがめる何人かの人たちと、片言で励まし合いながらしばらく中庭での避難が続く。

小康状態になったのを見計らい、事務局員の指示でコートとカバンを取りに再度5階へ。与えられた時間は僅か5分。瓦礫のような本の山から目的のものを必死で引きずりだし、這這の体で引き返す。車で帰ろうと思ったらポケットにキーがない。部屋に置きっぱなしだと気付いたがもはや後の祭り。方向が一緒なので乗りませんか、親切に誘っていただいた車に便乗しホッと一息つく間もなく、渋滞ですぐさま車はストップ。あえなく駐車場に引き返し、同乗者3人で歩くことにした。

なごり雪とはほど遠い、みぞれ混じりの冷たい雪に打たれながら、裏通りを縫うようにひたすら歩く。心配なのは我が家のこと、家族のこと。両親と同居するのに、急いで買った中古住宅は築30年近く。この揺れだといつ倒壊してもおかしくない。不安は募り、気は焦れども、日頃の運動不足がたたり、八甲田雪中行軍をふと思い出すほど、足どりは重くなる一方だ。何度か送信するも、携帯は相変わらずつながらない。途中で事務の彼女達2人と別れ、やっとの思いで我が家にたどり着いた頃、とうに日は落ちていた。

「大丈夫か」、必死の問いかけに返ってきたのは、ケロッとした顔で「何ともないよ」と拍子抜けするような妻の声。おそらくあの時は気が動転し、放心状態が続いていたに違いない。しばらくして彼女から恐怖の体験を連発で聞かされるようになるからだ。

幸い断水はなかったが、停電は2週間ぐらい。ガスの復旧はもっと遅れて1カ月以上もあとだった。延々と続く非日常的な暮らしは、戦後生まれの私にとって、初めての過酷な体験だ。ただ、そんな思いもテレビで大津波の悲惨極まりない映像を見るまでのこと。

あれから間もなく1年。復旧・復興は、掛け声とは裏腹に随所で足踏み状態が続く。大規模半壊の自宅も、ようやく取り壊しが始まったところだ。

(4) 被災学生の亡き友人への想い、講義

前 忠彦

例年からひと月遅れの5月に始まった新学期は、教員も学生も頻繁におきる余震への不安と大震災の被災者・被災地への複雑な思いを胸に、例年の華やいだ雰囲気とは異なる中でスタートした。

学生は概ね真面目に授業に取り組み、いわゆる「5月病」と呼ばれる入学直後の緩みなどは見られなかった。そして授業を通して学生たちと接するうち、それぞれが大震災に対しいろいろな思いを胸に受講していることが折に触れ伝わってきた。

6月末の頃であった。5時限の総合科の授業を終えたあと、一人の女子学生が私のところへやってくると、次のようなことを話はじめた。「自分は、津波で小学校から高校まで一緒にいた無二の友人を亡くしたこと」。「その友人は本学への入学が決まっていたこと」。

「友人の葬儀が来週あること」。「その折に大学から弔意が寄せられたら友人もきっと喜ぶと思う」等々であった。私はその場でこれらの事情と学生の気持ちを、亡くなった友人が入学予定であった学部の学部(研究科)長に伝えることを約束した。そして後日に行われた葬儀に

は、研究科長からの弔電が届けられた。私も、亡くなった本人に宛てた短い手紙と本、大学のロゴマーク入りのマグカップ等を靈前に供えてもらうことを学生に託した。葬儀への参列は当時の交通事情等から難しかった。伝えてきた学生自身も被災者で、家族は無事だったが家は流されてしまったとのことであった。

季節が移っても「震災」が頭から離れることはなく、格別な思いとともに講義をした1年であった。

(5) 大震災から学ぶ

浅川 照夫

世界の情勢を知るには日本の新聞に目を通していくれば充分なのだが、外国の報道に接すると、また違った新しい発見があり、考えさせられることが多い。2011年3月11日以降の1ヶ月間、インターネットのNew York Times、CNN、VOA、BBCは地震と津波と福島原子力発電所の報道で埋め尽くされた。1日の午前と午後でニュースが入れ替わるスピードである。私たちには身近だけれども世界にとっては耳慣れない地名が、アルファベットと外国訛りの発音でインターネット上に飛び交っていた。世界が東北の悲惨な状況を伝えているのだから、時間の許す限り、読みつくし聴きつくしたいと思った。

世界が何をどう伝えたかは今さら繰り返すまでもないが、溢れる情報の中で特に考えさせられたのは、外国のメディアがこぞって、被災にあった人々の我慢強さ、礼節、協力し合う心を称賛していたことである。3月25日付New York TimesはRIKUZENTAKATA, JAPAN発の記事のなかで、“To an outsider, much is striking about Japan’s response to two weeks of serial disasters: the stoicism and self-sacrifice; the quiet bravery in the face of tragedy that seems almost woven into the national character.”と書いていた。

民主主義の基本精神は「個」の確立と「他」の尊重にあると思う。両立が難しいことは、大災害時に多くの民主国家で放火、暴動、略奪などが頻発するのを見ればわかることがある。まるで現代社会は、自分の利益優先しか考えない、倫理観を喪失した欲求不満の人々で満たされているかのようである。日本も「他」を差し置いて「個」が跋扈する社会に傾斜しつつあると言われてきたが、図らずも、今回の大地震は、「日本人の国民性に織り込まれている」美德を世界に知らしめることとなった。西欧社会でボランティア活動が盛んなのはキリスト教的精神の表れだと言われるが、この日本の美德は宗教的観念に基づくものではないと思われる。一体どこからきているのだろう。もしかすると西欧社会に追随するために日本が捨て去ろうと躍起になってきた日本の土着思想なのかもしれない。大災害に接して、その排他主義や個の否定といった悪い面ではなく、寄合や祭礼、青年団組織などに見られる相互互助的精神が、織り込まれた深い意識の層の中から自然発的に表面に現れ出たのではないか。

東北の人々が世界に示した美德や被災地の首長たちが示した卓越したリーダーシップに、人間としての良識、教養の根源を感じたのは私だけではあるまい。世界が驚いたということは、ある意味で、日本人の美德は極めて日本的なものであるが、普遍的なものに通じる新しい人間観、教養思想を予見しているのかもしれない。大震災から1年経って、がれき処理

が遅々として進まない。今は被災しなかった人々の徳が試されている。日本人の美德がどこからどのように生まれたか知らないが、私たちの心の奥深くに確かに内在していることを、被災した人々が身をもって示してくれたのである。教養の何たるかを考えるとき、この美德を忘れてはならないと思う。

(6) 私の被災体験

水原 克敏

3月11日金曜日の午後、明日は東北教育学会ということで台湾から10人ほどの研究者を迎える準備をして教育学研究科8階の研究室にいた時である。ゴーと地鳴りのような音がして激しい揺れが始まった。ほかに院生2人とともに本棚を押さえようとしたが、あまりの激しさで部屋のテーブルの下に隠れるように私は叫んだ。

一人の女子院生（台湾からの留学生）は、とっさにドアを開けてからテーブルの下に潜り込んだ、この処置が後で脱出を可能にした。もう一人の院生は廊下に飛び出していった。最初の30秒では、テーブルが良いか、廊下に逃げるのが良いか迷ったが、そのうち激しい揺れで、ひたすらテーブルの下で耐えることになった。

地震は何分続いたのであろうか、私は15分ほどに感じたが、実際は3分程度だったのであろうか。まるでジェットコースターで3周したような感じで、1周が終わって止まるかなと思ったら、ブレーキの壊れたジェットコースターがスピードを上げて2周目に入ることになり、そして今度こそ止まるとと思ったらさらにスピードを上げて3周したという感覚であった。ビル全体がブンブンブンと鉄骨を振り回すような音を立ててしまつており、11階建のビルが半分に折れて落ちるのではないか、これは地震ではなく、怪獣が下からビルを持ち上げて振り回しているのではないか、ここで死ぬことになるのだろうか、冗談だろう、いろいろな想いがよぎった。

本棚の本が落ち始め、さらには両側に天井まである本棚が崩れてきた。本がどんどん落ちてきて私は身動きがとれないで、このまま潰されるかと思った。頼りとするのはテーブルだけで、その足は上品でか細く命の危険を感じた。今後は、細い脚が良いなどと言わないようしようと心に誓い、潰れないで持ちこたえてほしいと願った。短い時間の中で家族の顔が浮かんでは消えた。

少し離れてテーブルの下にもぐっていた女子院生が、気丈夫にも、私に大声で何度も注意を呼び掛けていた。私は、早く廊下に脱出すべきか、このまま居るか幾度か迷ったが、まもなく大量の重い本に押し潰されて手足は動かせない、首だけがテーブルの下でわずかに動かせるという状況に陥ってしまった。

地震が終わってみると部屋全体に、コピ



一機の高さまで本が重なり、その上に両側の本棚が重なり、テーブルの下の狭い穴倉に私は閉じ込められて居た。知らないうちに指から血が出ていた。留学生の彼女は、早々に抜け出して、ビルから出るように私を促した。この時点では彼女は気丈夫であったが、広場に立つてみると、彼女は震えが止まらず体が硬直していた。

中庭の広場に文系の全員 300 人ほどが集まったが、余震が強いのでビルが倒れそうに感じ、萩ホールの広いガーデンに移動することになった。全員が無事であることを確認することになったが、誰がビルに居たのかわからないので、確認しようがなく、11 階ビルの全室を確認するための要員が派遣された。皆で恐怖の経験を語り溜息をついたりしているうちに、簡単に 1 時間がすぎた。ビルに残されている人がいないことが確認され、ひびの入った危険なビルは閉鎖され、全員が帰途につくことになった。

しかし、帰ろうとしても、崩れた本棚の下に、鞄やコートがあり、もはやそれを見つけることは困難であった。それに余震がひどく、これ以上、部屋にいると、挟まったりして動けなくなる危険があったので、早急に帰ることにした。しかし、どうやって帰ったらしいのか、それに、台湾の研究者たちが 10 名ほど居り、私だけが帰るわけにもいかないので、仙台駅近くのホテルまで同行して歩くことにした。道路は大渋滞で信号も止まっており、とにかく歩くしかなかった。不思議なことであるが、先ほどまで晴れていた空であったのに、にわかに吹雪となってきた。今にして思うと、原発の黒い雪ではなかつたのだろうか。コートも手袋もないまま、台湾からの研究者たちと共に吹雪の中を行進した。

仙台駅に着くまでに、何度も街の人たちに聞いたが、この地震はどこの地震なのか知ることができなかつた。関東大震災なのか、それとも宮城県沖地震なのかによって、今後の救援が違ってくると思ったので、東京が無事であることを念じた。

このような災害が起きた時には、東北大大学や市役所など公共施設は、NHK の災害報道を流してほしいと思った。いったいどんな地震だったのか、その日は分らなかつた。だから、津波が来ていることなど知る由もなかつた。

ようやく帰宅した後の生活が大変であった。隣近所で倒れた家もあり、我が家も部屋の中はぐちゃぐちゃであり、温水器も倒れ、後日、家の修理を含めた工事代は見積りが 200 万円である。しかし、2012 年 3 月 26 日現在でも、工事が入る見通しは立っていない。



不思議なことに、私は罹災証明書をとるのを忘れてしまった。テレビで悲惨な状況にある人達を見ていると、自分はそれほどではなかつたので、同情の涙は流しつつも自分が被害者であるとはあまり自覚していなかつたのである。半年が過ぎて 9 月になり、余震がおさまり、ようやく片づけようと思ったところで、我が家が危険な状況にあり、罹災証明をとるべきことがわかつたのだが、町役場へ申請する締切日の 8 月 31 日は過ぎてしまつて

いた。

被災生活で辛かったのは、水と電気そしてガソリンがないことであった。水は約 2 週間断水で 23 日まで、電気は約 1 週間停電で 16 日に通電、そしてガソリンを長期間入手できないことであった。ハイブリッドのエスティマは発電装置があり、1500W まで普通のコンセントで使うことが可能であったが、福島原発の事故があり、約 60 キロ圏内にあるので、ガソリンを発電に使わないで退避用に温存した。すでに米国は 80 キロ圏内から脱出するように米国人に指示しているので、本当は危険な状態にあるに違いないし、さらなる爆発がある場合には、家族を乗せて避難しなければならないと考えたからである。原発事故の収束の可能性が感じられたところで、エスティマから家の電灯につないで、夜を明るくすることができた。明るい電気がどんな人の気持ちを明るくするか、深く実感することができた。

もっとも辛かったのは断水である。町の中心地の文化センターで 10 リットルの配給があり、これをもらうために約 1 時間は待たねばならない。5 人生活で 20 リットルのポリ容器の半分しかもらえない、料理にしか使えず、トイレなどにはとても足りないので、毎日不愉快な生活が続いた。10 リットル程度でも、これを自宅までぶら下げて運ぶのはかなり重かった。この水をもらうことが、私の毎日の午前の大仕事であった。

こんな不自由な生活の中で、考えさせられることは多々あったが、今後、東海地域を初め全国的に大災害への対応を考えると、今回の総括と反省をしておくことが重要と思われる。日々の備えを怠っていけないということに尽きるが、自分の専門の教育分野で見れば、学校については多くの課題を残したことは周知の通りであり、きちんとした改善策を考えていきたい。

(7) 東日本大震災の日

藤本 敏彦

3月 11 日、午後 2 時 46 分。私は教養教育院の 22 年度の年報原稿を執筆中でした。それは椅子を突き上げる小さな揺れから始まりました。瞬時のうちに大きな横揺れとなりその後の惨劇は皆様ご承知の通りです。はじめはすぐに終わるだろうと楽観をしていました。揺れの最中はコンピューターの転倒を手で防ぎ、近くにあったテレビ型のモニターを足で支えていました。揺れが収まった時、自分では比較的平常心のつもりでしたが足の震えが止まらなくなっていたのを覚えています。すぐに研究室から埃が充満する廊下に出て、英語担当の浅川教授とともに他の研究室の先生の救出に当りました。先生 1 名と TA の方が本によって開かなくなってしまった研究室に閉じ込められていたため、浅川先生と体当たりでドアをこじ開けました。最初はなぜ開かないのかわかりませんでしたが、すぐに書物によって内開きの扉がふさがれていることに気がつきました。私の部屋の書棚はロック式の戸棚であったため被害は少なかったのですが、本が散乱した研究室を見たときにはさらに恐怖心がおそってきました。何とか先生方を救出しひび割れた階段を降りるときには何も考えることができない状態になっていました。外に出るとラジオをお持ちの先生から大津波の襲来の情報があることを知りました。未曾有の大惨事の予報をなすすべもなく聞いておりました。各部署の方々がご所

属の教職員、学生が建物内にいらっしゃらないことを確認した後、徒歩で帰途につきました。それからの 1 週間は家族の保護と避難、職場からの最低限の機材の搬出などで過ぎてゆきました。木島副学長(高等教育開発推進センター長)からの集合命令が出され、正式に職場に復帰したのが 3 月 22 日でした。その間に「もっと何ができたのではないか」と今もよく考えます。4 月以降は民間のスポーツ指導者の情報基地としてささやかなお手伝いをしておりました。私はスポーツが専門ですがおそらくはこれからが復旧・復興に役立つことができるのではないかと考えています。大学での授業のさらなる充実はもとより、社会活動においてスポーツに携わる職業人のサポートを東北大学の一員として精一杯やっていこうと考えています。最後になりましたがこの震災で甚大な被害に遭われた皆様に心より哀悼の意を表します。

おわりに

教養教育院では、平成 22 年度末に秋葉、海野、柳父の 3 人の総長特命教授が退職し、平成 23 年度からは新たに前忠彦総長特命教授が加わった。事務補佐員も早坂美季子さんから鈴木かおるさんに交代した。平成 23 年度末には、創立以来教養教育院長を勤めてこられた根元義章理事が退職することになり、SLA などで活躍されていた水原克敏特任教授も退職することとなった。ここに教養教育院教員全員のお二人への謝意を記します。

平成 22 年度末に東日本大震災が起き、川内合同研究棟が被害を受け、教養教育院の 2 人の特任教員の研究室と事務補佐員の執務室が使えなくなった。そのため、2 人の特任教員は仮設の研究室に移り、事務補佐員は学務課の机を借りることになった。新幹線の全線開通が 4 月末になり、新入生が住むべきアパートの確保にも時間がかかったため、平成 23 年度の授業は連休明けから始め、前期の授業は 8 月の上旬と 9 月初めにも行われた。震災で東北電力管内の幾つかの発電所が止まったため、節電のため冷房温度を上げたが、学生は暑さの中でよく勉強していた。その他、新規企画として、連休明けに、教養教育院は新入生のために教養教育特別セミナーを行った。

この年報では、設立から 4 年を経た教養教育院について、その現状を報告するとともに、自己評価を行い、問題点の指摘も行った。教員が震災によりどの様な影響を受けたかも記録に残すことにした。今後、平成 24 年度からの新メンバーも加えて、この新しい組織を実あるものとすべく、本学における教養教育充実化の一翼を担っていく覚悟である。しかし、教養教育の充実は、教養教育院所属のメンバーによる努力だけでなしうるものではない。学内外の方々の熱きご支援とご鞭撻をお願いしたい。

(参考資料)

東北大学全学教育広報「曙光」からの転載

工 藤 昭 彦 2011 年 4 月号（第 31 号）
根 元 義 章 2011 年 10 月号（第 32 号）



定年後にして思う教養の三層構造

教養教育院総長特命教授 工 藤 昭 彦

教養教育院が企画した総長特命教授による合同講義で、たまたま一年生相手に教養について話す役割が回ってきた。かといって、教養教育全般について大それたことを語る素養はない。多少できるとすれば、専門の農業経済学からみた教養の話ぐらいか。そう思い、苦し紛れに以下のようなことを話してみた。

今にして思うに教養は、知る教養（知識力としての教養）、使う教養（応用力としての教養）、見抜く教養（洞察力としての教養）が相互に関連し合う三層構造を成しているのではないか。

私が目指した農業経済学の学問領域は広い。大学院に入った時、先生が「農業経営学やるんだったらオールラウンドプレイヤーにならないとだめだよ」といわれた。そのことの意味が今頃になつてようやく分かる。

しかも、農業経済学は応用学問。これをやるには、経済学という知識の引き出しから何かを汲み上げないと、話がうまくまとまらない。農業経営学も経営学から、農業史も歴史学からといった具合に、知識の引き出しが増えていく。この、汲み上げる引き出しを数多く準備しておくことが基盤教養ではないか。

いろいろなことを覚えておくというのも教養かと思う。しかし、何らかの目的を達成するには、仕訳と整理と習得と集積、これが大事になる。むろん、目的が異なれば基盤教養の引き出しの数もその中味も変わってこよう。

基盤教養の効用についてはバカの壁の圧縮。これは養老孟司さんのベストセラー本のタイトルである。いろんな解釈があるが、人は知っていること以上のものは分かろうとしない。だから、他人のことなど分かるはずがない。そういうバカの壁が脳の中に仕組まれている。そんなようなことではなかつたかと思う。だとすれば、目的に応じていろんなことを幅広く仕訳、整理、習得、集積しておくようにすれば、バカの壁は相当圧縮されるに違いない。

次に使う教養、応用力としての教養についてはこう考えてみた。例えば、基礎教養である経済の引き出しから、恐慌論を取り上げる。それを参考にしながら農業恐慌について研究する。一般的の経済恐慌は10年に一回とか、20年に一回とか、循環性があるといわれ、その理論的な説明が進んだ。

ところが農業恐慌の方は、まったく循環しない。つまり、非循環的な恐慌。一方は循環するのに、どうしてこちらは循環しないのか。両方を対比しながら考えていくと、なるほど農業恐慌は特殊な要因が絡んでいるので循環しないんだな、ということが分かつてくる。

逆に、農業恐慌の研究を続けていくと、経済恐慌の特殊要因として、これを無視できないことが分かつてくる。循環性の恐慌は商品経済のロジックである程度説明できるが、そうではない恐慌、例えば1929年の世界大恐慌、あれは循環性の恐慌では必ずしもない。恐慌の原因に農業恐

慌が深く絡んでいる。

そうなると今度は、農業経済の引き出しから農業恐慌の特殊要因を取り出して、29年恐慌の分析に活かすことを考える。その結果がまた恐慌の特殊要因として経済の引き出しに備蓄されていく。

そういう意味で、使う教養は、教養と専門の相互交渉の過程で互いに深められる関係にあるのではないか。使う教養はまた、相互交渉の技を習得する転換教養といつてもいいだろう。単にものを覚えるだけでなく、知識力の応用力への転換、応用力の深化による知識力の備蓄といった相互交渉の技を習得するという意味での転換教養である。

その効用はバカの壁の破壊である。研究上の目標、ビジネス世界の目標、皆さんの人生の目標など、いろいろな目標の達成を支援するといった効用もある。経営学で目標とは、締め切りのある夢だといわれている。先行き不透明な中で、新しい状況を切り開くといったビジネス戦略の構築にも、相互交渉の業は役立つはずだ。

見抜く教養、洞察力としての教養を磨くには知る教養、使う教養のフル動員が必要になる。例えば、農業経済学という専門分野を深化させていくと、どういう本質が見えるか、一例を紹介してみたい。

1929年恐慌は翌年日本にも波及し、都市も農村も惨憺たる状態に追い込まれた。こうした農村の危機は、国内だけでは解決できそうになかった。満州に行けば何とかなるということで、満州移民が国策として推進された。

当時、農村には「満州に行くときは貨物船だけど、帰りは飛行機で、そういう楽園が待っているぞ」といったビラが撒かれた。多くの貧しい人々が、満州国の防衛といった屯田兵的役割も期待されながら満州に移民した。そのうち大東亜共栄圏を旗印に、戦線がアジア全域へと拡大した。つまり農の危機といった専門分野の研究を通して、アジアへの戦線拡大の原因の一端をある程度見抜くことができる。

あとひとつ例を紹介してみよう。1960年、高度経済成長が始まる頃、農業就業人口比率は26.8パーセント。戦前だとこれが50パーセントを越えていた。2006年のデータは3.8パーセント。このように、農のマイナー化は急速に進んだ。日本の農業は、もはや各種経済指標で見る限り見えなくなりつつある。

ところが、昨年の10月に名古屋で開催された生物多様性の会議で、日本は「里山イニシアチブ」というメッセージを世界に向けて発信した。ただ、アドバルーンこそ上がったものの、崩壊の瀬戸際まで追い込まれている我が国の里山を復元するシナリオは見えていない。長期に渡って里山を支えてきた「農の危機」を開拓する目途が立たないからだ。

洞察力としての教養は、すなわち実践教養である。本質を見抜く実践教養の業の習得は、相対化と演繹的手法、この双方を駆使することが必要になろう。相対化というのは、絶対化し、それに溺れることを回避すること。演繹的手法は、ひとつの事象から他の事象を論理的に導出すること。農のマイナー化から生物多様性の危機を見抜くということである。

農業経済学はメジャーな世界の学問ではない。どちらかというとマイナーな世界、辺境の世界の学問といっていいのかもしれない。しかし辺境の世界からの眼差しは、メジャーな世界を相対

化したり可視化したりするのに有効である。

アメリカのノーベル経済学賞をもらったスティグリツが「世界を不幸にしたグローバリズムの正体」という本を書いた。アメリカというメジャーな世界に身を置く彼が、どうしてこういうことを書くのか。不思議に思って調べてみたら、彼は若いときにアフリカのケニアの大学で数年間教師をやっていた。その後、南アジアの貧しい途上国を何度も訪問し、グローバル化を単純に進めていけば貧しい国々が豊かになるというよりは、かえって貧しくなる。世界は不幸になると確信を抱いたようだ。途上国という辺境の世界からメジャーな世界を相対化することで、このような本を書くことが出来たのではないか。

ここまでくるとバカの壁は撤去され、片付けられるだろう。多様な意思決定を支援する力も身についてこよう。これから社会に出ていく皆さんには、これまでの受験勉強と違って、答えのない問題を解き、そのことを通じて新しい状況を切り開いていかねばならない。実践力としての教養を身に付けるよう、今のうちから心掛けて欲しいと思う。



東日本大震災を体験した

東北大学の役割

東北大学 理事（教育・情報システム担当）根 元 義 章

3月11日発生した東日本大震災は、東日本の広範な地域に多大な被害を与えました。大震災の犠牲になられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被害を受けられた方々にお見舞いを申し上げます。この大震災により東北大学も大きな被害を蒙りました。東北大学は地震発生直後より、速やかな復旧にむけた努力がなされ、また災害を経験した大学として災害をばねにさらに発展すべく、大学の構成員全員の並々ならぬ努力が続いている。震災後、6ヶ月過ぎた今、着実に進展していると思いますが、復興は長期間を要するもので、今後も全力で対応していかなければならないと思います。

1978年、宮城県沖地震を青葉山キャンパスの工学部電気情報系の8階の研究室で経験しました。自然の脅威を体験し、そして職員として復旧への取り組みなど、多くのことを経験せざるを得ませんでした。しかし、今回の東日本大震災は、これまでに経験することがなかった事態の連続でありました。教育面で振り返ってみたいと思います。学部学生3名（入学予定者1名を含む）が亡くなりました。勉学の途上にある前途洋々たる若者であり、誠に残念なことであり、心より哀悼の意を表します。今回の震災は、極めて広範な規模で社会インフラ、生活インフラの全てにわたり多大なる被害を与えました。このことにより大学の重要な役割である教育の実施にも大きな支障をきたし、東北大学も特例の措置をとらざるを得ませんでした。学生諸君の安全な環境を確保するためにも震災直後から休校措置をとり、また卒業・修了生諸君にとって一生の大変な思い出となる学位記授与式も中止をせざるを得ず、卒業・修了生諸君に申し訳なく思っています。4月に入ても社会インフラの復旧がままならず、学生諸君が安心して教育を受けられる状況の確保、確認に時間を要し、学年暦を一ヶ月延期いたしました。入学式は5月、第一セメスターは9月中旬までに変更し、入学式は部局単位での入学式に変更しました。4月からの入学を心待ちしていた新入生諸君には迷惑をかけることとなりました。授業開始が例年よりも約1ヶ月遅れましたが、授業期間は、質保証の観点から例年通りの15週を確保することとし、前期は夏季休業の短縮等で授業時間を確保いたしました。後期は例年どおりの学年暦となっています。

このような変則な状況で、今年度はスタートしましたが、学生諸君の学びに対する意識は例年以上に高く感じられます。例えば、今年の学部入学生について言えば、各部局で行われた入学式の出席率は極めて高く、新入生オリエンテーションの欠席者も少なく講演等に聞き入る態度が真剣でした。また入学式でも多くの学生諸君から震災を受けた地域社会の復旧、そして今後の社会の発展に貢献したい、貢献するのが責務であるとの力強いコメントが数多くあったと耳にいたしております。授業開始後、学生諸君は総じて眞面目に講義を受けているとする教員の声も多く聞

かれます。また、3、4、5月にはボランティアとして被災地での復興支援、また学内外での様々な復旧の支援活動に従事した学生諸君も少なくありません。自らも被災者にも拘わらず、その献身的な活動には頭が下がります。未曾有の震災を経験し、社会の抱えている問題点、課題が浮き彫りになり、そのなかで学生諸君が、人間として自らが行なう社会に対する貢献を自覚し、自らが行動することの重要性を強く認識している表れではないでしょうか。

大地震に連動した大津波、そしてあってはいけない原子力発電所の放射能漏出事故が複合した未曾有の大震災は、多くの課題を我々に突きつけました。極めて広範な地域が一瞬にして壊滅状態になり、人が生きるという、人間社会の存在の根幹が脅されました。今回の「想定外」の震災により、科学技術や研究、学問、高等教育の在り方が、ある意味で問い合わせられているのはご承知のとおりです。今回の震災から学ぶことは、まず自然災害の予知、災害対策は十分ではなかったことを深く認識し、また起きてはいけない人為災害が決して発生しない対策を講じができるように、科学技術の水準の更なる向上に努力が必要であることです。また災害後の復旧に人間の英知が発揮されるべきですが、複雑かつ多様な状況を的確かつ迅速に分析・解析し、最善の手段を見出し、行動することに対応できなかったと思います。このことは総合的に多面的に対応できる社会システムが整備されておらず、また的確な判断を下せる人材が十分ではなかったことを意味していると思います。

以上のこととは震災を直接体験した「被災大学」だからこそ十分に認識できることだと思います。この認識に立って、教員は、大震災にも対応できる人材の育成に、教育のあるべき姿を追求し実践して行かなければならず、学生諸君は、しっかりととした目的意識をもって教育を受け、自らを成長させていかなければならないと考えます。換言すれば、今回のような大震災から人類社会を守り、安心・安全を確保するための高度で総合的な知識と実践的な技術を持つ人材を育成し、世界に送り出すことが大震災を経験した本学の役割ではないでしょうか。そのためのカリキュラム開発を含む人材養成のシステム作りの準備が進められております。このなかでも教養教育は、総合力、人間力などを育成する基本であり重要な位置づけがなされています。教養教育は、分野・領域を超えた知識を身につけ事実を総合的に捉え理解し、企画し、そしてものごとの実行へと適切に対応し、世界をリードする人材に育成するための基盤でもあるからです。全学教育を受講している学生諸君も被災大学の学生としての自覚のもと、全学教育を究め、将来の世界をリードする人材として成長することを強く期待いたしております。

東北大学教養教育院年報（平成 23 年度）

発 行 平成 24 年 7 月
発 行 所 東北大学教養教育院
〒980-8576 仙台市青葉区川内 41
電話 022(795)4723
e-mail: info@las.tohoku.ac.jp